上田市文化財調査報告書第９５集

法楽寺遺跡

上田市川東地区農産物総合出荷施設建設に伴う

発掘調査報告書

第１分冊（本文編）

２００４．３

上田市土地開発公社

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第９５集

法楽寺遺跡

上田市川東地区農産物総合出荷施設建設に伴う

発掘調査報告書

第１分冊（本文編）

２００４．３

上田市土地開発公社

上田市教育委員会

序

上田は、長野県の東に位置し、古くから東信濃の中心地として栄えてきました。古代においては、信濃国分寺が創建されており、さらに信濃国府も置かれていたと考えられています。中世においては、後に信濃の学海と呼ばれるほどの学問の中心地となり、鎌倉時代には信濃国の守護所も置かれていたと考えられています。近世においても、上田城を中心とした城下町が繁栄していました。上田は、このように古代から現代に至るまで、地域の政治・経済・文化を担ってきました。その軌跡をたどる手がかりは、市内に残る有形文化財・無形文化財及び埋蔵文化財によるところが大きいと思われます。

このたび、「上田市川東地区農産物総合出荷施設」の建設箇所に埋蔵文化財が存在することが判明したため、工事施工に先立ち緊急発掘調査を行いました。調査の結果、上田に人々が住み始めた頃である縄文時代草創期の石器が見つかり、弥生時代後期や古墳時代中期から奈良・平安時代にかけての集落が営まれていたことを確認することができました。また、中世には寺院あるいは墓域となっていることも判明しました。つまり、最近まで水田として利用されていた土地が、過去には地域の人々にとって重要な生活拠点であったことがわかってきました。このことは、記録にも言い伝えにも残っていません。今後、この過去からのメッセージを詳細に解き明かすことにより、現代に生きる私たちは時代を生き抜く貴重なヒントを見いだすことになるでしょう。

さて、近年の様々な開発に伴って発掘調査が行われるようになりましたが、そのほとんどが破壊を前提とした「記録保存」のための発掘調査であり、残念ながら調査後に姿を消してしまうのが現実です。それゆえ、現在及び未来へ向けてできる限りの記録を残しておくことが、私どもの責務であると確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業・報告書刊行に至るまで深い御理解と御協力をいただきました関係諸機関、堅実熱心に調査に参加してくださった方々、関係研究者の皆様に対して心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成１６年３月

上田市教育委員会
教育長　森　大和

例　言

１　本書は、長野県上田市大字殿城字法楽寺及び大字林之郷字太田における法楽寺遺跡の発掘調査報告書である。

２　調査は、上田市川東地区農産物総合出荷施設建設に先立ち、上田市土地開発公社の委託を受けて実施した。

３　調査は、上田市（上田市教育委員会生涯学習課）が直営で実施した。

４　調査は、発掘調査から遺物整理・報告書刊行まで含めて１９９５年（平成７年）８月２１日から２００４年（平成１６年）３月３１日まで実施した。

５　遺構の実測は中沢徳士・塩崎幸夫・久保田敦子・久保田浩・望月貴弘・古野明子・須齋千恵子の指導のもとに行われ、一部を新日本航業株式会社に委託した。

６　遺構の二次原図の作成及びトレースは尾見智志の指導のもとに行われた。

７　遺物整理・復元作業は中沢徳士・尾見智志の指導のもとに行われた。遺物の実測は、尾見の指導のもとに行われ、トレースについても尾見の指導のもとに行われた。また、石器実測の一部は株式会社こうそくに委託した。

８　本文の執筆は尾見智志が行った。遺構・遺物の観察表は尾見の指導のもとに行った。

９　附論２については倉沢正幸氏より玉稿を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

１０　版組みは尾見智志の指導のもとに行った。

１１　遺構の写真撮影は、中沢徳士・塩崎幸夫・久保田敦子・久保田浩・望月貴弘・古野明子・須齋千恵子が行った。遺物の写真撮影は、尾見智志が行った。

１２　本遺跡の調査・整理は９年間におよび、担当者の交代などにより十分な検討が行えず、記載事項等に一貫しない部分が生じたが、内容に係わるものではない。

１３　調査に係る基準点測量は共和設計株式会社に委託した。

１４　調査に係る資料は上田市立信濃国分寺資料館に保管してある。

１５　本書の編集刊行は事務局（上田市教育委員会生涯学習課）が行った。

１６　本書が刊行されるまでには、多くの方々や諸機関のご理解・ご協力を賜った。以下、ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。（敬称略）

長野県教育委員会文化財生涯学習課・長野県立歴史館・上田市土地開発公社・市川隆之・桐原健・塩入秀敏・白沢勝彦・平川南・永島正春・直井雅尚

凡　例

［遺 構］

1　各遺構の略称は次のとおりである。
　ＳＢ…竪穴住居・竪穴状遺構　ＳＴ…掘立柱建物　ＳＤ…溝状遺構　ＳＫ…土坑　ＳＸ…不明遺構
2　遺構実測図は原則として原図１／２０、縮尺１／３である。
3　重複遺構については、原則として上端のみを実線で表示している。
4　遺構の主軸方向は、国家座標の北とのなす角度で示した。
5　焼土は網点スクリーントーンで示した。
6　土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」１９９７年度版を使用した。
7　遺構写真図版の縮小は任意である。

［遺 物］

1　土器・石器等は縮尺１／４を原則とした。例外はスケールで示した。
2　土器の実測方法は４分割法を用い、右側１／２に断面及び内面を左側１／２に外面を記録した。
3　赤色処理のある遺物は網点スクリーントーン２０％で示した。
4　黒色処理のある遺物は網点スクリーントーン４０％で示した。
5　須恵器については断面を黒く塗りつぶした。
6　灰釉・緑釉につては断面を斜線スクリーントーンで示した。
7　青白磁・陶磁器については断面を網点スクリーントーン４０％で示した。
8　遺物番号は実測図番号及び写真番号と対応している。
9　遺物写真図版の縮小は任意である。

［観 察 表］

1　遺構観察表の遺物番号は図版の遺物番号と対応している。
2　遺構観察表の主軸方向は原則として国家座標の北とのなす角度で示している。
3　竪穴住居以外の観察表は図示されているもののみを表示した。
4　地床炉の位置は第１１図を、カマドの分類については第１２図及び第１３図を基準とした。
5　遺構観察表の詳細については第２分冊（遺構編１）に記した。
6　土器の分類は「第三章遺跡の調査第三節遺物１遺物の分類について（１）土器」の分類基準によった。
7　石臼及び五輪塔の計測部位は「第三章遺跡の調査第三節遺物１遺物の分類について（２）石臼・五輪塔」の基準によった。
8　遺物の材質等は尾見智志が鑑定した。

第１分冊（本文編）

第２分冊（遺構編１）
第３分冊（遺構編２）
第４分冊（遺物編）
第５分冊（写真編）

―― 目　次 ――

第一章　調査の経過
第一節　調査に至る経過 …… 1
第二節　発掘調査の経過 …… 1
第三節　調査の体制 …… 1
第四節　調査日誌（抄） …… 3

第二章　遺跡の環境
第一節　地理的環境 …… 5
第二節　歴史的環境 …… 6
第三節　周辺地域の発掘調査 …… １１

第三章　遺跡の調査
第一節　遺跡の概要 …… １３
第二節　遺　構
１　遺構の分類について …… ２１
２　遺構の概要 …… ２３
第三節　遺　物
１　遺物の分類について …… ３２
２　遺物の概要 …… ５７
第四節　まとめ …… ６９

第五節　附　論
附論１　法楽寺遺跡の土器変遷について …… ７７
附論２　法楽寺遺跡の銅印・金銅三尊仏・銅製磬について …… ９１

第一章　調査の経過

第一節　調査に至る経過

平成元年３月に農村整備課から殿城地区ほ場整備事業に併せて非農用地区域を設定し開発（卸売市場）を行う計画の報告を受けて同年４月に保護協議を行い、試掘調査を行った。その結果、開発予定地全域に遺跡が拡がっていることが判明した。発掘調査は開発が当該地域全体を造成することから、膨大な調査面積となることが予想された。協議の結果、発掘調査は開発予定地区が確定された平成７年度から開始することとなった。なお、開発事業名は途中から上田市川東地区農産物総合出荷施設建設となった。

第二節　発掘調査の経過

発掘調査（調査面積４７,０００㎡）
　平成７年度８月２１日～１１月２９日（調査面積２,０００㎡）
　　担当者：塩崎・久保田（敦）
　平成８年度８月３０日～１２月２６日（調査面積２,０００㎡）
　　担当者：塩崎・久保田（敦）
　平成９年度４月３日～１２月１１日（調査面積２１,０００㎡）
　　担当者：中沢・久保田（敦）・久保田（浩）・望月・古野
　平成１０年度４月２日～１２月２４日（調査面積２２,０００㎡）
　　担当者：中沢・久保田（敦）・久保田（浩）・望月・古野・須齋
整理作業
　平成１１年度（遺構図面整理、遺物洗浄、遺物注記）
　　担当者：中沢
　平成１２年度（遺構図面整理、遺物洗浄、遺物注記、遺物接合）
　　担当者：中沢
　平成１３年度（遺構図面チェック、出土遺物の整理・図化・復元）
　　担当者：中沢
　平成１４年度（遺構２次原図作成、出土遺物の整理・図化・復元）
　　担当者：尾見
　平成１５年度（復元、トレース、報告書刊行）
　　担当者：尾見

第三節　調査の体制（平成７～１５年度）

教 育 長　内藤　尚（７～９年３月３１日）・我妻忠夫（９年４月１日～１４年１２月２０日）
　　森　大和（１４年１２月２４日～）
教育次長　荒井鉄雄（７～９年３月３１日）・宮下明彦（９年４月１日～１１年３月３１日）
　　内藤政則（１１年４月１日～）

生涯学習課長　松沢征太郎（7～9年3月３１日）・川上　元（9年4月1日～１１年3月３１日）
塩野崎利英（１１年4月1日～１４年3月３１日）・宮下省二（１４年5月２０日～）
文化財係長　岡田洋一（7～１０年4月３０日）・細川　修（１０年5月1日～１４年5月１９日）
小林　浩（１４年5月２０日～）
文化財係　平林裕蔵（１１年4月1日～１３年3月３１日）
中沢徳士
尾見智志（7～１１年3月３１日・１３年4月1日～）
塩崎幸夫
久保田敦子
久保田　浩（8年4月1日～１１年3月３１日）
西沢和浩（8年4月1日～１１年9月３０日）
山嵜敦子（１０年4月1日～１１年3月３１日）
清水　彰（7～１２年3月３１日）
小笠原　正（8年4月1日～１３年3月３１日）
嘱　　託　西入元三郎（7年4月1日～8年3月３１日）
望月貴弘（9年4月1日～１１年3月３１日）
古野明子（9年4月1日～１１年3月３１日）
松野ひろみ（9年4月1日～１１年3月３１日）
須齋千恵子（１０年4月1日～１２年3月３１日）

発掘及び整理作業参加者

現地調査（平成７年度～１０年度）

有賀仁良・池内宜裕・五十嵐正信・五十嵐道代・池田育子・池田市郎・井沢光子・石巻賢忠・市川巌・一ノ瀬貞美・稲垣諒彦・伊比文作・井部定雄・内川とし子・内山重利・大井敬子・大塚夏恵・大野千鶴子・大原綾子・小野敏子・掛川波平・金井裕子・金子真由美・柄沢孝好・神林重喜・久保田一郎・倉島裕允・甲田五夫・児玉和衛・小林さち子・小林哲三・小松崎美幸・小柳治雄・坂口喜美江・坂口とみ子・佐藤弘子・佐野亥一・佐野和男・塩川美代子・塩崎幹・塩沢むつき・柴崎和美・柴崎今朝義・柴崎仁志・篠原延夫・清水閲二・清水實・鈴木弘道・春原観樹・関進・高瀬おふで・高野美奈子・滝沢歌子・滝沢政子・滝沢儀武・武井登紀枝・竹内和好・田中浩江・田中正美・塚田和彦・塚田由美子・塚田陽子・津田作治・寺島佐紀子・砥石いとし・砥石栄蔵・所幸直・冨井秀子・冨井義明・中沢靖子・中島昭吾・名川真由美・中村清春・中村英美・南波規子・新津幸男・西澤勝・花岡弘隆・林正治・林新一・林えつ子・林緑・東山唯夫・東山恒子・樋村孟志・細尾好子・細田秀子・細田万喜治・美斉津京子・三井千代子・満木重雄・満木富子・宮下良子・宮之上いせ・宮之上いつ子・宮之上よし子・村田宣子・村松秋恵・百瀬純子・山本万里・横沢生枝・横沢昇・吉池敦子

整理作業（平成１１年度～１５年度）

池田育子・上原祐子・大塚夏恵・鹿島すみ江・金子真由美・佐藤弘子・塩川美代子・塩沢むつき・須齋千恵子・中沢靖子・藤中陽子・古野明子

第四節　調査日誌（抄）

（1）平成７年度

１９９５年（平成７年）	
８月２１日	調査着手・機材搬入・表土剥ぎ開始
８月２３日	仮設ハウス完成
８月２５日	遺構の検出開始
９月１４日	遺構の掘り下げ開始
１０月１６日	上田市文化財保護審議委員五十嵐幹雄先生来訪
１１月　８日	遺構の実測開始
１１月１０日	県埋文センター上田調査事務所広瀬氏他３名来訪
１１月１４日	航空測量
１１月２８日	現場撤収

（2）平成８年度

１９９６年（平成８年）	
８月３０日	調査着手・表土剥ぎ開始
９月　３日	遺構の検出開始
９月２４日	国家座標設定
１０月　２日	遺構の実測開始
１０月　７日	遺構の掘り下げ開始
１２月　３日	大雪の除雪作業を行う
１２月２６日	航空測量・現場撤収

（3）平成９年度

１９９７年（平成９年）	
４月　３日	調査の準備開始
４月　８日	調査着手・表土剥ぎ開始
４月　９日	遺構の検出開始
４月３０日	遺構の掘り下げ開始
５月２１日	市誌編纂室甲田三男先生来訪
５月２７日	県立歴史館白沢勝彦氏来訪
	木製品の保存処理法を教示して頂く
６月２３日	国家座標設定
８月　７日	信濃国分寺資料館夏休み考古学教室（１２名）
	上田市文化財保護審議委員久保浩美先生来訪
８月１０日	現地説明会
８月２０日	航空測量
１１月１４日	遺構の実測開始
１２月１０日	航空測量

（4）平成１０年度

１９９８年（平成１０年）

４月　２日	調査着手・表土剥ぎ，遺構の掘り下げ開始
５月２０日	国家座標設定
６月２３日	連日の雨による排水作業を行う
７月　１日	国家座標設定
８月　６日	信濃国分寺資料館夏休み考古学教室（２０名）
１０月　７日	航空測量
１１月１５日	現地説明会
１２月１２日	上田郷友会来訪（５０名）
１２月１５日	航空測量
１２月２４日	現場作業完了・現場撤収

１９９９年（平成１１年）

１月１０日	整理作業の開始
３月３１日	平成１０年度の整理作業を終了

（５）平成１１年度

１９９９年（平成１１年）

４月　１日	整理作業の開始

２０００年（平成１２年）

３月３１日	平成１１年度の整理作業を終了

（６）平成１２年度

２０００年（平成１２年）

４月　３日	整理作業の開始

２００１年（平成１３年）

３月３０日	平成１２年度の整理作業を終了

（７）平成１３年度

２００１年（平成１３年）

４月　２日	整理作業の開始

２００２年（平成１４年）

３月２９日	平成１３年度の整理作業を終了

（８）平成１４年度

２００２年（平成１４年）

４月　１日	整理作業の開始

２００３年（平成１５年）

３月３１日	平成１４年度の整理作業を終了

（９）平成１５年度

２００３年（平成１５年）

４月　１日	整理作業の開始

２００４年（平成１６年）

３月３１日	平成１５年度の整理作業を終了・報告書刊行

第二章　遺跡の環境

第一節　地理的環境

上田盆地は、千曲川中流域で河川の勾配が急な地域に立地している。上田盆地のほぼ中央を流れるこの千曲川からみて右岸を総称して川東地方とし、左岸を川西地方と呼んでいる。この川東地方は、第三系の太郎山山地、東方を第四系の烏帽子火山群西南麓に囲まれた地域で、真田方面から千曲川に向かって流下している神川によりさらに東西に分けることができる。

千曲川右岸のこの地域の平坦面には染屋面・上田城面・虚空蔵山面・下郷面などがみられる。染屋面（神川第１段丘面）は礫岩層を中心とする染屋層からできている。染屋層は新期上小湖成層（２８,０００年以前）の上位に不整合に堆積している。これは、千曲川上流や神川、依田川の上流から運ばれて堆積してできた礫や砂の地層である。２８,０００年から２５,０００年の間に堆積した層と考えられている。神川沿岸では殿城山の南（現在の市民の森、わしば山荘付近）にあった鷲場火山が新期上小湖成層形成期に活動して大きく二度にわたり火砕流を発生させており、下位のものを第１鷲場火山灰流・上位のものを第２鷲場火山灰流と呼んでいるが、染屋層の上には両者が堆積している。下郷面（神川第２段丘面）は神川が染屋層を浸食してできた浸食面である。神川が浸食したときに残していった礫岩層（ベニア層）とその下の染屋層からできている。その為、下郷面には第２鷲場火山灰流のみが堆積している。上田城面（千曲川第２段丘面）は約１０,０００年前に千曲川の上流から流れ込んだ泥流の堆積物（上田泥流堆積物）から形成されている。虚空蔵山面は虚空蔵山及び東太郎山の麓の斜面にかけて形成されている。この面を構成する虚空蔵山層は烏帽子火山噴出の溶岩・火砕流堆積物と礫層からなっている。この層は３００,０００年から５００,０００年の間に堆積したものと考えられている。

川東地方の平野（川東平野）は、烏帽子火山群から押し出した扇状地が発達しており、千曲川や神川の河岸段丘とともに複雑な地形を形成している。特に神川は矢沢の狭隘（きょうあい）部を頂点として一大扇状地を展開している。扇状地面は神川第１段丘面として東の町吉田面と西の染屋面とに分けられ、東方に当たる神川の左岸ではその下に神川第２・第３段丘面を形成している。このことは、神川がかつては東方を流れていたが、烏帽子渓谷のつくる扇状地のため、次第に西方に移動していったことを物語っている。この様な地形が形成されたことは、河川の勾配が急で、浸食力が著しく大きかったことによると考えられている。

神川第１段丘面の東限は瀬沢川の線で、町吉田から大屋に達する線に当たる。これより東方は、烏帽子火山裾野地域となる。神川左岸の第１段丘面に対応する神川右岸の染屋面は、北の矢出沢川との間に碁盤の目のように整然と区画された水田地帯をなしている。かつて、この地が集落立地に適さなかったのは、地下水が深く１３ｍ～１５ｍも掘らなければ水が出ないので飲料水に窮したことが第１の理由と思われる。従って、この面の集落は段丘崖の縁に限られていた。また、神川沿岸ではわずかに残された低い第２・第３段丘面も選ばれている。染屋の集落などでは自然に造られた切り通しのある部分が集落地として選ばれている。それは、段丘崖下に湧水があり、上下の交通路が自然にできていたためである。神川第２段丘面は比較的広く、第１段丘面より少し狭い幅で南北に長い短冊形をしている。この面は地下水が比較的得やすく古い集落が点在している。第２段丘面は本報告書の遺跡である当該遺跡立地面でもある。第３段丘面は下流に僅かに残るだけである。そこには久保林の集落がある。この集落は、林之郷の集落の下半分が移ったものと言われている。

一方、烏帽子岳南西麓を神川に流下する行沢川（稲倉川）に沿って扇状地が形成されている。行沢川は、神川第２段丘面上にも扇状地を形成し、その土砂により宅地や水田を荒廃させていたため、その地域を神明河原と呼

び川の名前も神明川と改まっている。その為、行沢川と漆戸の神川第１段丘崖上の崖の崩壊と押し出しの防備地点には漆戸の集落の氏神である皇大神社が鎮座している。しかし、この川筋は人々に通路を与え、飲料水を供してくれていたことも確かである。

神川上流域には伊勢山狭隘と矢沢狭隘の２つの狭隘部をもつ。ここは、上田盆地と真田の洗馬地方を結ぶ咽喉部（のど元）に当たり、要害地である。その為、戦国時代の山城が集中する地域でもある。伊勢山狭隘は伊勢山と虚空蔵山が神川の右岸で相対峙している。矢沢狭隘は殿城山に連なる矢沢城山と虚空蔵山が神川を挟んで相対峙している。神川下流の千曲川と合流する地点では神川が千曲川を南方の小牧山麓に圧している為、小牧山下を浸食して急崖をつくり太鼓岩などの岩が露出している。ここの神川河床から岩下集落にかけては、千曲川堆積物の下が岩盤で千曲川の洪水にも浸食されず安全であるといわれている。

法楽寺遺跡は、神川左岸の第２段丘上に立地している。遺跡の北側で接する神明川（行沢川）の氾濫による砂礫の堆積や浸食・神明川の支流と思われる川筋の跡がみられる。その為、安定した地層は確認することができなかった。遺跡内の地層は概ね、表土である３０cm～４０cmの耕作土の下に遺構を含む黒褐色～茶褐色の土層が堆積しており、その下に茶褐色～暗黄褐色の土層が堆積しているといえる。遺構はこの層に掘り込まれていることが多い。表土以外の土層のほとんどには、量の多少や礫の大小はあるが砂礫が含まれている。

<参考文献>

上田市立博物館「郷土の地誌　上田盆地」１９７９

信州理科教育研究会「大地は語る」１９９４

長野県埋蔵文化財センター「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２１」１９９９

上田市誌刊行会「上田の地質と土壌」『上田市誌　自然編(1)』２００２

第二節　歴史的環境

殿城・豊里地区及び神科・神川地区には神川水系や千曲川の段丘に沿って多くの遺跡が存在している。「上田市の原始・古代文化」（上田市教育委員会 1977）によると２７７件の遺跡が確認されている。これらは、上田市の全遺跡の約２２％にあたる。特に古墳の数は多く、６５基が確認されている。これは、上田市内で確認されている古墳の約３０％が集中していることになる。

縄文時代の早期では大日ノ木遺跡から押型文系土器・絡条体圧痕文系土器などの早期中葉から末葉のものが出土している。前期の土器については城山遺跡・茅御堂遺跡で確認されている。前期までは、この烏帽子岳山麓線に沿うように東部町側にも遺跡が点在している。中期及び後期の遺跡については、烏帽子岳の山麓や神川左岸第１段丘面上に日向遺跡・托田遺跡・大日ノ木遺跡・井戸田遺跡・中吉田遺跡群の治郎淵遺跡や無量寺遺跡などが点在している。立丁場遺跡からは中期初頭の五領ケ台期と思われる土器が確認されている。また、神川左岸第２段丘面上の八千原遺跡群では発掘調査により中期後葉から後期中葉の大規模な集落が確認されている。林之郷遺跡群の境田遺跡でも中期の土器が確認されている。晩期については、大日ノ木遺跡の発掘調査によって氷式土器や当該期の石器が確認されている。また、神林遺跡や立丁場遺跡でも晩期終末期の土器が確認されている。この遺跡の状況からは縄文時代前期頃までは烏帽子岳の山麓にあった遺跡が、中期以降は神川第２段丘面にまで集落を展開するようになったことがわかる。しかし、晩期には再び山麓を中心に集落が営まれるようである。

弥生時代の遺跡としては、後期の箱清水式期のものが日向遺跡・大日ノ木遺跡・井戸田遺跡・中吉田遺跡群の治郎淵遺跡及び無量寺遺跡などが烏帽子岳山麓線沿いに確認されている。大日ノ木遺跡では発掘調査により竪穴住居が確認されている。これらの遺跡は赤坂川・行沢川・瀬沢川などの小河川に沿った場所に立地している。神

伊勢山
(虚空蔵山面)
虚空蔵山
矢沢城山
矢出沢川
第1段丘面
(染屋面)
(上田城面)
行沢川
(下郷面)
第2段丘面
第1段丘面
第3段丘面
千曲川
0
1,000m

第1図　地形図

番号	遺跡名	時代	所在地
1	小玉原遺跡	縄文～弥生	大字殿城字小玉原
2	日向遺跡	縄文～古代	大字殿城字日向、上組
3	山崎遺跡	古代	大字殿城字北ノ、山崎
4	石矢遺跡	縄文～古代	大字殿城字石矢、目影山麓
5	北屋敷遺跡	縄文・古墳	大字殿城字北屋敷
6	托出遺跡	縄文・古代	大字殿城字托出
7	城山遺跡	縄文	大字殿城字城山
8	上組遺跡	古代	大字殿城字上組
9	宿組遺跡	古代	大字殿城字宿組
10	早沢遺跡	古代	大字殿城字早沢
11	下左口遺跡	縄文	大字殿城字下左口
12	下猿口遺跡	古代	大字殿城字下猿口
13	石神遺跡	弥生	大字殿城字石神
14	宿清水遺跡	縄文	大字殿城字宿清水
15	神熊遺跡	縄文～古代	大字殿城字神熊
16	中村遺跡	弥生～古代	大字殿城字中村
17	北武遺跡	縄文・古墳	大字殿城字北武
18	太日ノ木遺跡	縄文～古代	大字芳田字太日ノ木、水ノ上
19	見入遺跡	縄文	大字芳田字見入
20	北ノ平遺跡	古墳	大字瀬戸字北ノ平
21	ヤケ原・堂下遺跡	縄文～古墳	大字瀬戸字ヤケ原、堂下
22	法来寺遺跡	弥生～中世	大字殿城字法来寺
23	太田遺跡	古墳・古代	大字林之郷字太田
24	立丁場遺跡	古代	大字芳田字立丁場
25	井戸田遺跡	縄文～古代	大字芳田字井戸田
26	尾熊遺跡	縄文・古墳	大字芳田字山脇、尾熊
27	林之郷遺跡群	縄文～古代	大字瀬戸字柳堂・大字林之郷字城田、貝戸、熊田、横石、南裏、前田、日向畑、治郎原、熊倉寺
28	荒神田遺跡	古墳	大字芳田字荒神田
29	中吉田遺跡群	縄文～古代	大字芳田字荒神、或田、横石、南裏、前田、日向畑、治郎原、熊倉寺
30	駅口上遺跡	古墳～古代	大字芳田字駅口上
31	今井遺跡	古墳～古代	大字芳田字今井
32	イナゴ坂遺跡	縄文	大字大屋字イナゴ坂
33	中村Ⅱ遺跡	弥生	大字蒲久保字中村Ⅱ
34	内小屋遺跡	縄文	大字伊勢山字内小屋
35	薬王遺跡	縄文	大字住吉字薬王
36	上デ村遺跡	弥生～古墳	大字住吉字上デ村
37	入詰遺跡	縄文	大字住吉字入詰
38	中道遺跡	縄文～古代	大字住吉字中道
39	宮平遺跡	古墳～古代	大字住吉字宮平
40	上野原遺跡	縄文	大字伊勢山字上野原
41	熟蔵寺遺跡	縄文	大字住吉字熟蔵寺
42	弥勒台&黒水田遺跡群	古代	大字上野、住吉、古見、国分
43	御町遺跡	古墳	大字古屋字御町
44	東之手・西之手遺跡	古墳	大字古屋字東之手、西之手
45	大武遺跡	古墳～古代	大字国分字大武
46	古城遺跡	古代	大字国分字古城
47	舞井久保遺跡	弥生～古墳	大字古屋字舞井久保
48	後ノ宮遺跡	縄文・古墳	大字古屋字後ノ宮
49	国分遺跡群	弥生・古墳・古代	大字国分字上武内、宮畑、屋敷
50	国分寺周辺遺跡群	縄文～古代	大字国分字浦神、前田、仁王堂、明神前、場、西仲
51	荒入遺跡群	弥生～古代	大字芳田
52	金井裏遺跡群	弥生～古代	大字上田字金井裏、鶴原、桜林
53	東奥山原遺跡	弥生～古代	大字上田字東奥山原
54	城穴古墳	古墳	大字殿城字城穴
55	市坂段要塞古墳	古墳	大字殿城字古矢
56	矢沢1号墳・2号墳	古墳	大字殿城字上城
57	矢沢古墳群	古墳	大字殿城字矢沢
58	大日ノ木古墳	古墳	大字芳田字大日ノ木
59	下鶴古墳群	古墳	大字殿城字仲林
60	佐嶋古墳	古墳	大字芳田字佐嶋
61	日ノ井古墳	古墳	大字林之郷字柳田
62	上野木長田原古墳	古墳	大字蒲久保字長田原
63	鉄砲塚古墳	古墳	大字蒲久保字長田原
64	寺沢古墳	古墳	大字大屋字寺沢
65	尾崎古墳	古墳	大字大屋字尾崎
66	新屋古墳群	古墳	大字上野字陣屋館
67	矢花古墳群	古墳	大字上野字矢花
68	柳田古墳	古墳	大字上野字柳田
69	野竹塚古墳	古墳	大字古屋字久保
70	狐井塚古墳	古墳	大字古屋字舞井久保
71	後ノ宮塚古墳	古墳	大字古屋字後ノ宮
72	仕宮司古墳	古墳	大字国分字仕宮
73	馬市古墳群	古墳	大字蒲久保字中村
74	生地場古墳	古墳	大字蒲久保字生地場
75	神塚塚古墳	古墳	大字住吉字橋山
76	反重塚古墳	古墳	大字住吉字鶴山
77	熟蔵寺古墳	古墳	大字住吉字熟蔵寺
78	仲田古墳	古墳	大字古屋字仲田
79	湯佐保	中世	大字古屋字湯城
80	湯場古墳群	古墳	大字国分字湯場
81	西仲第1・2古墳	古墳	大字国分字西仲
82	矢沢台城	中世	大字殿城字台城
83	矢沢城	中世	大字殿城字城山
84	伊勢崎城	中世	大字上野字上野原
85	岩石・米山城	中世	大字上野字城山
86	矢花の館敷跡	中世	大字上野字矢花
87	野竹の城館跡	中世	大字古屋字広野
88	切門の城館跡	中世	大字古屋字本城
89	染屋城	中世	大字古屋字茂
90	国分の古城	中世	大字国分字古城
91	長島の塩の内	中世	大字住吉字塩の内

第２図　遺跡位置図

川左岸第２段丘面上では神林遺跡・中村遺跡・法楽寺遺跡・林之郷遺跡群の境田遺跡及び狐塚遺跡などが確認されている。特に、法楽寺遺跡では今回の発掘調査によりほぼ集落全体を確認することができた。

古墳時代の遺跡としては、烏帽子岳山麓線沿いに石矢遺跡・大日ノ木遺跡・井戸田遺跡・中吉田遺跡群の治郎淵遺跡及び無量寺遺跡などが確認されている。大日ノ木遺跡では発掘調査により初頭から前期の集落が確認されている。神川左岸第２段丘面上では神林遺跡・太田遺跡・林之郷遺跡群が確認されている。神林遺跡では発掘調査により中期から後期にかけての集落が確認されている。太田遺跡では発掘調査により竪穴住居が確認されているが、これらは今回の調査で確認された集落の一部と思われる。林之郷遺跡群の茅御堂遺跡でも発掘調査により前期から後期にかけての集落が確認されている。一方、神川右岸の染屋台上には柳町遺跡・東之手西之手遺跡が発掘調査により確認されているのみである。西之手地籍には冬季の乾燥期でも涸れない池があったということから、この周辺は乾燥台地上での有力な集落立地点と考えられる。

古墳は、神川左岸に下郷古墳群・氷沢古墳群などの古墳集中地帯が確認されている。また、赤坂将軍塚古墳の周辺にも古墳が集中していたという伝承が残っている。蒼久保地区にも下青木吉田原古墳を中心とした古墳の集中箇所や高寺第１号墳を中心とした古墳の集中箇所が確認できる。その他に古墳が集中しているわけではないが大日ノ木古墳・日ノ井古墳などが確認されている。神川右岸の染屋台上には新屋古墳群・七ツ塚古墳群が確認されている。その他にも塚田古墳・野竹塚古墳・掛の宮古墳・笹井塚古墳・社宮寺古墳などが確認されている。染屋台では台地の縁辺部に古墳が立地していることが特徴となっている。これらの古墳は、未調査のものがほとんどであるが、残存している墳丘形や横穴石室等の形態から古墳時代後期に属するものと思われる。

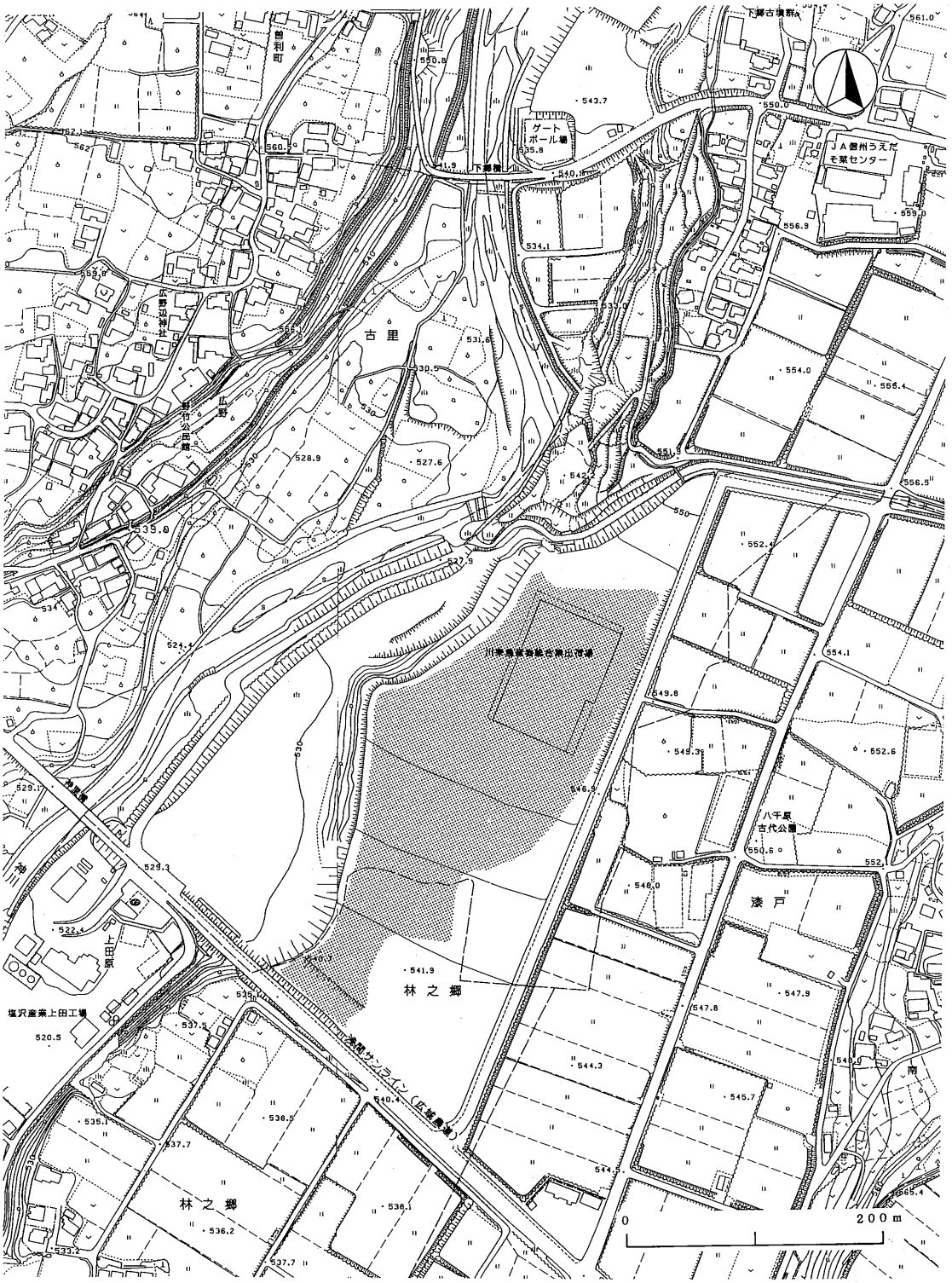
奈良・平安時代は、上田・小県地方に信濃国府が設置されて信濃国分寺が造営されたこと、官道である東山道が整備されていたことにより繁栄していたことが推測される。その為、当該地域にも多くの遺跡が存在している。烏帽子岳山麓線沿いには、山越遺跡・宿組遺跡・大日ノ木遺跡・井戸田遺跡・立丁場遺跡・中吉田遺跡群の日向畑遺跡・無量寺遺跡・訳口上遺跡などが確認されている。大日ノ木遺跡・立丁場遺跡・訳口上遺跡では発掘調査により竪穴住居などが確認されている。神川左岸第２段丘面上では神林遺跡・太田遺跡・法楽寺遺跡・林之郷遺跡群などが確認されている。それぞれの遺跡については部分的に発掘調査が行われており、神川左岸第２段丘面上では当該期の集落立地の中心となっていたと思われる。それに比べて、神川右岸の染屋台上には小規模で維持期間の短い上沖遺跡や古城遺跡が発掘調査によって確認されているのみで、拠点的な遺跡は見当らない。

また、染屋台上には染屋台条里水田遺構が確認されている。その規模の大きさから律令制度による開発の可能性があるが、古代の条里水田遺構であることの検証が困難であり、中世以降の開発に伴う条里的遺構である可能性も指摘されている。これらの水田では、神川の上流から導水する幾つかの堰による灌漑が行われている。主な堰として岩門堰・笹井染屋堰・新屋堰が台地上の水田に灌漑している。

中世では、城館跡が確認されている。矢沢・赤坂地区などは海野氏の一族とされる矢沢氏の所領とされており、矢沢城・矢沢古城・殿城山城が烏帽子岳山麓線沿いに、伊勢崎城が虚空蔵山に、東太郎山系には村上氏の砦といわれている柏山城・武田信玄の砥石崩れで有名な砥石・米山城及び飯縄城が確認されている。染屋台上にも新屋の矢花の屋敷・野竹の広野辺神社周辺の城館・岩門の城館・染屋の染屋城・国分の古城など城館跡とされるものが多くみられる。これらは、台地の縁辺部に立地しており、周辺には古くからの集落が営まれている。

＜参考文献＞

上田市教育委員会「条里遺構分布調査概報ー染屋台地区ー」１９７３
上田市教育委員会「上田市の原始・古代文化」１９７７
上田小県誌刊行会「上田小県誌　第六巻歴史篇上（一）考古」１９９５
上田市教育委員会「大日ノ木遺跡」２００２


曽利町
下郷古墳群A
ゲートボール場
下郷橋
JA信州うえだ
も菜センター
広野
広野公民館
古里
八千原
古代公園
漆戸
林之郷
上田原
塩沢産業上田工場
三才
南
0
200m

第３図　調査位置図

第三節　周辺地域の発掘調査

法楽寺遺跡の周辺では多くの発掘調査が行われており、貴重な成果が得られている。本節では、その中でも当該遺跡と関連性があると思われる遺跡の調査結果を中心に概観しておきたい。

①太田遺跡

１９７４年に浅間山麓地区広域営農団地農道整備事業に伴い発掘調査が行われた。神川第二段丘端部に沿った遺跡で、法楽寺遺跡と同一の遺跡と思われる。古墳時代後期の竪穴住居（３軒）と平安時代で９世紀後半～１０世紀前半のもの（５軒）が確認されている。

②茅御堂遺跡

１９７４年に浅間山麓地区広域営農団地農道整備事業に伴い発掘調査が行われた。神川第二段丘面の東寄りの微高地上に立地している。西平遺跡（林之郷遺跡Ｅ地区）と同一の遺跡と思われる。古墳時代初頭から前期の竪穴住居（３軒）・古墳時代中期のもの（１軒）・古墳時代後期のもの（１軒）が確認されている。また、有孔円板の出土や器台・高坏を中心とした土器が出土した集石遺構などの祭祀関連の遺構や遺物が確認されている。

③林之郷遺跡

１９８８年に県営ほ場整備事業殿城地区事業に伴い２地区の発掘調査が行われた。神川第二段丘面に立地している遺跡は１㎞以上にわたって細長くひろがっている。その為、遺跡は林之郷遺跡群の金井遺跡・狐塚遺跡としてとらえるべきものと思われる。平安時代の竪穴住居（１１軒・３軒）を中心とした集落が確認されている。

④林之郷遺跡Ｅ地区（西平遺跡）

１９８９年に県営ほ場整備事業殿城地区事業に伴い発掘調査が行われた。神川第二段丘面に立地しており、報告書では林之郷遺跡Ｅ地区としているが実際は林之郷遺跡群の西平遺跡（茅御堂遺跡）と同一の遺跡である。古墳時代初頭（１軒）・古墳時代前期（４軒）・古墳時代中期（７軒）・古墳時代後期（１０軒）の竪穴住居を中心とした集落が確認されている。

⑤八千原遺跡

１９８９年に県営ほ場整備事業殿城地区事業に伴い発掘調査が行われた。神川第二段丘面に立地している。縄文時代中期初頭から後期中葉までの大規模な集落（竪穴住居６８軒）が確認されている。隣接する法楽寺遺跡や林之郷遺跡Ｅ地区（西平遺跡）は縄文時代の竪穴住居がなく、埋甕を伴った土坑が幾つか確認されるのみであることから八千原遺跡の縁辺部にあたると考えられる。

⑥神林遺跡

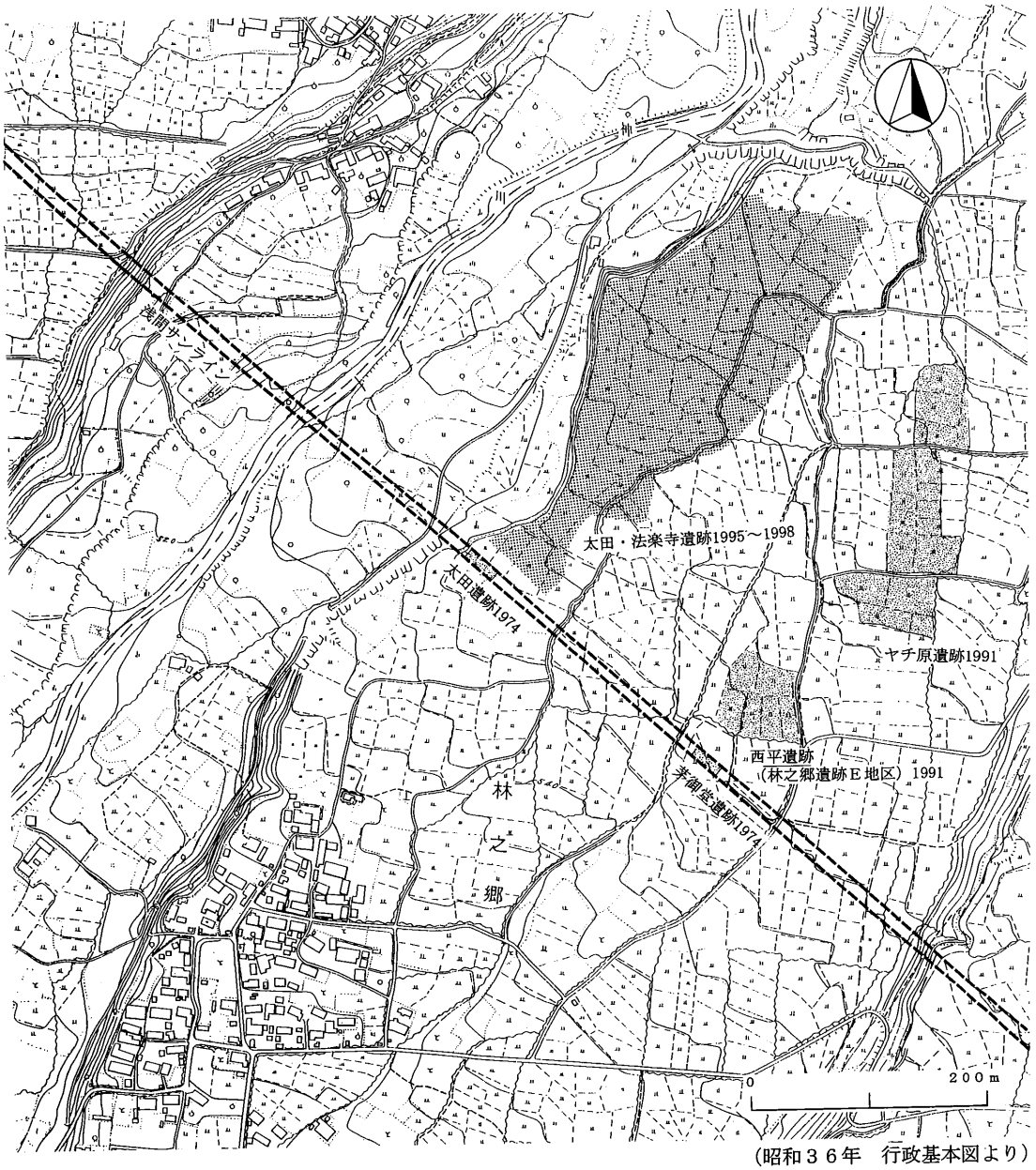
１９９０年に県営ほ場整備事業殿城地区事業に伴い発掘調査が行われた。神川第二段丘面に立地している。古墳時代中期から後期（３軒）・平安時代（２０軒）の竪穴住居を中心とした集落が確認されている。また、平安時代の墓域や下郷古墳群の一部も確認されている。

⑦下郷古墳群

１９９０年に県営ほ場整備事業殿城地区事業に伴い発掘調査が行われた。神川第二段丘面に立地している。古墳群は７世紀中頃から次々と築かれたものと考えられており、段丘崖に沿うように立地している。大正時代には１４基の存在が知られていた。当該調査では１・２・３・５号墳が調査された。２号墳からは金環・玉類・刀子・直刀や７世紀後半の須恵器の大甕が出土している。

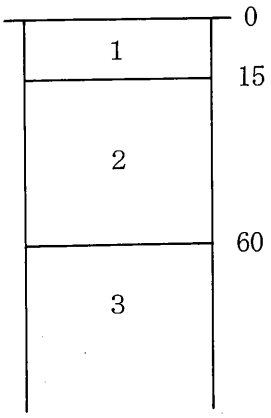
⑧大日ノ木遺跡

１９９３年～１９９５年に上信越自動車道建設に伴い発掘調査が行われた。２００１年にはふるさと街道整備事業殿城地区に伴い発掘調査が行われた。これらの調査から弥生時代後期から古墳時代前期（１６軒）・古墳時代後期（６軒）・奈良、平安時代（６軒）の竪穴住居を中心とした集落が確認されている。



（昭和３６年　行政基本図より）

第４図　周辺遺跡の調査状況



１層：耕作土
２層：褐色土層（粘性が強い）
３層：黒褐色土層（砂質）

第５図　基本土層

第三章　遺跡の調査

第一節　遺跡の概要

法楽寺遺跡は、神川左岸の第２段丘面が最も発達した地域の北側部分に位置している。周辺にはヤチ原（八千原）・堂下遺跡・林之郷遺跡群・太田遺跡が知られており、ほ場整備事業や広域農道の建設に伴って幾つかの発掘調査が行われていた。当該地籍においても縄文土器や土師器・須恵器の土器片が出土する法楽寺遺跡が知られていた。さらに、法楽寺遺跡の範囲は当該事業に伴う試掘調査の結果から段丘崖に沿うように広がっていることが判明した。このことは、発掘調査が進むなかでより明白になっていった。また、調査地域には行沢川の氾濫によると思われるＳＤ１７・ＳＤ２０などの自然流路を形成すると同時に自然堤防状の微高地も形成していることが判明した。当該遺跡の集落はこの微高地上に営まれていた。

発掘調査地域は広大であり、様々な時代の遺構・遺物を数多く確認することができた。その為、１縄文時代、２弥生時代後期から古墳時代初頭、３古墳時代中期から後期、４奈良・平安時代、５中世に分けて各時代を概観しておきたい。

１　縄文時代

総じて、縄文時代の遺物は土器片や石器が遺構を伴わず出土している。土器片には縄文時代中期後半と思われるものや後期の堀之内式期と思われるものが出土している。ただし、明確な遺構として確認できていないが、土坑（ＳＫ２８０）から縄文時代の深鉢（第４分冊第１図１）が倒立した状態で出土したとされている。この土坑は古墳時代後期に所属する竪穴住居跡（ＳＢ４７８）内のものであるが、その出土状態から縄文時代中期後半の土坑及び埋甕である可能性が高い。石器には草創期の尖頭器（第４分冊第１２７図１・２）をはじめ、打製石鏃・石錐・打製石斧・磨製石斧・スクレイパー・磨石・敲き石・凹石などが出土している。

２　弥生時代後期から古墳時代初頭

箱清水式系の土器が伴う時期には遺構およびそれに伴う遺物が出土している。遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑などが確認できた。遺物は土器・石器・石製品・金属製品を確認することができた。

竪穴住居跡を中心とした遺構は、調査地域のほぼ中央の帯状に広がった微高地から確認されている。これらは遺構の広がりがみられず、周囲に当該期の遺構の空白地域をもつことから集落のほぼ全域を調査したことになると思われる。また、当該集落が営まれた地域は後の時代においても集落立地の中心となることが確認されている。竪穴住居跡は３３軒が確認できた。出土土器の特徴から２時期に分けることができる。第１期は甕などの胴部の張りが強くなる時期のものであり、第２期は甕などの胴部の球形化が進み、土器組成の中に外来系の土器が入りはじめる時期となる。竪穴住居跡の平面形はいずれも隅丸長方形を呈し、その長軸を河川の上流方向に合わせることを基準としている。また、第２期の竪穴住居跡は第１期のものよりも小型化する。

土器は箱清水式系のものを中心としているが、甕は櫛描波状文を器面に施しているものと櫛描羽状文を器面に施しているものがみられる。壺には口縁部を受け口状にしたものがみられる。外来系の土器も散見され、山陰系口縁をもつＳ字甕（第４分冊第１１６図１７９）や吉ケ谷式土器（第４分冊第９６図１３７）なども確認されている。また、古墳時代初頭に属すると思われる土器もみられる。石器は磨製石鏃・石包丁などが出土している。磨製石鏃は比較的大型のものである。石包丁には製作途中のものもみられ、集落内で製作していたと思われる。石包丁の規格は当該期の上小地方に一般的にみられるものである。金属器では銅鏃が出土している。銅鏃は遺構には伴っておらず、出土状況は不明である。１点だけであるが、ガラス小玉（第４分冊第１５０図５４）も竪穴

住居跡から出土している。

３　古墳時代中期から後期

古墳時代中期から後期では１８１軒の竪穴住居跡が確認されている。所属時期不明の竪穴住居跡が１１６軒あることから、当該期のものは２００軒を超えると思われる。集落は調査地域を南北に縦断するように段丘崖に沿って帯状に形成されている。北端では行沢川が神川に流れ込んでおり、南端と集落の東側は竪穴住居跡の空白地域をもつことから当該期の集落のほぼ全域を調査したこととなろう。集落は古墳時代中期中頃から出現し、奈良・平安時代まで継続して営まれていたと考えられる。竪穴住居跡にはカマドが設置されており、その平面形はほぼ方形を呈している。掘立柱建物は所属時期の判断が難しいが、古墳時代後期か奈良・平安時代の遺構と考えられ、両者の時期の可能性を頭に入れておきたい。掘立柱建物は調査地域中央の東寄りにＳＴ０６を中心として集中的に確認されているものが目に付く。これは、竪穴住居跡群から離れて、竪穴住居群との間に自然流路（ＳＤ１７）を挟んで微高地となっている場所に掘立柱建物群を形成している。これは集落の有力者の館あるいは倉庫群とも考えることができ、今後の検討を要する。

遺物は土器・土製品・石器および石製品・金属器が出土している。土器は古墳時代中期の様相を呈するものも見られるが、ほとんどは後期のものである。土器組成は土師器が中心となるが、一定量の須恵器もみられる。また、多くのミニチュア土器も当該期の竪穴住居跡から出土している。土製品では多くの土製円板・紡錘車・丸玉・勾玉が当該期の竪穴住居跡から出土している。特筆すべきは、円筒形土製品（第４分冊第１２５図４０・４１）である。その中の一点（第４分冊第１２５図４１）はカマドに設置された状態で出土している。これらは、千曲川流域では坂城地域を中心として出土しており、上小地方の出土例として貴重である。石製品では紡錘車をはじめ、石製模造品・臼玉・勾玉・垂飾り・軽石製品なども竪穴住居跡を中心として出土している。また、砥石の出土も目立つようになる。これは、金属器の普及によるものと考えられる。また、土製品および石製品を含めて玉類などの祭祀遺物の増加が目立つ。金属器は銅釧・耳環・鉄鏃・刀子・手斧・鍬・鉈などが出土している。銅釧は土坑内出土とされている。

４　奈良・平安時代

奈良・平安時代では１８６軒の竪穴住居跡が確認されている。所属時期不明の竪穴住居跡が１１６軒あることから、当該期のものは２００軒を超えると思われる。集落は調査地域を南北に縦断するように段丘崖に沿って帯状に形成されている。北端は行沢川が神川に流れ込んでおり、集落の東側は竪穴住居跡の空白地域をもつが、南端は竪穴住居跡が存在することから当該期の集落は引き続き段丘崖に沿うように帯状に広がっていると思われる。集落は古墳時代から引き続き営まれており、平安時代末まで存続していたものと考えられる。竪穴住居跡にはカマドが設置されており、その平面形はほぼ方形を呈している。掘立柱建物はＳＴ０６を中心とした掘立柱建物群以外にも、ＳＴ２７を中心とするもの・ＳＴ２３を中心とするものもみられる。掘立柱建物群は総柱のものと側柱のみのものとがセットになっているものもある。これらの柱坑の覆土からは奈良・平安時代の土器が出土しており当該期の掘立柱建物群である可能性を補強している。また、柱坑から出土した土器の中には完形のものもあり、柱を立てる際に意識的に埋納されたと思われる。

さて、当該期においては井戸跡や墓坑などが明確に確認されるようになる。井戸跡には素掘りのもの・石組のもの・板組のものがみられる。ＳＫ２６からは墨書土器・盤・人形などの祭祀遺物が出土している。土坑の中でも墓坑と考えられるものには、平面形が不整円形を呈するもの（ＳＸ０１・ＳＸ０８・ＳＫ１５７など）や不整長方形を呈するもの（ＳＫ４２・ＳＫ１０８・ＳＫ１１５・ＳＫ２６７など）がみられる。また、羽口が土坑の底部から出土しているもの（ＳＫ２５３）は鍛冶関連遺構と考えられる。鉄滓が多く出土している土坑（ＳＫ３３０など）についても、鍛冶関連遺構と考えることができる。

遺物では土器・土製品・石器および石製品・金属製品が出土している。土器は、土師器・須恵器・灰釉・緑釉

が出土している。竪穴住居（ＳＢ５１７）から、銅鋺を模倣したと考えられる須恵器の碗（第４分冊第８６図３）も出土している。また、須恵器の円面硯もみられ、文字の使用が考えられる。それを裏付けるように、墨書土器もみられる。灰釉陶器は各時期のものがみられるが、山茶碗については小破片のものしかなく図示することができなかった。緑釉陶器についても、少量であるがまとまって出土している。その特徴から９世紀後半のものと１０世紀前半のものに分けられそうである。土製品では、紡錘車・勾玉・土鈴（第４分冊第１２５図３６）が当該期の竪穴住居跡から出土している。土鈴は空洞部分に土製の小玉が入っている。また、破片であるが瓦もみられる。石製品では砥石・軽石製品・勾玉が出土している。軽石製品は板状に整形したものが多く、孔を穿ったものもある。金属器では金銅三尊仏（第４分冊第１５８図３７）・磬（第４分冊第１５８図３４）・銅鋺（第４分冊第１５８図３６）・銅印（第４分冊第１５８図３５）・鉄鏃・刀子・鎌・苧引金（第４分冊第１６３図１０７）などが出土している。金銅三尊仏・磬・銅鋺は当該期に制作されたものと思われるが伝世する可能性があり、当該地籍が法楽寺という寺院名を表した地名であること・中世の当該遺跡は墓域となることを考えると、中世の遺構に対応する遺物である可能性もある。銅印は「宍来（未）私印」と判読することができる。私印は官印や公印に対して個人的に使用されたものであることから、当該集落の長が使用したと考えることができる。上小地方からは初めての出土である。麻から繊維を取るための道具である苧引金も、上小地方では初見の遺物である。木製品は、井戸跡であるＳＫ２６から盤・人形・木樋などが出土している。その他に斎串・木杭・井戸枠・柱などがそれぞれの遺構から出土している。

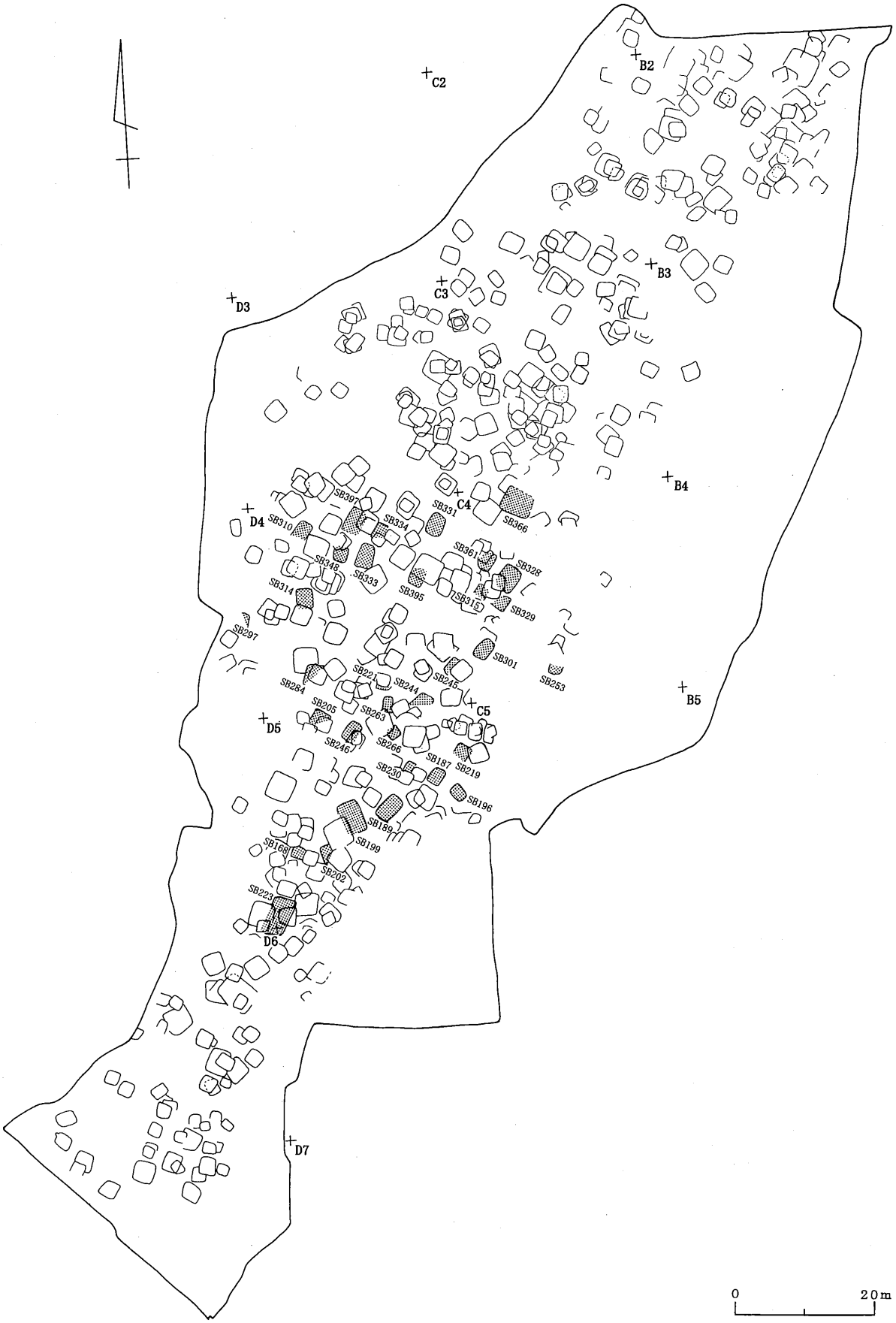
５　中世

平安時代末から始まる中世では法楽寺という地籍名の表すとおり、当該遺跡は寺院あるいは墓域となったと思われる。竪穴住居跡など一般の生活の痕跡は少なく、墓と思われる土坑が目立つようになる。これらの土坑は、調査地域の中央付近を中心に分布している。墓坑は平面形が長方形あるいは不整方形を呈するもの（ＳＸ１１・ＳＸ１２・ＳＸ１３・ＳＸ２２・ＳＫ９９など）がある。多くの墓坑は礫を伴っており、中には石積みを伴うもの（ＳＸ２２）や礫を方形に配置したもの（ＳＸ３９）もみられる。本来、これらの遺構の上部には五輪塔が設置されていたものも多かったと思われる。井戸跡にも五輪塔が出土しているもの（ＳＸ１５）がある。これは投棄された礫と共に火輪が出土しており井戸枠の石積みはかなり崩れている。

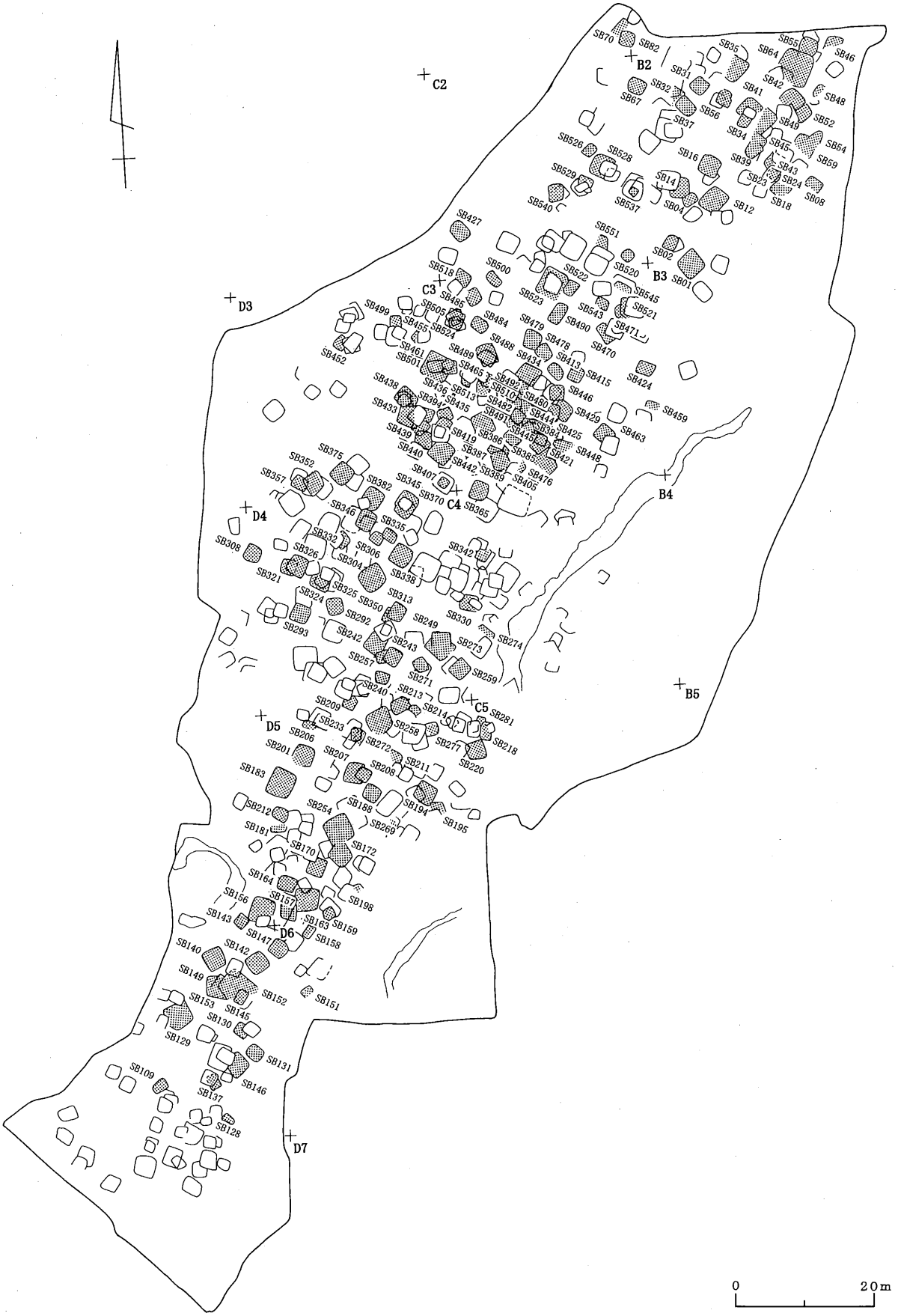
遺物は土器・陶磁器・石製品・金属製品が出土している。ほとんどの遺物は遺構に伴ったものではなく、出土状況が不明なものが多い。土器ではカワラケと称される小皿を中心とした土師質土器や内耳鍋・須恵質の擂り鉢が出土している。陶磁器では青磁・天目・瀬戸・常滑などが出土している。小破片のために図示できないが白磁も出土している。青磁は龍泉窯や越州窯のものがみられる。石製品は、五輪塔・石臼・捏鉢が出土している。五輪塔は散在していたが、おおよそ墓坑の分布している場所から出土している。五輪塔はその形状から１４世紀の後半～１６世紀代に造立されていたものと思われる。金属製品は金銅三尊仏・磬・古銭などがみられる。金銅三尊仏・磬・銅鋺は所属時期の判断が難しいが、寺院関連の遺物として中世にも使用されていたと考えることができる。また、古銭は遺構に伴うものは少ない。古銭は北宋銭を中心に出土しており明銭（永楽通宝・洪武通宝）や近世の日本の古銭（寛永通宝）もみられる。これらの遺物から、中世後期における当該遺跡は寺院あるいは墓域として継続的に１６世紀まで営まれていたと考えることができる。ただし、今のところ法楽寺の存在を示す文献は無い。

B2
C2
B3
ST32
ST25
C3
ST27
ST24
ST26
D3
ST35
ST22
ST21
ST23
SD18
B4
SD20
ST12
D4
C4
SD15
ST14
SD16
SD06
ST10
SD17
ST06
SD03
B5
C5
D5
SD08
ST03
SD09
SD05
SD04
D6
SD02
ST02
D7
0
20m

第６図　遺構全体図

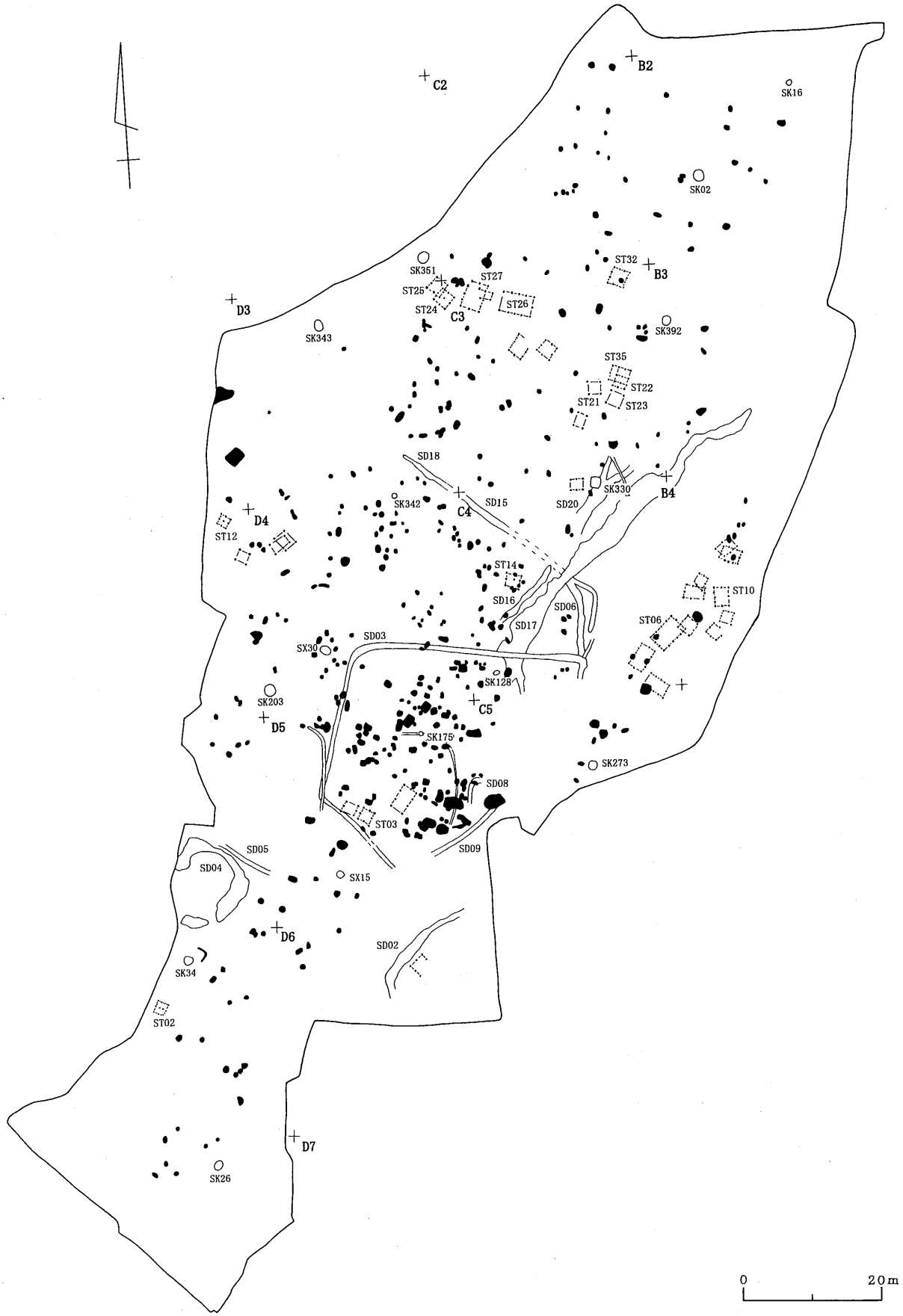


第７図　弥生時代後期の遺構



第８図　古墳時代中期・後期の遺構

第９図　奈良・平安時代の遺構



第10図　古代から中世の遺構分布（井戸・墓等）

第二節　遺　構

１　遺構の分類について

（１）竪穴住居

炉の分類

竪穴住居跡内での地床炉の位置・構造により分類を行った。炉の位置は、第１１図地床炉の位置模式図を基準とした。模式図では、竪穴住居跡を２１分割した。また、構造として地床炉を炉縁石のあるもの・石囲い炉・土器敷炉などの区別をした。炉縁石のあるものは、その有無を表示した。しかし、炉縁石が一つのもの・複数の炉縁石をもつものなどの区別は表示しなかった。

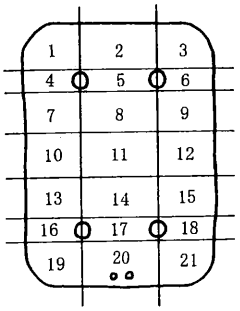
カマドの分類

竪穴住居跡内での（１）カマドの位置・（２）形態・（３）構築材・（４）支脚の残存状況により分類を行った。（１）カマドの位置による分類（第１２図作り付けカマドの分類模式図）では、カマドの基本構造上の分類と設置位置により分類を行った。カマドの基本構造上の分類では、A類（粘土塊の存在から、「類竈」と称されるもの。）・B類（煙道が壁外に出ない構造のもの。煙道部が削平された可能性のあるものも含まれる。）・C類（煙道が壁外に出る構造のもの。煙道部が削平された可能性のあるものも含まれる。）に分けた。カマドの設置位置による分類は、Ⅰ類（柱穴間）・Ⅱ類（壁際のほぼ中間）・Ⅲ類（壁のコーナー付近）に分けた。本報告書では、これらの組み合わせにより分類を行った。（２）カマドの形態分類（第１３図カマドの形態分類）ではカマドの燃焼部の位置や、平面形の形態を中心として分類した。A類（燃焼部が壁下に存在する）・B類（燃焼部が壁に掘り込まれている）・C類（壁に段を作り、カマド袖に用いている）に分けた。さらに、B類はＢ１類（半紡錘形に掘り込んでいる）・Ｂ２類（半円形に掘り込んでいる）・Ｂ３類（方形に掘り込んでいる）に細分した。（３）カマドの構築材では、芯材を用いない粘土のみのもの・芯材に長胴甕を用いるもの・芯材に石を用いる（石組）ものなどに注目した。しかし、火床のみが検出され、袖の構造が不明なものが多い。（４）カマドの支脚には、石・土器を転用したもの・土製のものなどがある。また、支脚が抜かれており、その材質が不明なものが多い。

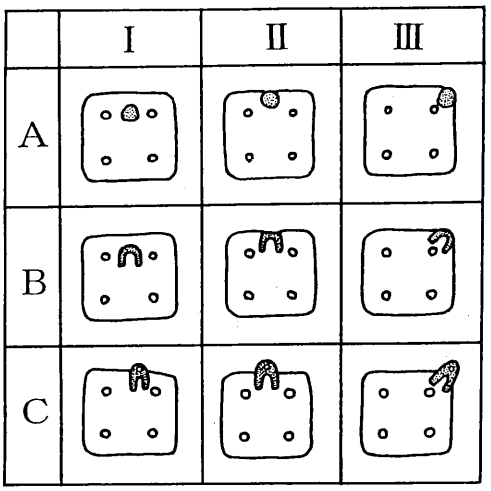
規模の類型

竪穴住居跡の縦軸と横軸の規模により分類（表１）した。これは、中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４総論編（(財) 長野県埋蔵文化財センター「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４松本市内その１総論編」1990）の分類に準じた。竪穴住居跡は小型（３ｍ×３ｍ以下）・中型１（４ｍ×４ｍ）・中型２（５ｍ×５ｍ）・大型１（６ｍ×６ｍ）・大型２（７ｍ×７ｍ）・超大型（８ｍ×８ｍ以上）に分類される。

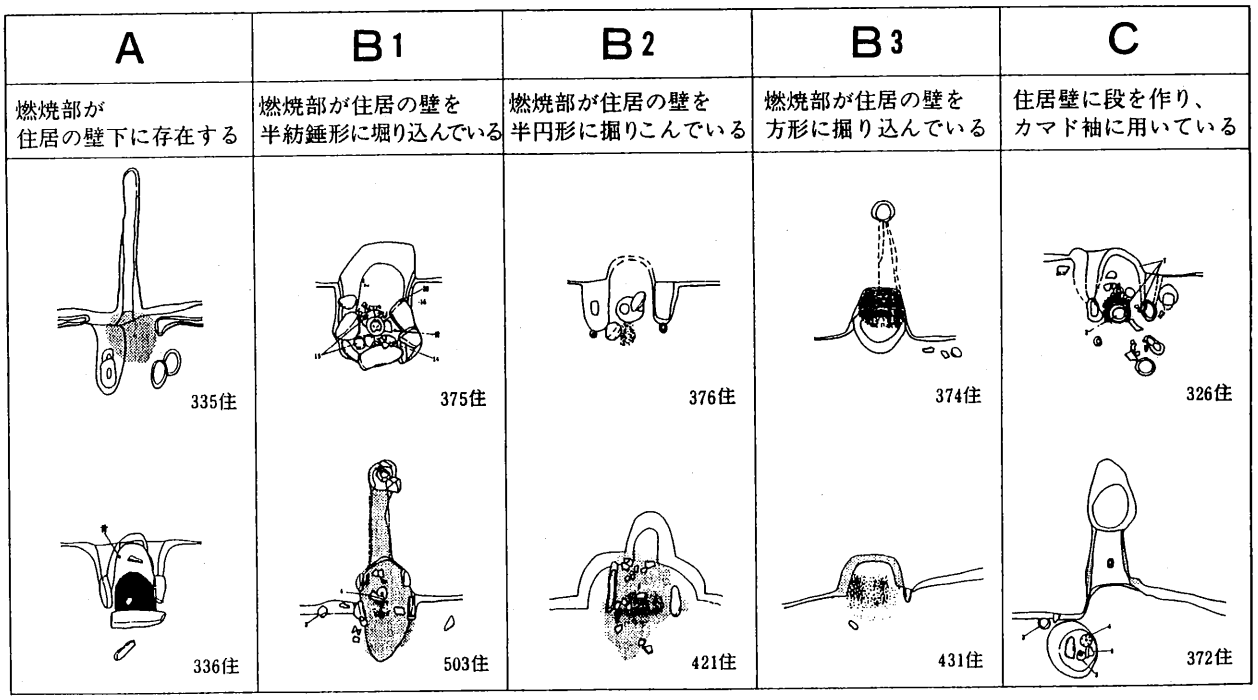
＜参考引用文献＞
杉井健「竈の地域性とその背景」『考古学研究第４０巻第１号』１９９３考古学研究会
谷旬「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要７』１９８２（財）千葉県文化財センター
外山政子「三ッ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第１３集三ッ寺Ⅱ遺跡』１９９１（財）群馬県埋蔵文化財事業団
（財）長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４　松本市内その１総論編』１９９０
埋蔵文化財研究会『古墳時代の竈を考える』１９９２（財）和歌山県文化財センター
柳沢亮他「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書２－上田市内・坂城町－」１９９８（財）長野県埋蔵文化財センター



第１１図　地床炉の位置模式図



第１２図　作り付けカマドの分類模式図
（第32回埋蔵文化財研究集会「古墳時代の竈を考える」
1992埋蔵文化財研究会より）



第１３図　カマドの形態分類
（「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書２－上田市内・坂城町内－」1998（財）長野県埋蔵文化財センターより）

	規格（m×m）	床面積（㎡）
小型	３×３以下	9
中型１	４×４	16
中型２	５×５	25
大型１	６×６	36
大型２	７×７	49
超大型	８×８以上	64

表１　竪穴住居の規模の類型

遺構記号	振り替えの名称	特　　徴
ＳＢ	～号住居・ＳＢ	竪穴住居跡・竪穴状遺構
ＳＫ	～号土坑・ＳＫ	土坑・井戸・墓壙等ＳＢより小さい掘り込み
ＳＴ	～号掘立柱建物・ＳＴ	掘立柱建物跡・礎石建物跡
ＳＤ	～号溝・ＳＤ	溝跡・溝状遺構・河道跡
ＳＸ	ＳＸ	不明遺構・本報告書ではＳＫが含まれる
Ｐｉｔ	Ｐｉｔ・Ｐ	ＳＢ、ＳＴ内の掘り込み・本報告書ではＳＫが含まれる

表２　遺構記号

２　遺構の概要

（１）竪穴住居

①炉、カマドなどの構造的特徴

弥生時代後期

ほとんどの竪穴住居跡に地床炉がみられる。地床炉は、出入り口より奥の柱穴間（５の位置付近）にあるものが多い。また、ほぼ中央にあるものもみられる（ＳＢ１９６・２６４）。大型の竪穴住居跡には地床炉が２カ所にあるもの（ＳＢ１８９・１９９・３３４）もみられる。これらは、柱穴間（５の位置）に位置する地床炉を基本とし、他の場所の炉は補助的に設置されているようである。地床炉には、縁石をもつものが多く弥生時代後期の竪穴住居跡の約３０％を占める。当該遺跡の東に位置する大日ノ木遺跡においても１９軒のうち６軒（約３１％）に炉縁石をもつ竪穴住居跡が確認されている。また、千曲川右岸の下町田遺跡などにおいても高い割合でみられる。一方、千曲川左岸の当該期の遺跡では、炉縁石をもつものはほとんどみられない。岳の鼻遺跡では７２軒の竪穴住居跡が確認されているが、炉縁石をもつものはみられない。浦田遺跡・和手遺跡などにおいても同様である。上小地方では、当該期の炉縁石をもつ竪穴住居跡は千曲川右岸の遺跡に高い割合でみられる傾向がある。

古墳中期から後期

カマドの位置を中心とした分類（第１２図）によるとＢⅡとＣⅡのもので９０％以上（１３４例のうちＢⅡは８０例・ＣⅡは４４例）を占める。カマドの形態による分類（第１３図）からみると、Ａが一番多く約５０％（１０３例のうち５１例）を占める。Ｂ１（１０３例のうち２９例）とＢ２（１０３例のうち２０例）も多く、両者で５０％近くを占める。また、資料の比較のできる当該期の国分寺周辺遺跡群新幹線地点のものをみると、カマドの形態による分類（第１３図）では、Ａ（６８例のうち４９例）が７０％以上を占める。一方、カマドの構築材をみると、法楽寺遺跡ではカマドに石を使用したものが多くみられる。また、特異なカマドとしてＳＢ３０４とＳＢ３５２のものが上げられる。ＳＢ３０４ではカマドに向かって右袖に長胴甕が倒立した状態で設置されていた。ＳＢ３５２ではカマドに向かって右袖に円筒形土製品が縦位に設置されていた。

奈良・平安時代

カマドの位置を中心とした分類（第１２図）によるとＢⅡとＣⅡのもので約８４％（１２０例のうちＢⅡは５６例・ＣⅡは４５例）を占める。カマドの形態による分類（第１３図）からみると、Ａ（９０例のうち３０例）が多いが、Ｂ１とＢ２（９０例のうちＢ１は２０例・Ｂ２は３０例）も多く、両者で６７％を占める。また、資料の比較のできる当該期の国分寺周辺遺跡群新幹線地点のものをみると、カマドの形態による分類（第１３図）では、Ａ（３９例のうち２０例）が多い。一方、カマドの構築材をみると、法楽寺遺跡ではカマドに石を使用したものが多くみられる。特異なカマドとして、ＳＢ０３・ＳＢ４１１・ＳＢ５１１が上げられる。ＳＢ０３には２基のカマドが並列して設置されていた。ＳＢ４１１は、調査時に削平が進んでしまっているものの、カマドが竪穴住居跡の中央部付近に設置されており、その背後の広い範囲が一段高くなっていることが調査写真から予想される。類例のない住居形態であり、今後の資料の増加を待ちたい。ＳＢ５１１のカマドの煙道部分は破壊が著しいが、石が並べられていることが確認できる。この様なカマドは、上小地方では境田遺跡（真田町）・四日市遺跡（真田町）・宮平遺跡で確認されている。これらの遺跡では古墳時代後期の竪穴住居跡で確認されている。当該遺跡ＳＢ５１１については、その出土土器から奈良時代初頭の竪穴住居跡と考えられ、宮平遺跡のものに続く時期のものと考えられる。このことから、上小地方では、石組みの煙道をもつ竪穴住居跡は古墳時代後期から奈良時代初頭にかけてみられると考えられる。この様な煙道をもつ竪穴住居跡は、佐久地方にもみられるということであるが、上小地方では神川に沿って分布している。集落を構成する集団間の関係が示唆されて興味深い。今後とも、検討を要する課題となろう。

②規模の類型（第１４図）

弥生時代後期

竪穴住居跡の規模と形態をみると、平面形は長方形のものがほとんどである。床面積をみると、１０㎡～４０㎡の間にほとんどの竪穴住居跡がおさまるが、２軒だけ突出した大きさのものがある。調査軒数の多い岳の鼻遺跡と比較しても、同様の傾向がみられる。ただし、岳の鼻遺跡（第１６図）には弥生時代後期の竪穴住居跡と共に古墳時代初頭のものが含まれているためか、ほぼ方形となるものもみられる。また、岳の鼻遺跡では１０㎡以下の小型のものが確認できるが、当該遺跡では確認できなかった。

古墳中期から後期

平面形をみるとほぼ方形のものがほとんどであるが、若干横長になる傾向がある。これは、竪穴住居の内部にカマドが設置されるようになったことと関係する可能性がある。つまり、カマドが設置された壁に対する空間の確保の意味があったのではないかと思われる。また、床面積からみると、１０㎡～３０㎡のものが一般的な竪穴住居跡となる。国分寺周辺遺跡群新幹線地点（第１５図）でも、同様の傾向がみられる。

奈良・平安時代

古墳時代後期と同様に平面形は、ほぼ方形のものがほとんどであり、若干横長になる傾向がある。床面積からみると、１０㎡～３０㎡のものが一般的な竪穴住居跡となる。ただし、１０㎡以下の小型の竪穴住居跡も古墳時代より増加している。また、突出して大型のものもみられる。国分寺周辺遺跡群新幹線地点（第１５図）や宮平遺跡においても、同様の傾向がみられる。

③その他

弥生時代後期

地床炉以外に注目される施設として、いわゆるベッド状遺構（棚状遺構）とよばれる竪穴住居跡内の高まりがみられる。ＳＢ１８９では炉１に向かって右下のコーナーにベッド状遺構をもち、その横には炉２がある。ＳＢ２２３では炉に向かって左上のコーナーにベッド状遺構をもつ。ＳＢ２４５では炉に向かって左下のコーナーにベッド状遺構をもつ。さらに、その横には入り口施設の跡と思われる柱穴がある。いずれの事例も、竪穴住居跡内のコーナーに付設されている。当該期のベッド状遺構は大日ノ木遺跡ＳＢ２３でも確認されており、上小地方では千曲川右岸の遺跡にみられる傾向がある。

古墳中期から後期

カマド以外に注目される施設として、棚状遺構・石積みなどがみられる。棚状遺構はＳＢ１５６・３８２で確認されている。ＳＢ１５６ではカマドに向かって右側に棚状遺構がある。カマドに接して構築されており、桐生直彦氏の分類（桐生直彦「君は“棚”を見たか－武蔵国における棚状施設の事例分析－」『土壁創刊号』1997 考古学を楽しむ会）のＡＲに分類されよう。ＳＢ３８２にも棚状遺構がみられる。カマドに向かって右側の側壁に沿って構築されており、側壁には石積みもみられる。桐生氏の分類のＢに分類されよう。石積みはＳＢ３０４・４３４・４９２などにもみられる。石積みに使用されている石は、角の丸くなった河原石で周辺から容易に入手できるものである。ＳＢ３０４には２ケ所にカマドが存在し、カマドに向かって左側とカマドと反対側の側壁に石積みがみられる。ＳＢ４３４には竪穴住居跡のカマド側以外の側壁に石積みがみられる。ＳＢ４９２にはカマドに向かって右側の側壁に石積みがみられる。その他に、貯蔵穴が設けられているものもみられる。ＳＢ２４９ではカマドに向かって右側に貯蔵穴と思われる土坑（ＳＫ０１）をもち、その中に２個体の長胴甕が倒立状態で置かれていた。

奈良・平安時代

カマド以外に注目される施設として、ベッド状遺構・石積み・間仕切り溝などがみられる。ベッド状遺構はＳＢ４８３で確認されている。ここでは、カマドに向かって左上のコーナーを中心にＬ字状に構築されたものと、左下のコーナーを中心にＬ字状に構築されたものが確認されている。石積みは、ＳＢ５１１・５４９で確認されている。石積みに使用されている石は、角の丸くなった河原石で遺跡周辺から容易に入手できるものである。ＳＢ５１１では、カマドに向かって右側の側壁に石積みがみられる。また、カマドの左右に平坦面を上にした石が並んでいるが、石積みというより棚状遺構と同様の機能をもつ施設のように思われる。ＳＢ５４９ではカマドに向かって右側の側壁に石積みがみられる。次に、間仕切り溝で注目されるものは、ＳＢ９１・４６８にみられる。ＳＢ９１では、カマドに向かって左側に間仕切り溝が確認されている。この溝跡により、カマドに向かって左側には小空間が設けられていたことが予想される。ＳＢ４６８は、カマドに向かって右側に間仕切り溝が確認されている。これによって、カマドに向かって右側に小空間が設けられていたことが予想される。その他に注目されるものとして、ＳＢ１４８では竪穴外柱穴がみられる。これは、竪穴外壁に沿って立てられた柱とされており壁立式の住居にみられるとされている。また、ＳＢ３２０では、その主柱の位置には平坦な石が地面を掘り込んで設置されている。この石の上には柱がのっていたことが推定される。ＳＢ４９５は床面の中央部が方形に低くなっている。この竪穴住居跡の土層断面を観察すると中央と周囲では別の堆積土層に覆われており、竪穴住居の構造について検討が必要と思われる。

（２）掘立柱建物

掘立柱建物は４１棟が確認されている。掘立柱建物には、側柱のものと総柱のものがみられる。規格から分類すると、１間×１間（５棟）・２間×１間（５棟）・２間×２間（１８棟）・２間×３間（４棟）・２間×４間（５棟）・３間×３間（１棟）・３間×４間（２棟）・不明（１棟）に分けられる。その中でも、ＳＴ０６・ＳＴ１０・ＳＴ２６・ＳＴ２７は柱穴に区画された内側が４０㎡以上となり、規模が大きな掘立柱建物となる。さらに、ＳＴ０６・ＳＴ２７には廂が付くと思われる。これらは、中心的な役割を担った掘立柱建物であると考えられる。ほとんどのものは、６㎡～２５㎡の間の規模に集中している。また、柱穴の掘り方が方形を指向しているもの（ＳＴ２１・ＳＴ２２・ＳＴ２５・ＳＴ３５）もみられる。

総柱の掘立柱建物はＳＴ０２・ＳＴ１２・ＳＴ１４・ＳＴ２２・ＳＴ２４・ＳＴ２５が確認できる。規格をみると２間×２間で占有面積が１１㎡～２５㎡の規模のものである。総柱のものや側柱のものの一部（ＳＴ０３・ＳＴ２１・ＳＴ３２・ＳＴ３５など）は倉庫として使用されたと思われる。これらは、調査地域内の数カ所に竪穴住居の密集している場所を避けるように分散しており、集落内の小集団所有の倉庫とも考えられる。

掘立柱建物跡は比較的集中して配置されている。特に掘立柱建物群として把握できるものとして、①ＳＴ０６を中心とする掘立柱建物群（A群）・②ＳＴ２７を中心とする掘立柱建物群（B群）・③ＳＴ２３を中心とする掘立柱建物群（C群）が上げられる。A群は、竪穴住居跡の密集した地域から少し離れて形成されている。掘立柱建物は、ＳＴ０６を最大の建物として微高地上に帯状に配置されている。B群は、ＳＴ２７を最大の建物とする側柱の掘立柱建物群と総柱の掘立柱建物群からなっている。C群は、規模の似たものが集中している。平面形が方形で総柱のものが中心となることから、倉庫群と捉えることもできそうである。掘立柱建物は、明確に所属時期がわかるものは少ないが、柱穴からの出土土器などから、奈良・平安時代のものが多いようである。

（３）溝状遺構

溝状遺構には、人工的なものと自然流路と思われるものがみられる。いずれも、削平が著しく残存状況が良くないものが多い。その為、所属時期の判断が難しいものが多い。

ＳＤ０２は、遺構集中地域から少し離れて検出されているが、古墳時代後期の土器を中心に出土している。Ｓ

Ｄ０３は、ロの字状に特定の地区を囲むようにつくられている。遺構からの出土土器は、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良、平安時代のものが出土している。平安時代終末の１１世紀後半から１２世紀代の土器も出土している。幅の狭い区画溝としての機能が考えられる。ＳＤ０４は、神川の段丘崖際に位置している。溝状遺構を含めると、直径約２４ｍの不整円形を呈する遺構が確認できる。溝状遺構に囲まれた地域も直径約１８ｍの不整円形を呈することから、円墳の痕跡の可能性が考えられた。その為、中央部の精査を行ったが、墳丘や石室等の痕跡などの古墳に係る遺構の痕跡は見つけられなかった。また、ＳＤ０４内からは人頭大の礫が出土しているものの、古墳時代の土器以外に平安時代のものもみられることから、古墳の可能性を指摘するだけに留めておきたい。ＳＤ０５・０６・０９・１５・１８は、本来は同一の溝状遺構であったと思われる。しかし、他の遺構や撹乱により寸断されていると思われる。これは、西側の神川の段丘崖側をあけたフ字状を呈している。幅の狭い区画溝としての機能が考えられる。ＳＤ０８は、ほぼ直角に折れ曲がったコーナー部分のみであった。詳細は不明である。ＳＤ１６・１７・２０は当該遺跡の北を流れる行沢川の氾濫による川筋の跡とみられる。ＳＤ１６・１７・２０からは、古墳時代から平安時代の各時期の土器が出土している。

これらの中で注目されるのはＳＤ０３とＳＤ０５からＳＤ１８までの溝状遺構である。これらは、溝幅が狭く区画溝としての機能が考えられるが、中世の墳墓を囲むように配置されていることから、中世の墓域に係る溝状遺構である可能性があると考えられる。

（４）土坑（井戸・墓坑・その他）

土坑は、数多く確認されている。これらは、井戸址・墓坑・廃棄坑・柱穴など様々なものがあるが、用途不明のものが多い。ここでは、注目すべきものについてだけ述べておくこととする。

井戸跡（表３）

法楽寺遺跡では、井戸の可能性の高いものも含めると、１５の井戸跡がある。これらは、地面を擂鉢状に掘り込んだ後、井筒を円筒或いは角筒状に掘っているものが多い。また、擂鉢状に掘った時点で水が湧いた場合は、その段階で井筒を構築しているようである。宇野隆夫氏の井戸分類（宇野隆夫「井戸考」『史林第65巻第５号』1982）に従うと、井戸は大きく①素掘り②丸太刳抜き③板組④曲物積上⑤桶積上⑥石組⑦瓦組⑧土器組のものがあることが知られている。当該遺跡では、①素掘りの井戸（ＳＸ０２・ＳＫ１６・ＳＫ２６・ＳＫ３４・ＳＫ１２８・ＳＫ１７５・ＳＫ２０３・ＳＫ２７３・ＳＫ３４２・ＳＫ３４３・ＳＫ３９２・ＳＫ３５１）③板組の井戸（ＳＫ３３０）⑥石組の井戸（ＳＸ１５・ＳＸ３０）が確認されている。井筒は円形のものが多く、素掘りの井戸や石組のものがみられる。これは、上小地方の他の遺跡でも同様である。

井戸は長期間使用されていることが多く、補修を行いながら使用されていることもある為、所属時期を確定することが難しい。遺構に伴うと思われる遺物から使用期間を推定すると、当該遺跡の井戸状遺構は古墳時代後期頃には出現しており、奈良・平安時代には多くのものが使用されていたと思われる。また、中世に使用されていたものもある。

一方、井戸には祭祀行為の痕跡が確認されるものもある。ＳＫ２６には墨書土器（第４分冊第１６９図４・５・６・７・８）や木製品の盤（第４分冊第１６７図１）・人形（第４分冊第１６７図３）が出土している。墨書土器には「共」の字が書かれており、人形も出土していることから水あるいは井戸をめぐる何らかの祭祀的行為が行われたと考えられる。この出土土器から、少なくとも１０世紀第１四半期頃までは使用されていたことが想定される。ＳＸ１５には、投げ込まれた礫の中に五輪塔の火輪が確認できる。遺構検出状況をみると、本来は四角になると思われる石積みが土坑内にみられる。その中に礫が投げ込まれている訳であるが、墓坑とも考えられる。しかし、墓坑と推定する遺物が出土していないこと・中世の井戸には礫岩を投げ込んで廃棄している事例（塩田城跡）があること・一辺約１００㎝と規模が大きくなること・掘り方が墓坑のものより大きくなることから墓坑

とするより井戸と考えた方が良いと判断した。ＳＸ１５は廃棄行為における火輪の出土から、少なくとも中世後半には機能していたことが考えられる。

墓坑

墓坑と推定するには、①骨などの痕跡の有無②墓としての特徴的な構造から分析することが必要になると思われる。①骨などの遺骸の痕跡については、土坑内の土壌のリン酸分析等も必要となる。しかし、今回は行うことができなかった。②墓としての構造についても、上部構造等の破壊が激しく判断することが困難なものが多い。この様な状況の中で、墓坑の可能性の高いものをみていくこととする。

①骨などの遺骸の痕跡を判断材料の中心としてみた場合、骨を出土しているもの（ＳＸ１７・ＳＸ１８・ＳＫ３０９）・五輪塔の一部（地輪）が出土しているもの（ＳＸ２７）がみられる。いずれも、礫を底部に敷いた構造となっている。また、刀子を出土しているもの（ＳＫ１８４）・鎌先を出土しているもの（ＳＫ２１４）・古銭を出土しているもの（ＳＫ５９）もある。これらの遺物は、遺体埋葬に伴う遺物と考えられる。刀子を出土しているものは、上沖遺跡ＳＫ０２に類例がみられる。上沖遺跡ＳＫ０２では長方形の墓坑に骨片と一緒に刀子が出土している。古銭を出土しているものには、真行寺遺跡群自動車道地点ＳＫ２３２などに類例がみられる。ここからは、銅銭の他に鉄蓋も出土している。

②墓としての構造からみると、平面形が長方形或いは長楕円形の土坑（奈良・平安時代のものが多いと思われる）・集石や石組を伴う平面形が長方形或いは方形の土坑（中世のものが多いと思われる）が墓坑に該当すると思われる。これらには、炭や焼土が伴うもの（ＳＸ１２・ＳＸ１３）もみられる。

中世の集石墓には、方形或いは長方形に石を並べたものがある。これらは、Ⅰ縁石が明瞭なもの・Ⅱ縁石が不明瞭なもの・Ⅲ不定形で区画の無いもの・Ⅳ骨蔵器が埋納されたもの・Ⅴ火葬骨を埋納したものなどに分けられる。Ⅰ・ⅡはA石を段積みしたものとＢ平積みしたものに細分される。（山崎克巳「一の谷中世墳墓群遺跡とその周辺」『第３回「考古学と中世史研究シンポジウム」「村の墓・都市の墓」』1992 帝京大学山梨文化財研究所）当該遺跡では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのものが多くみられるが、Ⅳはみられない。また、Ⅴも確認はできなかった。

当該遺跡では、墓坑は古墳時代後期にもみられるが、平安時代に増加する。中世には墓坑が中心的な遺構となると思われる。奈良・平安時代の遺構をみると集落域と墓域が混在しているようにみえるが、これは集落から視野に入る範囲に墓域を設定している傾向にあることと関係すると思われる。上沖遺跡・神林遺跡においても平安時代の集落周辺に墓坑群をもつことが確認されている。また、土坑の分布状況をみると、調査地域全域にみられるものの、分布密度には差がある。特に、中世の墓坑とみられるものはＳＤ０３の内側に濃い密度で分布しているようである。しかし、仏教関連遺物の出土はあるものの、寺院関連の遺構は確認できなかった。すると、字名にある「法楽寺」の存在が問題になると思われる。寺院と墓地との位置関係は寺辺に墓地または埋葬の施設をもつ場合が多いことは考古学的にも指摘されていることから、調査地域外に寺院が存在した可能性もある。今後の、調査・研究の進展が望まれる。

柱穴

柱穴は、柱穴群と称するほど多くが確認されている。しかし、遺構の切り合いが激しく、はっきりとは確認することができなかった。今回は、当該期の掘立柱建物が存在するという事実確認だけにとどめておきたい。

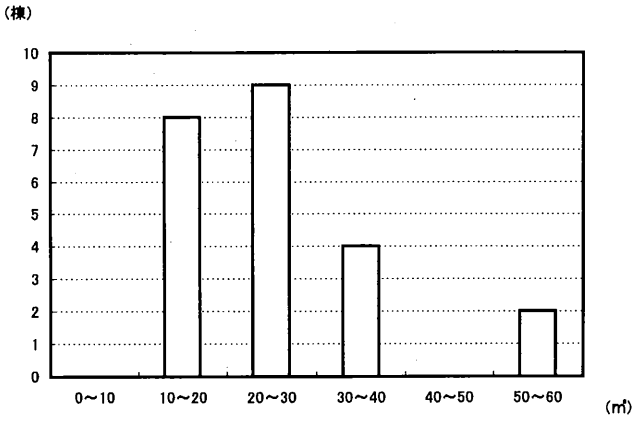
その他

その他に注目すべきものとして、ＳＫ２５３が上げられる。この土坑の底部からは羽口がほぼ完形で出土しており、鍛冶関連の遺構の可能性がある。井戸跡（ＳＫ３３０）からも鍛冶滓が数多く出土している。また、柱穴と思われるものも確認されている。Ｐ６８２・Ｐ７１７には柱が残っており、Ｐ１６９５には柱痕が確認されている。Ｐ５５２５の底部には平らな石が据えられており、柱穴と考えられる。

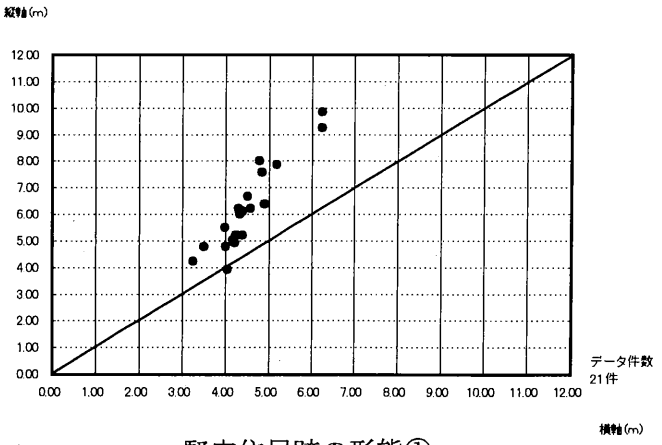
<参考引用文献>
・竪穴住居
上田市教育委員会『岳の鼻遺跡』１９９４
上田市教育委員会『浦田Ａ・宮脇遺跡』１９９９
上田市教育委員会『浦田Ｂ遺跡』１９９９
桐生直彦「君は“棚”を見たか－武蔵国における棚状施設の事例分析－」『土壁創刊号』１９９７考古学を楽しむ会
篠原浩江「弥生時代の特殊住居跡」『赤い土器を追う』１９９０佐久考古学会
助川朋広「弥生時代の炉再考」『赤い土器を追う』１９９０佐久考古学会
高橋泰子・多ケ谷香理「竪穴住居に関する基本的用語の定義」『土壁第２号』１９９８考古学を楽しむ会
多ケ谷香理「竪穴外柱穴から壁立式住居といえるのか－東京都の事例分析より－」『土壁第３号』１９９９考古学を楽しむ会
林幸彦・花岡弘「弥生時代の炉」『信濃第３５巻第４号』１９８３
若林卓他「第三章大日ノ木遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２１』１９９９（財）長野県埋蔵文化財センター
和根崎剛『四日市遺跡Ｃ地区』１９９４真田町教育委員会
和根崎剛『境田遺跡・西田遺跡』１９９６真田町教育委員会

・土坑
上田市教育委員会『神林遺跡・下郷古墳群』１９９２
上田市教育委員会『上沖（大沢）遺跡』１９９８
宇野隆夫「井戸考」『史林第65巻第５号』１９８２
川崎保『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２０』１９９９（財）長野県埋蔵文化財センター
小都隆「草戸千軒の井戸」『考古学研究第２６巻第３号』１９７９考古学研究会
駒見和夫「井戸をめぐる祭祀」『考古學雑誌第７７巻第４号』１９９２
斉藤忠「中世の火葬墓と一の谷中世墳墓群遺跡」『一の谷中世墳墓群遺跡』１９９３磐田市教育委員会
鈴木孝之「石組みの井戸跡について」『埼玉考古学論集－設立１０周年記念論集－』１９９１（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
帝京大学山梨文化財研究所『第３回「考古学と中世史研究シンポジウム」「村の墓・都市の墓」』１９９２
帝京大学山梨文化財研究所『中世社会と墳墓』１９９３石井進・萩原三雄 編
野代幸和「山梨県における中近世墓制の変遷」『山梨縣考古學協會誌第１１号』２０００山梨県考古学協会
東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会『東日本における奈良・平安時代の墓制』１９９５
藤田三郎「弥生時代の井戸」『同志社大学考古学シリーズⅣ考古学と技術』１９８８森浩一 編

弥生

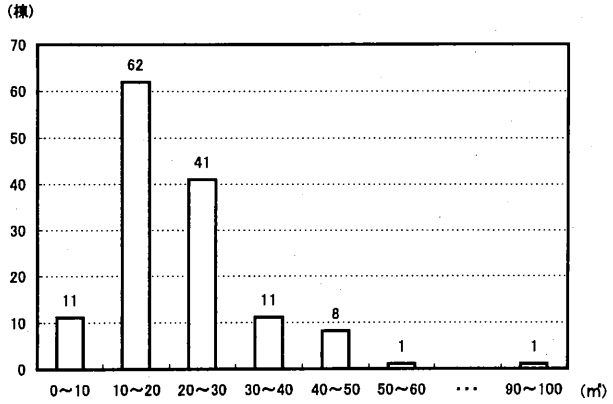


床面積①

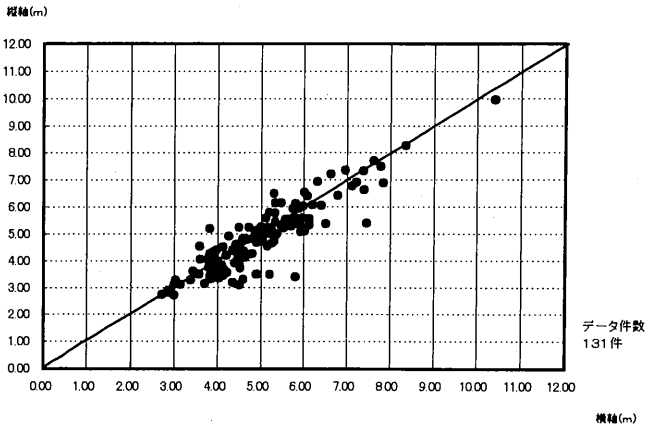


竪穴住居跡の形態①

古墳

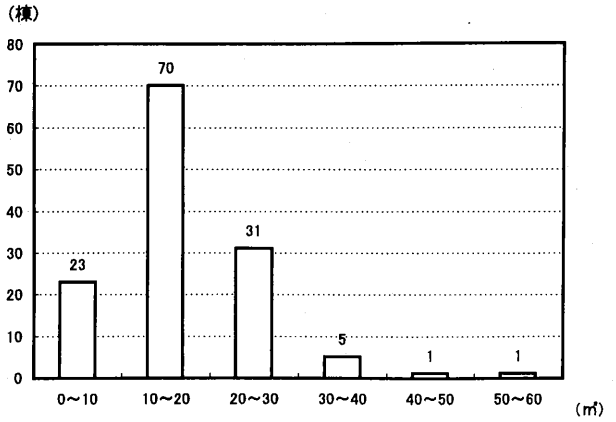


床面積②

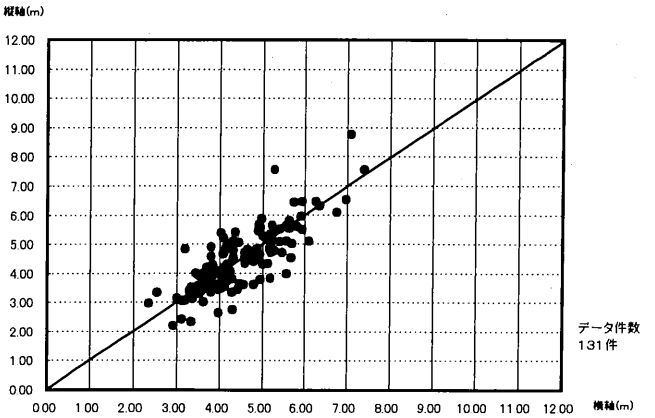


竪穴住居跡の形態②

奈良・平安



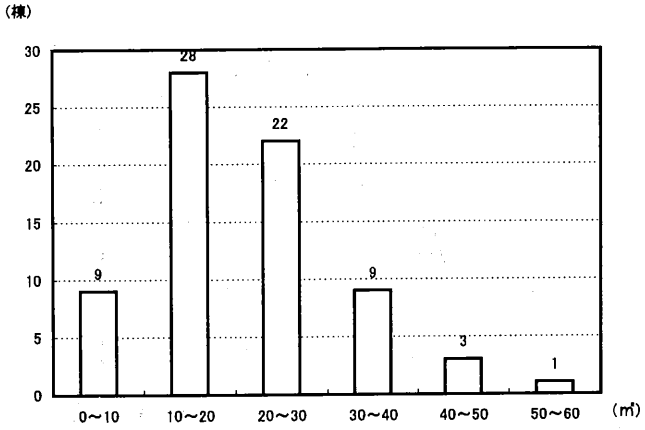
床面積③



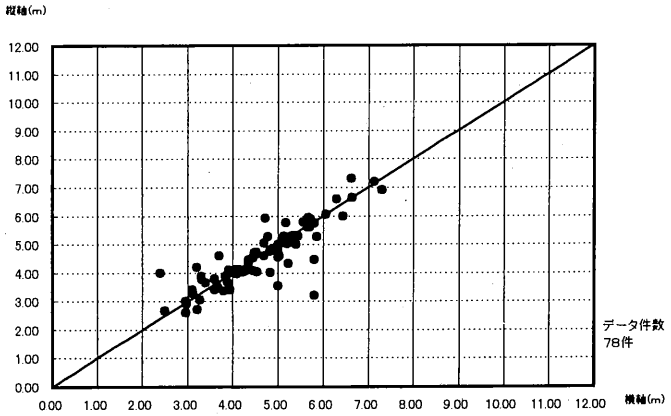
竪穴住居跡の形態③

第１４図　竪穴住居跡の規模と形態

古墳

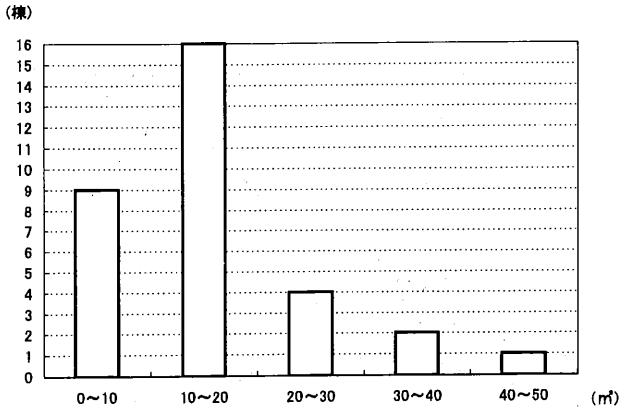


床面積①

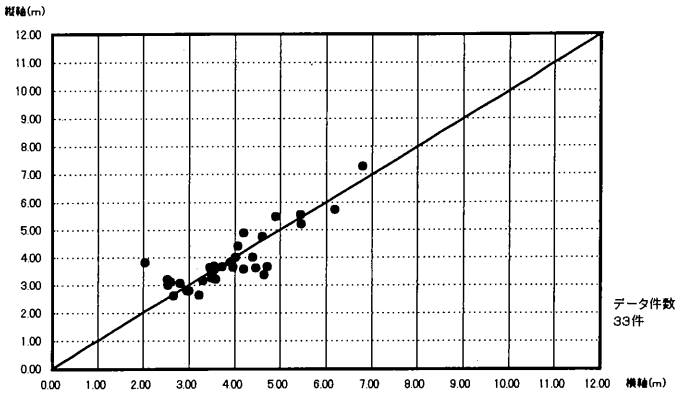


竪穴住居跡の形態①

奈良・平安



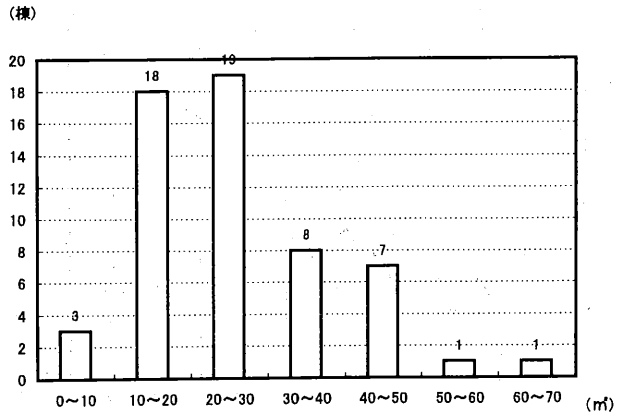
床面積②



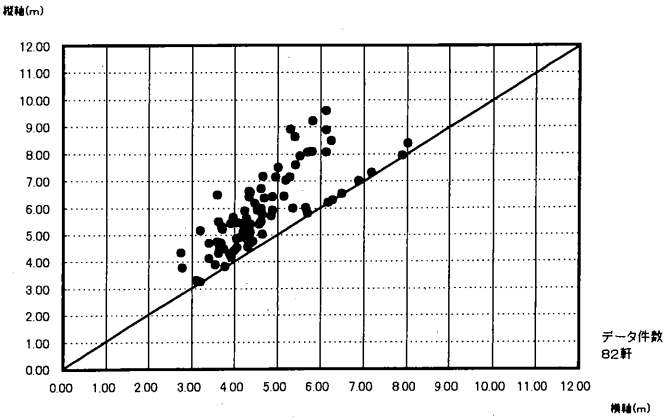
竪穴住居跡の形態②

第１５図　竪穴住居跡の規模と形態（国分寺周辺遺跡群新幹線建設地区）

弥生



床面積



竪穴住居跡の形態

第１６図　竪穴住居跡の規模と形態（岳の鼻遺跡）

遺跡名	遺構名	時代	堀方平面形	井戸側の分類	規格	堀方の形態	井筒形態	深さ	備　　考
中井遺跡	井戸跡	平安前期	方形	縦板組	一辺が約７０cmの方形	(角筒形)	角筒形	不明	上方は横板組・下方は縦板組・検出面の石積は敷石か？
高田遺跡	第３号土坑	平安前期	方形	横板井籠組	上部は約３００cmの不整円形・井筒部分は約６０cmの不整方形	角筒形	角筒形	１４０cm	
天神遺跡	井戸跡	平安前期	方形に近い円形	石組円筒形	直径が約９０cmの円形	(円筒形)	円筒形	１１０cm	
向田Ⅱ遺跡	井戸跡	不明	円形	石組円筒形	直径が約７０cmの円形	(円筒形)	円筒形	１６５cm	
道場廃寺	比丘尼井戸	平安	楕円形	石組円筒形	直径が約７０cmの円形	(円筒形)	円筒形	１４５cm	
浦田Ｂ遺跡	SK319	中世	円形	素掘り	上部は約２３０cmの円形・井筒部分は直径が約９０cmの円形	上部は擂鉢形・下部は円筒形	円筒形	２８０cm	
	SK279	中世	円形	素掘り	直径が約１５０cmの円形	擂鉢形		４５cm	
鴛籠田遺跡	SK231	古代	円形	素掘り	上部は約２２０cmの円形・井筒部分は直径が約８０cmの円形	上部は擂鉢形・下部は円筒形	円筒形	１２０cm	
	SK455	不明	円形	素掘り	直径が約３８０cmの円形	擂鉢形		９０cm	
塩田城跡	井戸跡	中世	円形	石組円筒形	直径が約７０cmの円形	(円筒形)	円筒形	不明	
蔵替遺跡	SK02	平安前期	方形	不明	上部は一辺が約２２０cmの方形、底部は一辺が約１２０cmの方形、井筒部分は一辺が約１００cmの方形	逆台形	角筒形	１８０cm	板はほとんど残っていない
法楽寺遺跡	SX15	不明	円形	石組	井筒部分は一辺が約１００cmの方形の石組み、堀方は約２００cmの不整円形	(擂鉢形)	円筒形？	５０cm	
	SX30	平安	円形	石組	上部は約２３０cmの不整円形・井筒部分は一辺が約１００cmの方形	上部は擂鉢形・下部は円筒形	角筒形	１８０cm	
	SK02	奈良・平安	円形	素掘り	直径が約１３０cm・底部の窪みを井筒の跡とすると井筒部分は約９０cmの円形	擂鉢形	円筒形	１２０cm	
	SK26	平安	円形	素掘り	直径が約１６０cmの不整円形・底部の下端を井筒の跡とすると井筒部分は一辺が約１００cmの方形	擂鉢形	円筒形	１００cm	祭祀的行為を行っている（墨書土器・木製品出土）
	SK273	不明	円形	素掘り	直径が約２６０cmの不整円形・第２，３層の部分を井筒跡とすると井筒部分は約１００cmの円形	擂鉢形	円筒形	５０cm	
	SK343	不明	円形	素掘り	直径が約１１０cmの不整円形・第２層の間を井筒の跡とすると井筒部分は約１００cmの円形	擂鉢形	円筒形	１００cm	
	SK330	不明	円形	縦板組	井筒部分は一辺が約８０cmの方形の板組み、堀方は一辺約２３０cmの方形	２段の角筒形	角筒形	１６０cm	
	SK16	古墳後期	円形	素掘り	直径が約１３０cmの不整円形・第４層の間を井筒跡とすると井筒部分は直径約６０cmの円形	擂鉢形	(円筒形)	７０cm	
	SK34	平安	円形	素掘り	直径が約２７０cmの不整円形	擂鉢形	(円筒形)	９０cm	
	SK128	奈良・平安	円形	素掘り	直径が約１８０cmの不整円形	擂鉢形	(円筒形)	５０cm	井戸でない可能性ある
	SK175	不明	方形・円形	素掘り	上部は一辺が約１１０cmの方形・下部は約４０cmの円形	下部は円筒形	(円筒形)	４０cm	井戸でない可能性ある
	SK203	奈良・平安	円形	素掘り	直径が約３１０cmの不整円形	擂鉢形	(円筒形)	９０cm	
	SK342	平安末期	円形	素掘り	直径が約１４０cmの方形指向の不整円	擂鉢形	(円筒形)	５０cm	墓？
	SK392	奈良・平安	円形	素掘り	直径が約２６０cmの不整円形・底部は長方形			７０cm	墓？
	SK351	平安	円形	素掘り	直径が約２９０cmの不整円形	擂鉢形	(円筒形)	９０cm	

表３　上小地方の井戸状遺構

第三節　遺　物

1　遺物の分類について

（1）土　器

分類方法

土器の分類方法を以下の基準により分類した。

①器類：器形の大きな差異、主要な整形技法の差異による分類（甕・壺・高坏…）

②器種：器類のなかにおける形態や整形技法の差異による分類（甕A類・甕B類…）

③器種細分：器種のなかでの部分的な形態差（甕Ａ１類・甕Ａ２類…）

また、弥生時代後期の土器については従来からの分類に準じたが、甕については器面に櫛描波状文を施したものと斜走文を施したものに分けた。古墳時代の土器については「出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群緊急発掘調査報告書」（1994 松本市教育委員会）・「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12榎田遺跡」（1999 長野県埋蔵文化財センター）の分類に準じて、当該報告書用に新たに作成した。古代の土器については「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4総論編」1990 長野県埋蔵文化財センターによる分類基準に準じて作成した。なお、部分的に新たに分類したものを加えてある。

箱清水式土器の分類

①甕（甕は器形からみると、緩やかに胴部が張るもの・胴部の張りが強いものや球形胴を呈するものなどがあるが、今回は器面の模様を中心に分類した。）

A類（器面に波状文を施したもの。）

Ａ１→頸部に簾状文等の模様が施されたもの。

Ａ２→器面に波状文のみが施されたもの。

B類（器面に斜走文を施したもの。）

Ｂ１→頸部に簾状文等の模様が施されたもの。

Ｂ２→器面に斜走文のみが施されたもの。

C類（底部に高台が付くもの。）

②壺

A類（頸部から胴部にかけて緩やかにひろがるもの。）

Ａ１→口縁部の形状から、緩やかに外反するもの。

Ａ２→ラッパ状にひらくもの。

Ａ３→受け口状を呈するもの。

B類（胴部が球形を呈するもの。）

Ｂ１→口縁部の形状から、緩やかに外反するもの。

Ｂ２→ラッパ状にひらくもの。

Ｂ３→受け口状を呈するもの。

③高坏

A類（鍔状の口縁部をもち、受け部に稜線をもつもの。）

B類（鍔状の口縁部をもち、受け部に稜線をもたないもの。）

C類（鉢状の受け部をもつもの。）

④鉢（口縁部に片口をもつものが多いが、片口をもつもの・もたないものの区別はしないでおく。）

A類（口縁部が内湾するもの。）
B類（口縁部が直線的にひらくもの。）
C類（口縁部が内湾し、器高が高いもの。）
⑤甕形土器(甕の形態であるが、煮炊器具として使用されていたとは思われず器面が赤彩されていることが多い。)
⑥甑（底部に孔を一つもつものである。逆円錐状の形態を呈する。）
⑦蓋（和傘状の形態を呈する。つまみ部に孔をもつものともたないものがみられる。）

古墳時代の土器の分類

① 甕

A類（外面整形はハケ中心となるが、ナデ整形やミガキを行う場合もある。内面整形はハケ以外にもナデ・ケズリ・ミガキなどがある。胴部中央付近に最大径のある球形胴のもの。）
B類（外面整形はハケ中心となるが、ナデ整形やミガキを行う場合もある。内面整形はハケ以外にもナデ・ケズリ・ミガキなどがある。胴部中央付近に最大径があり、楕円に近いものとラグビーボールに近い形態のものがある。）
C類（長胴甕・外面整形はハケが主体であるが、ナデ整形やミガキ整形も存在する。胴部上位が張るものや胴部中位が張るものがある。）
D類（長胴甕・胴部が張らない円筒状のもの。整形技法はナデ・ケズリで、その後ミガキなどを施すものがある。）
E類（長胴甕・胴最大径は胴部上位或いは中位にある。外面整形はケズリを用いる。）
Ｅ１→胴部中位の張りが強い。
Ｅ２→胴部中位の張りが弱い。
Ｅ３→胴部上位が張る。
②小型甕（おおむね器高20cm以下のもの。）
A類（甕Eの小型のもの。１、胴部中位の張りが強いもの・２、胴部中位の張りが弱いもの・３、胴部上位が張るものがある。）
B類（甕Dの小型のもの。）
C類（胴部が球形のもの。）
D類（器高が低く頸部の収約しないもの。）
E類（丸底の底部から直立気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。）
F類（胴部下位に最大径がくるもの。口縁部は外反する。）
③壺（主な用途が貯蔵或いは祭祀に用いられたと推測される容器。外面整形はミガキ中心となる。）
A類（胴部中央付近に最大径がある。）
Ａ１ａ→器高28cm以上、口縁部が有段の形態で球形胴を呈する。
Ａ１ｂ→器高28cm以上、口縁部が単純口縁の形態で球形胴を呈する。
Ａ２ａ→器高28cm以上、口縁部が有段の形態でＡ１より細長い胴部をもつもの。
Ａ２ｂ→器高28cm以上、口縁部が単純口縁の形態でＡ１より細長い胴部をもつもの。
Ａ３ａ→中型の球胴壺。口縁部が有段の形態のもの。
Ａ３ｂ→中型の球胴壺。口縁部が単純口縁の形態のもの。
B類（大型で胴部上位に最大径があり、肩が張る。逆卵形を呈する。）
C類（口縁部はやや上方を向き肩が張る。胴下半部は屈曲して稜線をもち、直線的に底部に至る。）

D類（把手をもたない大型の広口壺。肩が発達せず、口縁部から胴部にかけては筒状に下がる。）

E類（円柱状の小型壺。胴部は若干張り、長胴甕と類似した形態。ミガキが丁寧で、肩部から口縁部にかけて明確な屈曲が存在する。口径12cm前後・器高20cm前後を目安とする。）

F類（小型の球胴壺。器高16cm前後で、口縁が短く外反する。口径と胴最大径の差が4cm以上を目安とし鉢と区別する。黒色処理は施さない。）

G類（小型丸底壺。口縁部は直線的に広がり、胴部は球形を呈する。）

H類（口縁部は直線的に外反し、胴部は球形胴であるがやや扁平となる。）

H１→須恵器のはそうを丁寧に模倣したもの。

H２→胴部に穿孔がなく、須恵器のはそうの大まかな器形のみ模倣。

④高坏

A類（坏部は外に開き、外面下部に稜をもつ。内外面にはミガキを施し、脚部外面にはミガキ。内面には輪積み痕・ナデ・ケズリなどがみられる。脚部の形態は中空で若干胴部の張るものや円錐形の長脚をもつ。）

B類（坏部の外面下部に明確な段をもち、円錐形の長脚をもつ。）

C類（坏部は半球状を呈し、口縁端部は内斜傾向で短く強く外反する。坏部の胴部と底部の境には稜をもつ。円錐形の長脚をもつ。）

D類（坏部の口縁端部は外反する。胴部は緩やかに湾曲し稜線をもたない。円錐形の長脚をもつ。）

E類（坏部は直線的に延び、底部との境が明瞭である。坏部口縁端部に明確な面取りを施すものが多い。内外面のミガキが丁寧なものもある。柱状長脚もしくは円錐形の長脚をもつ。）

F類（坏部には半球形で口縁部が内斜もしくは外反する坏と同様のものが用いられる。脚部は円錐形の短脚をもつ。）

G類（坏部は須恵器の模倣形態。坏部の外面下部には明確な稜がみられる。円錐形の短脚をもつものや、柱状の長脚をもつものがある。）

H類（坏部は須恵器の模倣形態。坏部の胴外面下部には明確な稜がみられる。円錐形の長脚をもち、中央に三角透かしがはいる。脚端部に面取りを行うものもみられる。）

I類（接合部が中実で、円錐形の長脚をもつもの。）

Ｉ１→坏部は半球形で口縁部が外反する。内面の底部付近に稜をもつ。

Ｉ２→坏部は半球形で口縁部が上方に延びるか若干内湾する。

Ｉ３→坏部が直線的に延びる。

⑤坏形土器（口径12cm～16cm程度で、器高が口径の1/2以下を目安とする。）

A類（丸底。体部・口縁部は内湾気味となる。）

Ａ１→口径6.8cm～8.4cm・器高3.2cm～4.9cmを目安とする。

Ａ２→口径10.6cm～15.8cm・器高5.6cm～7.6cmを目安とする。

Ａ３→口径10.6cm～15.2cm・器高3.8cm～5.8cmを目安とする。

Ａ４→口径12.4cm～16.2cm・器高3.2cm～3.6cmを目安とする。

B類（丸底。形態的には坏Ａと似るが、口縁端部を外方につまみ出す。）

Ｂ１→口径7.4cm～7.6cm・器高4.8cm～5.9cmを目安とする。

Ｂ２→口径11.0cm～14.8cm・器高5.6cm～6.9cmを目安とする。

Ｂ３→口径11.0cm～13.1cm・器高3.6cm～4.6cmを目安とする。

C類（丸底。坏Ａ・Ｂと似るが、口縁部を外反させる。）

D類（丸底。腰の張る深い形態で、口縁部を短く外反させる。口径12.6cm～16.2cm・器高5.4cm～7.4cmを目安

とする。）

E類（丸底或いは平底気味の底部。内湾する体部と短く外折する口縁部をもつ。口径15.2cm・器高6.6cmを目安とする。）

F類（やや平底気味の底部から直線的に浅く開いた後、口縁部を短く上方につまみ上げる。比較的厚手となる。口径11.4cm～14.2cm・器高4.0cm～5.0cmを目安とする。）

G類（平底。内湾気味に体部・口縁部が立ち上がる。口径7.2cm～14.2cm・器高4.5cm～5.1cmを目安とする。）

H類（平底。体部・口縁部は直線的に外開する。厚手。口径8.2cm～10.6cm・器高3.0cm～6.3cmを目安とする。）

I類（直線的に大きく開く体部をもち、平底気味の底部となる。内面屈折部に稜をもつ。口径11.2cm～19.2cm・器高3.8cm～5.2cmを目安とする。）

I１→内面の稜が明瞭なもの。

I２→内面の稜が不明瞭なもの。

J類（丸底ないし平底気味。口縁部と底部の境界外面に稜をもつ。稜の位置は低く、浅い底部をなす。口縁部は屈曲して内湾気味に外開する。口径10.0cm～16.0cm・器高2.8cm～6.7cmを目安とする。）

J１→長く外開するもの。

J２→屈曲が強いもの。

J３→屈曲が弱く直線的なもの。

K類（丸底で深い形態。器体上位に稜がある。口径8.0cm～16.2cm・器高5.4cm～7.0cmを目安とする。）

L類（丸底で浅い形態。かなり上位に稜がある。口縁部は短く内傾する。口径11.1cm・器高4.1cmを目安とする。）

M類（丸底ないし平底気味。器体中位に稜があり、外反ないし直立気味の口縁形態をなす。口径9.6cm～14.4cm・器高3.7cm～5.3cmを目安とする。）

N類（丸底。大きく開く器体上位に稜があり、口縁部は外反する。口径12.5cm～18.6cmを目安とする。）

O類（平底気味で浅い形態。器体中位ないし下位に鈍い稜があり、口縁部は外反する。口径11.4cm～12.2cm・器高3.8cm～4.0cmを目安とする。）

P類（丸底。器体中位に不明瞭な鈍い稜をもち、口縁部は外反する。口径11.0cm～13.6cm・器高3.9cm～5.0cmを目安とする。）

Q類（平底。体部は直立気味に立ち上がる。厚手。）

⑥鉢形土器（口径が約16cm以上、もしくは器高が口径の1/2以上となることを目安とする。内外面にミガキを施すことを基本とするが、外面整形ではケズリの後にミガキを施すものもある。）

A類（口縁部を若干外反させる。胴部上半は外方に開くか内湾する。）

A１（大型）→口径20cm～29cm・器高11cm～17cmを目安とする。

A２（中型）→口径15cm～19cm・器高8cm～13cmを目安とする。

A３（小型）→口径12cm～15cm・器高10cm前後を目安とする。

B類（口縁部が直立気味に延びる。わずかに外反するものもある。胴部上半は外方に開く。）

B１（大型）→口径20cm～29cm・器高11cm～17cmを目安とする。

B２（中型）→口径15cm～19cm・器高8cm～13cmを目安とする。

B３（小型）→口径12cm～15cm・器高10cm前後を目安とする。

C類（球形胴を呈する。）

C１（口縁部は内湾する。）

C２（口縁端部は直立気味になる。）

D類（須恵器を模倣した大型のもの。）

⑦甑形土器（底部が存在しないか、底部に孔をもつもの。器高9cm～18cm程の範囲を目安とするが規格性はみられない。通常は把手をもたない。底部の形態から３種に細分する。）

A類（底部をもたない）

B類（底部をもち単孔）

C類（底部をもち多孔）

⑧ミニチュア土器

A類（手づくねを基本とし、口縁は直立するもの。）

B類（手づくねを基本とし、口縁は外方に開くもの。）

C類（口縁は外方に開き、坏・鉢に類似する形態のもの。）

D類（口縁は内湾しながら立ち上がるもの。底部は丸底が基本。）

E類（内湾する形態のもの。）

F類（壺に類似する形態のもの。）

G類（はそうに類似する形態のもの。）

H類（口径より器高が長いコップ型のもの。）

I類（手づくねを基本とし、高台が付くもの。）

J類（その他）

奈良・平安時代の土器の分類

［1］土師器

①甕

A類（輪積み成形の後、内外面をナデ調整する長胴甕。）

B類（器面を刷毛目で調整する長胴甕。）

C類（体部外面をヘラ削りして薄く仕上げる。いわゆる武蔵型甕。）

D類（ロクロ調整を行う長胴甕。いわゆる北信型甕を含む。）

F類（球形胴の背の低い甕。器面をヘラ磨きするものが多いが、ナデ調整で仕上げるものもある。）

②小型甕

A類（胎土・調整が甕Aに共通する。器面ナデ調整の小型甕。）

B類（胎土・調整が甕Bに共通する。器面ハケ調整の小型甕。）

C類（胎土・調整が甕Cに共通する。体部外面を削り調整する小型甕。）

D類（ロクロ調整を行う小型甕。）

③羽釜

A類（体部上寄りに鍔状の突帯を付した厚手のもの。内外面をナデ調整する。平底あるいは丸底がある。体部の調整に叩き技法を用いたものもある。）

B類（調整技法は羽釜Aに共通するが、鍔が一連に体部を巡ることなく、３・４箇所で途切れる。）

④鍋

A類（平らな底部で、箱型に立つ体部をもつ。把手をもつものもある。）

B類（平らな底部で、箱型に立つ浅い体部をもつ。把手をもつものもある。）

⑤坏

土師器

A類（ロクロ調整の底部回転糸切り或いはヘラ調整のもの。）

D類（非ロクロ調整の丸底のもの。体部外面から底部にかけて手持ちヘラ削りを、口縁部には横ナデを施す。）
E類（非ロクロ調整の浅い盤状の坏で、技法は坏Dと共通する。）
黒色土器A（内黒）
A類（ロクロ調整の底部回転糸切りのもの。）
B類（非ロクロ調整の丸底のもの。）
黒色土器B（内外黒）
B類（非ロクロ調整の丸底のもの。）
⑥碗
土師器（ロクロ調整の有台の碗。）
黒色土器A（内黒・ロクロ調整の有台の碗。）
黒色土器B（内外黒・ロクロ調整の有台の碗。）
⑦皿
土師器
A類（ロクロ調整で扁平な形態。）
黒色土器A（内黒）
A類（ロクロ調整で扁平な形態。）
B類（ロクロ調整で扁平な形態に高台を付したもの。）
黒色土器B（内外黒）
B類（ロクロ調整で扁平な形態に高台を付したもの。）
⑧鉢
土師器
A類（ロクロ調整で口径２０㎝を超える大型のもの。）
黒色土器A（内黒）
A類（ロクロ調整で口径２０㎝を超える大型のもの。）
⑨柱状台付土器（皿或いは坏を身として、これらに分厚い台の付いたもの。身と台が一体として作られている。）
土師器
A類（底部が柱状に張り出したもので、張り出し具合が垂直ないし僅かに外傾、内傾をみせる形態。底の厚みは、おおよそ器高の５０％前後を占める。）
B類（底部が末広がりの柱状に張り出したもの。底部の厚みは、おおよそ器高の８０％前後を占める。典型的な柱状高台。）
C類（底部が垂直ないし僅かに外傾・内傾する柱状に張り出したものにさらに脚が付けられたもの。脚部を除く底の厚みは、おおよそ器高の５０％前後を占める。）
⑩盤
土師器
A類（ロクロ調整で口径３０㎝～３５㎝の大型のもの。高い脚台をもつ。）
B類（足高高台をもつ身の浅い碗型のもの。）
⑪平頂蓋
土師器（つまみの無いもの。）
黒色土器A（内黒・つまみの無いもの。）
赤彩土器（つまみの無いもの。）
⑫高坏

黒色土器A

［2］須恵器

①坏

A類（直線的に開く体部をもつ無高台のもの。）

B類（箱形の体部に高台を付したもの。）

C類（B類の高台がはずれた形態のもの。）

②碗

A類（無高台で体部を内湾させるもの。）

③皿

A類（無高台で扁平なもの。）

④蓋

B類（口縁端部を折り曲げる。天井部に扁平なつまみを付ける。）

⑤甕

A類（卵形の体部に外反する口頸部を付すもの。）

B類（卵形の体部に直立する短い口頸部を付すもの。）

C類（卵形の体部に強く外反する短い口頸部を付すもの。）

D類（平底の甕で肩部に凸帯を回し耳状の突起を付すもの。）

E類（肩の張った広口のもの。）

⑥鉢

A類（小さめの底部から体部は直線的に開く、頸部で緩く締まって口縁部で外反する。）

⑦短頸壺

A類（肩が強く張り、高台が付くもの。）

D類（体部がやや長く、頸部を直立させるが口縁部で強く外反し口縁帯をつくる。）

⑧長頸壺

A類（体部から細い頸部が直立気味にのびるもので、体部が球状を呈するもの。）

B類（体部は肩の部分で屈曲するもの。頸部の接合部にリング状の凸帯を貼付する。）

⑨その他

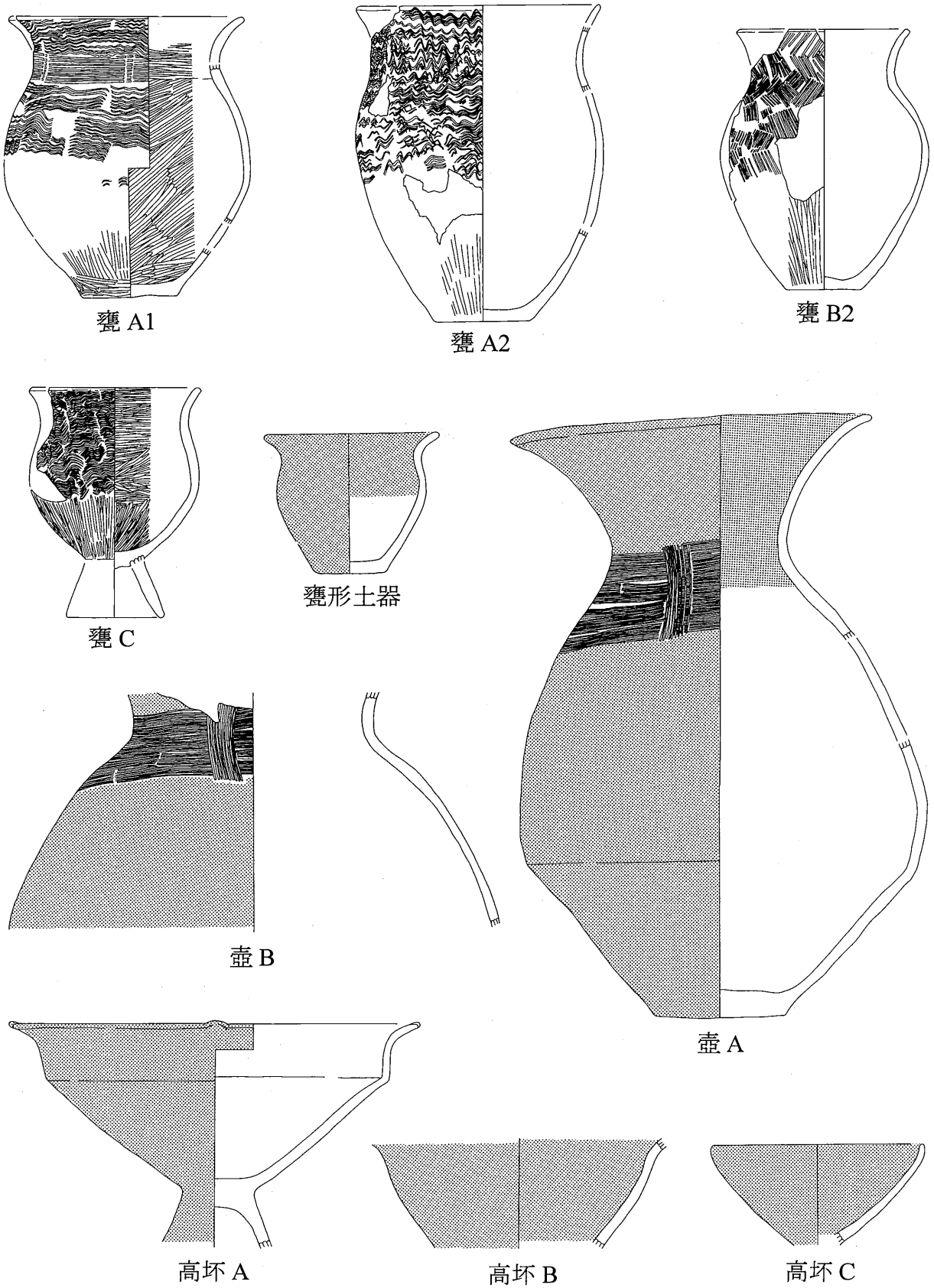
横瓶・はそう・碗蓋・高坏

［3］灰釉陶器

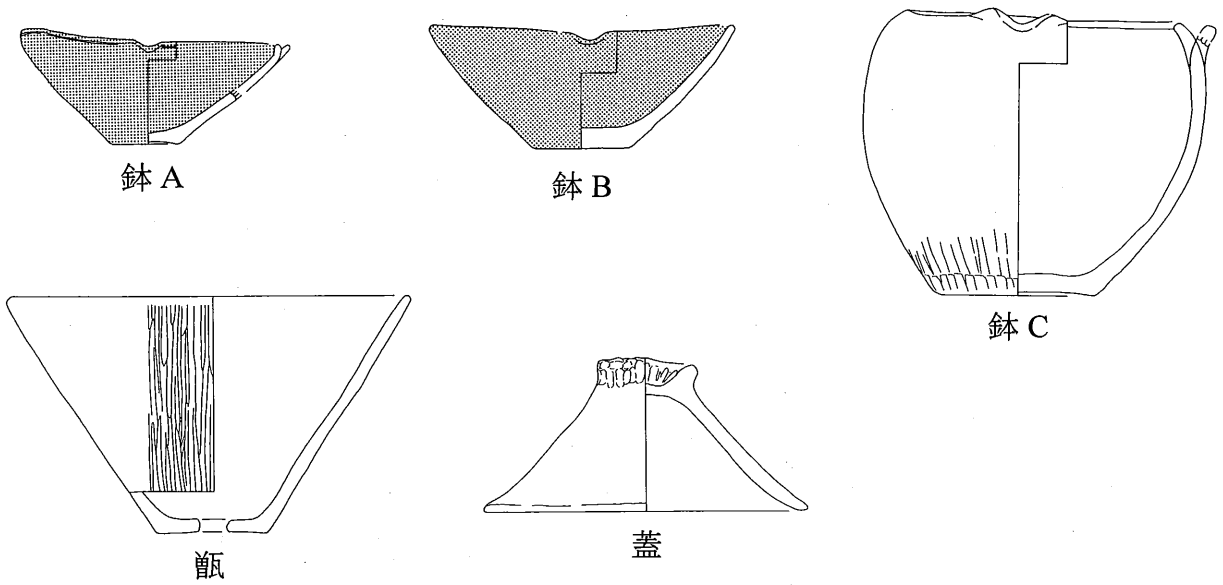
碗・皿・段皿・小瓶・長頸壺・広口瓶

［4］緑釉陶器

碗・皿・段皿

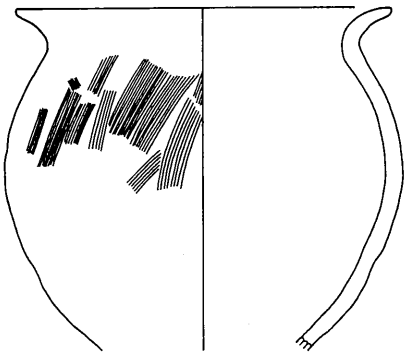


第17図　弥生時代後期の土器分類①

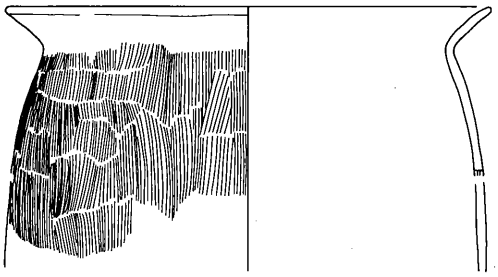


第18図　弥生時代後期の土器分類②

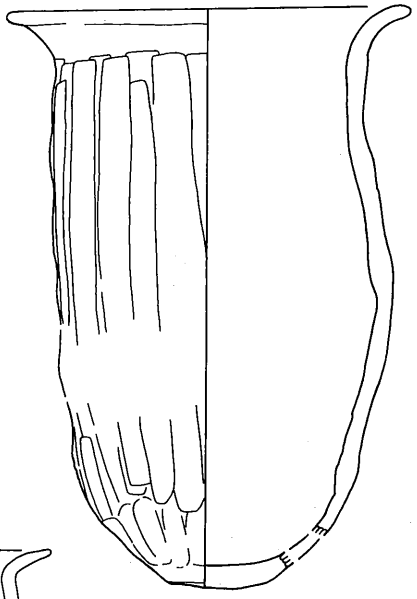
［土師器］



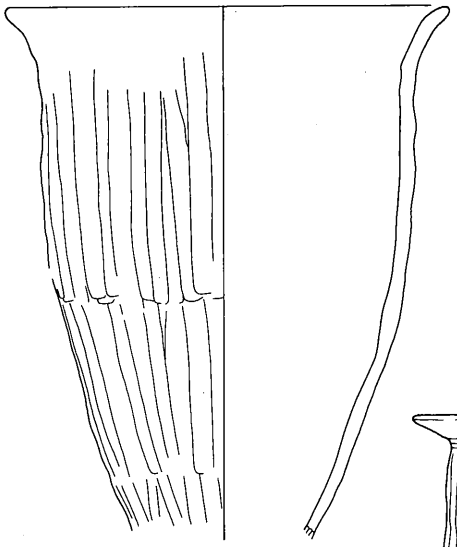
甕 A



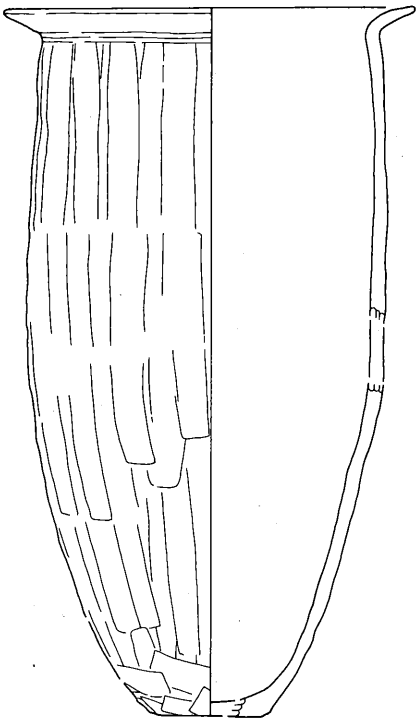
甕 C



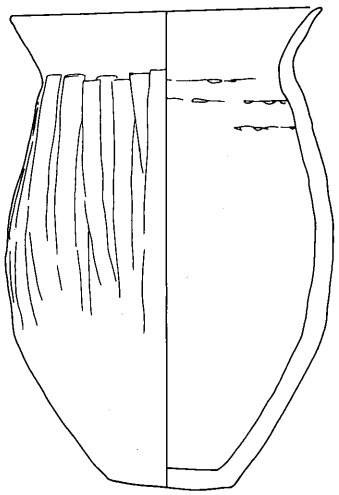
甕 D



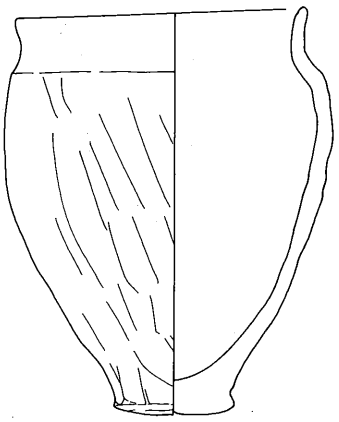
甕 D



甕 E2

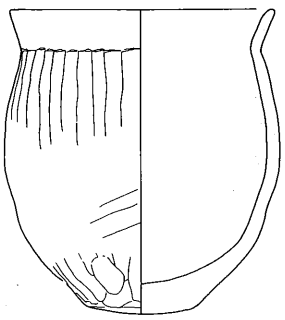


甕 E1

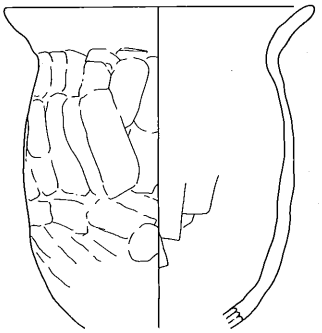


甕 E3

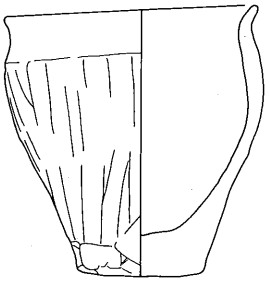
第19図　古墳時代後期の土器分類①



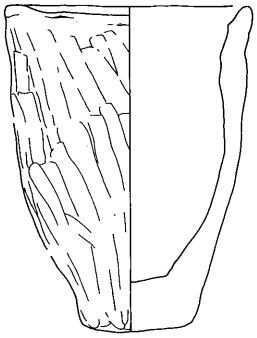
小型甕 A1



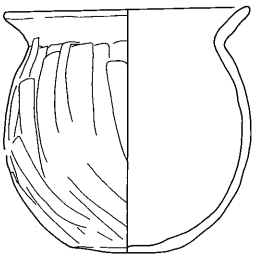
小型甕 A2



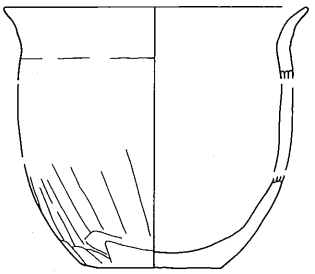
小型甕 A3



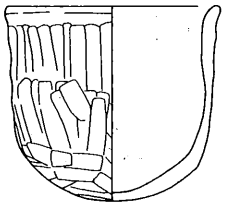
小型甕 B



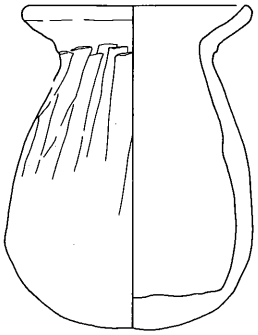
小型甕 C



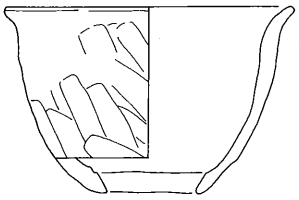
小型甕 D



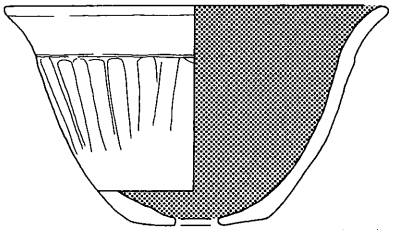
小型甕 E



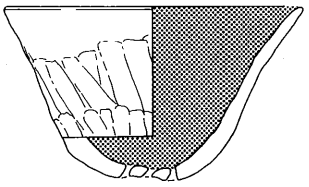
小型甕 F



甑 A

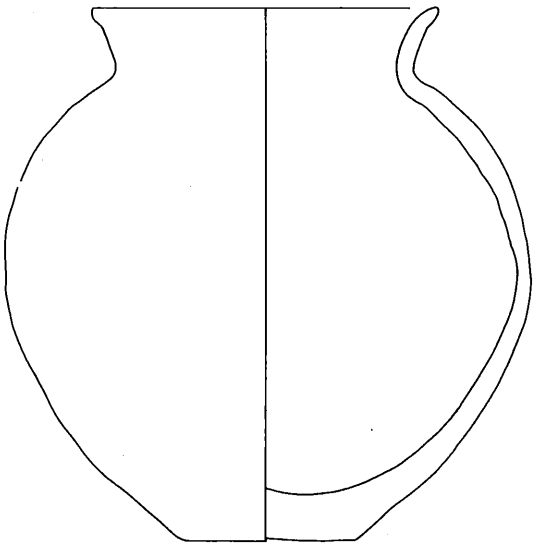


甑 B

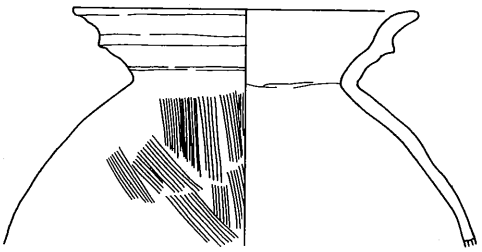


甑 C

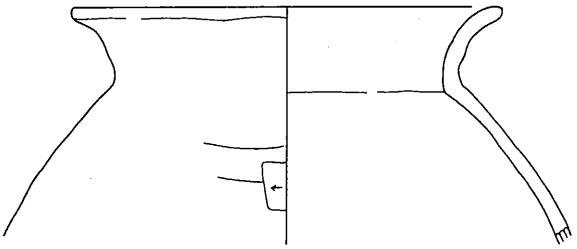
第20図　古墳時代後期の土器分類②



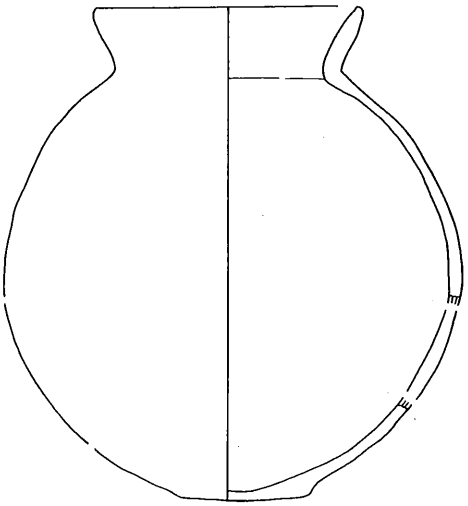
壺 A1b



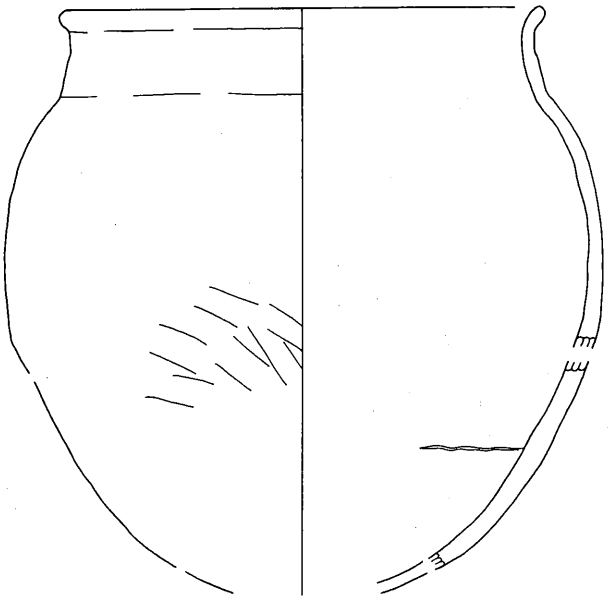
壺 A2a



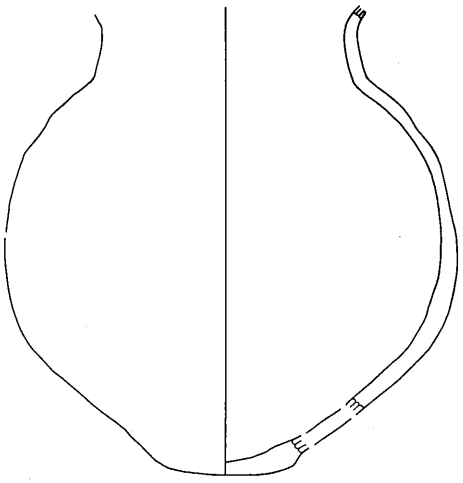
壺 A2b



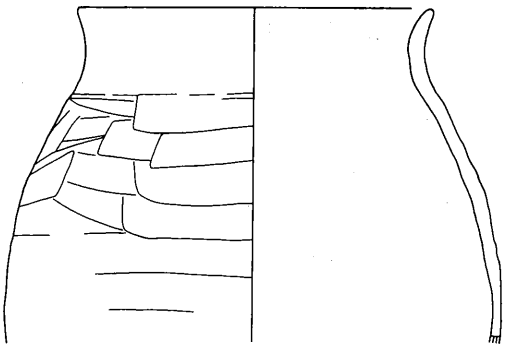
壺 A3b



壺 B

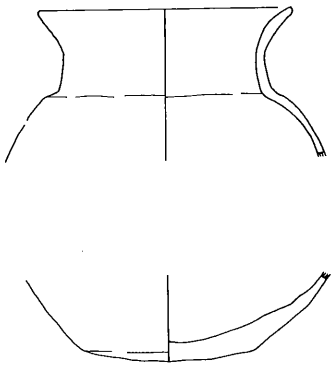


壺 C

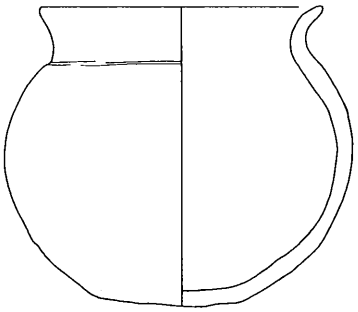


壺 D

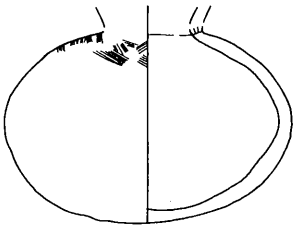
第21図　古墳時代後期の土器分類③



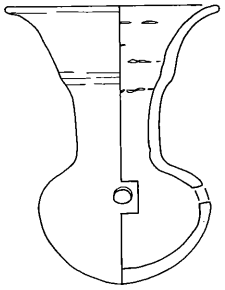
壺 E



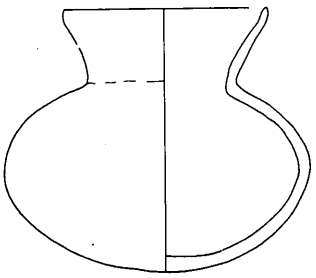
壺 F



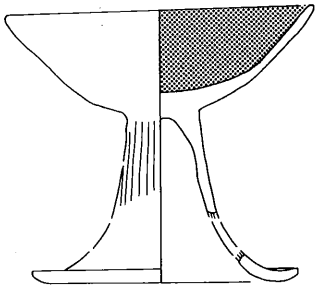
壺 G



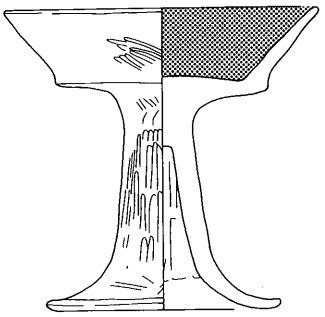
壺 H1



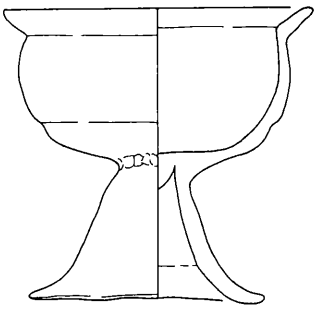
壺 H2



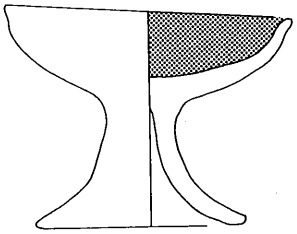
高坏 A



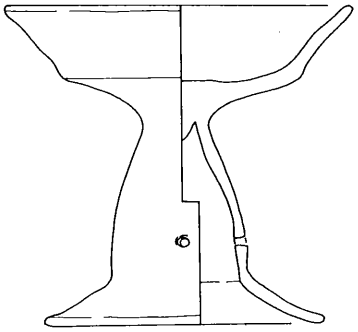
高坏 B



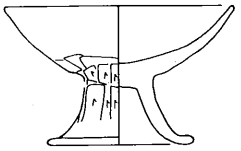
高坏 C



高坏 D

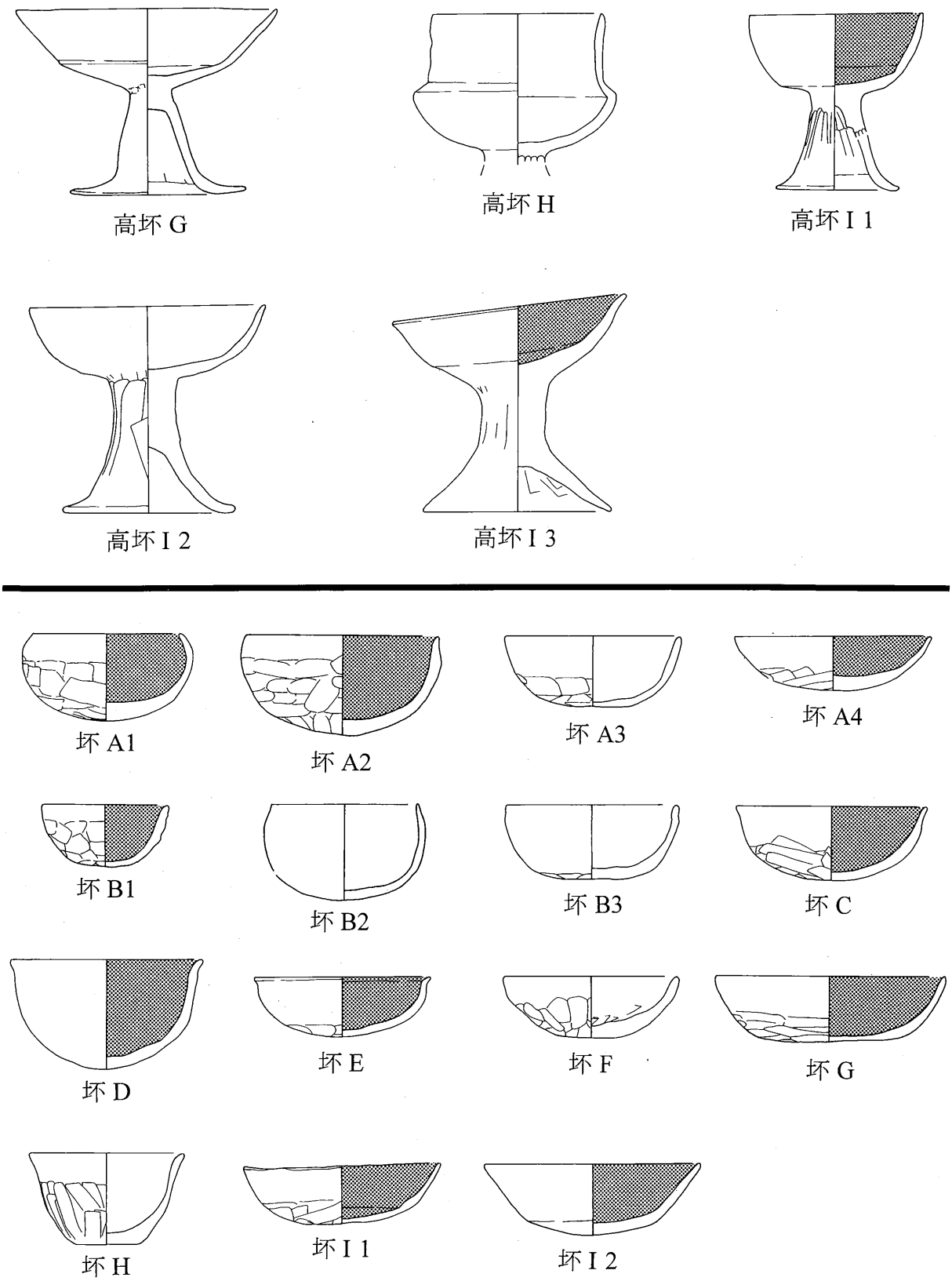


高坏 E

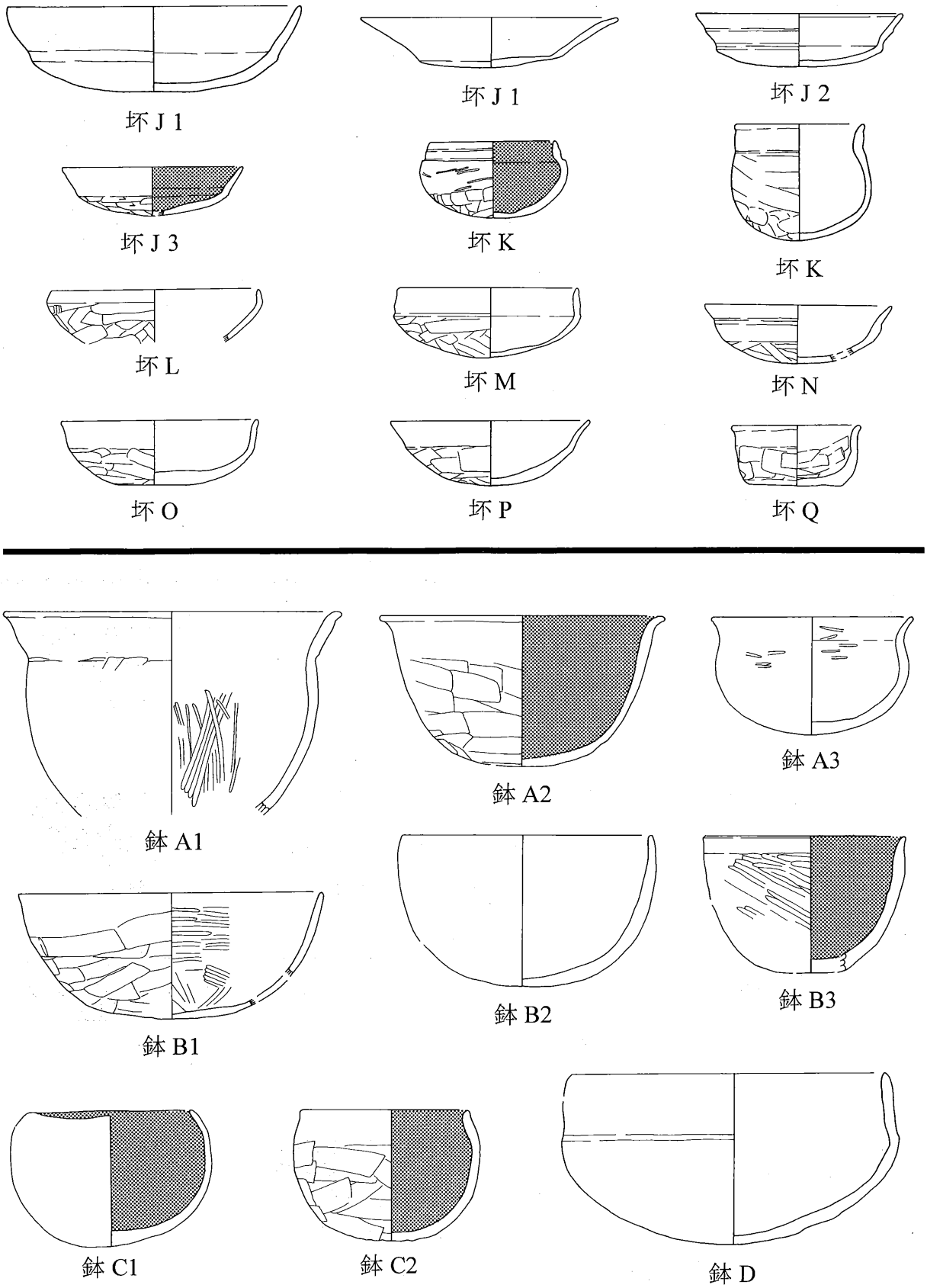


高坏 F

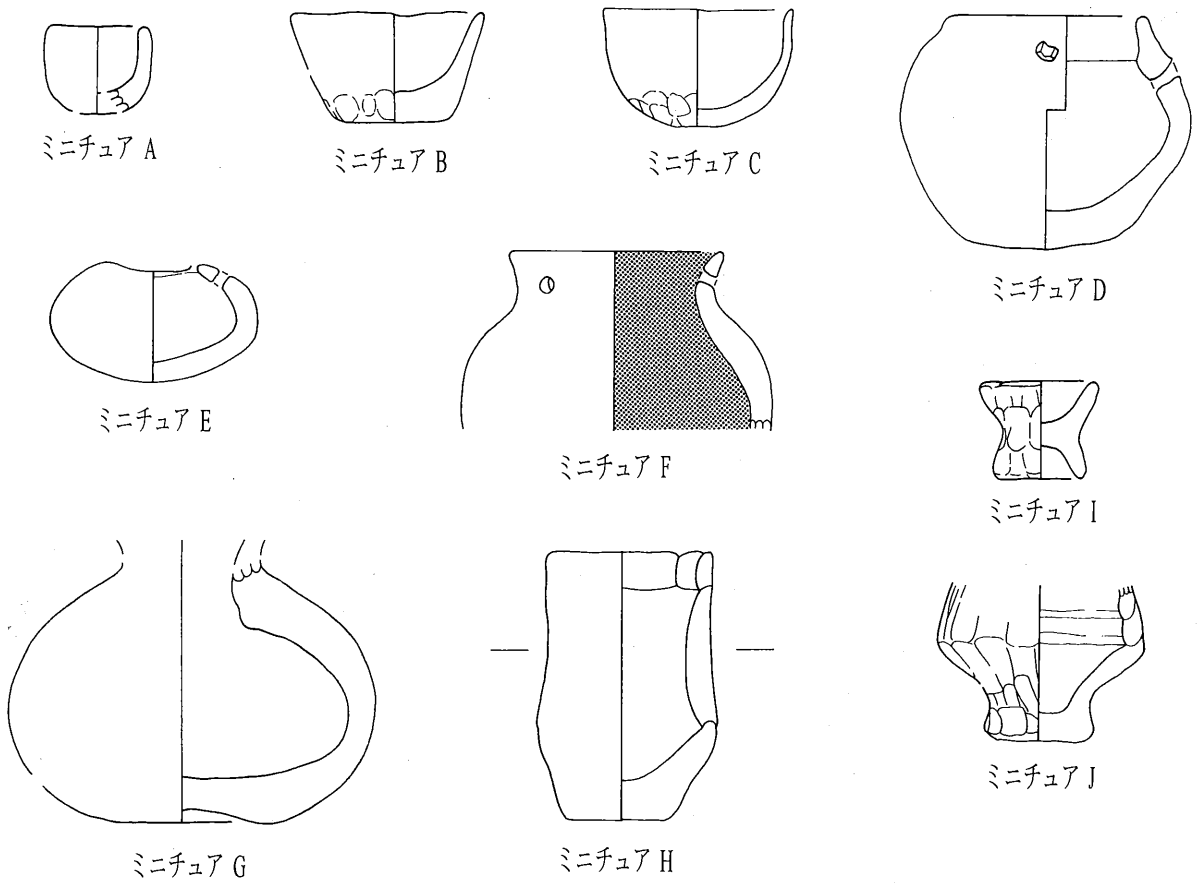
第22図　古墳時代後期の土器分類④



第23図　古墳時代後期の土器分類⑤

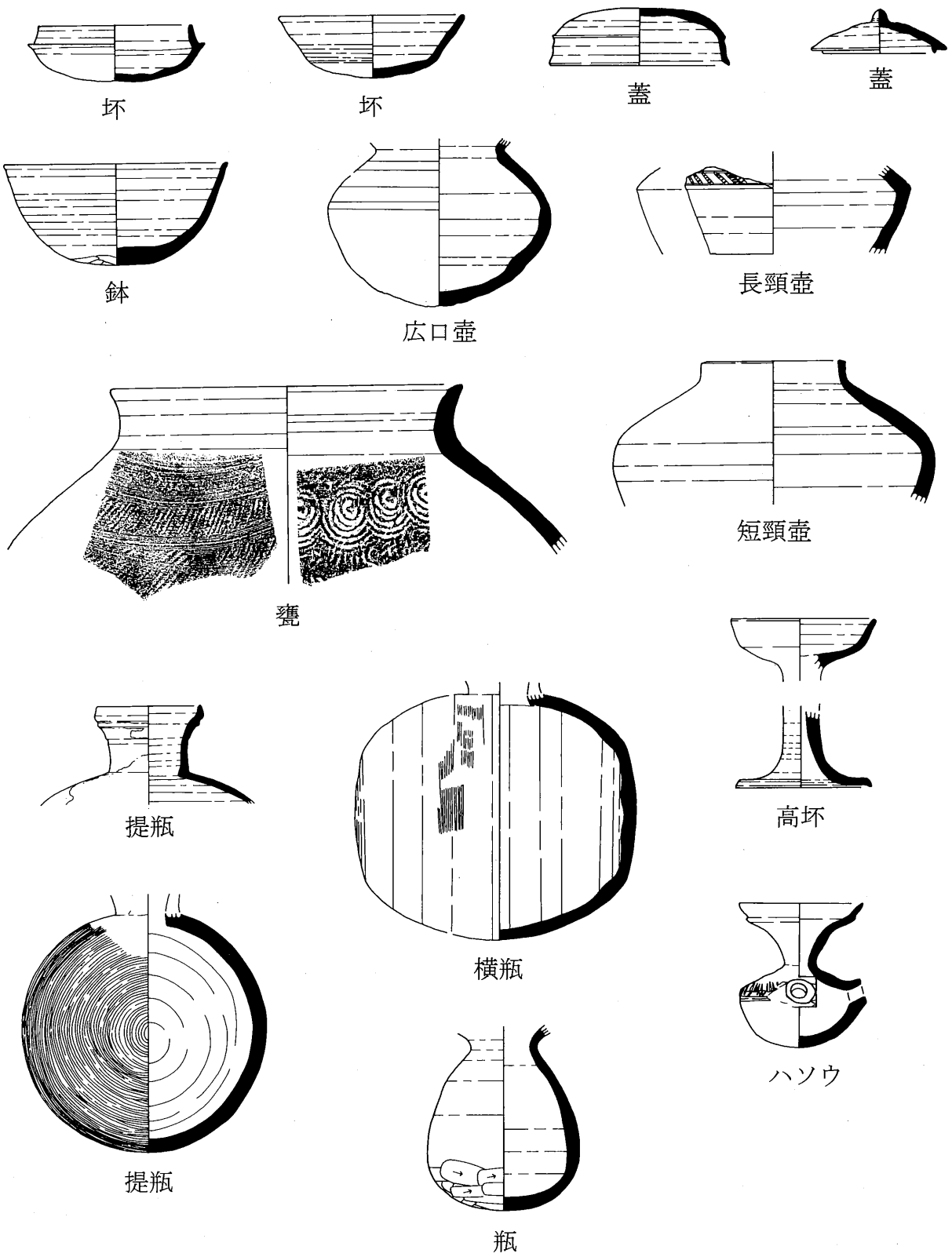


第24図　古墳時代後期の土器分類⑥



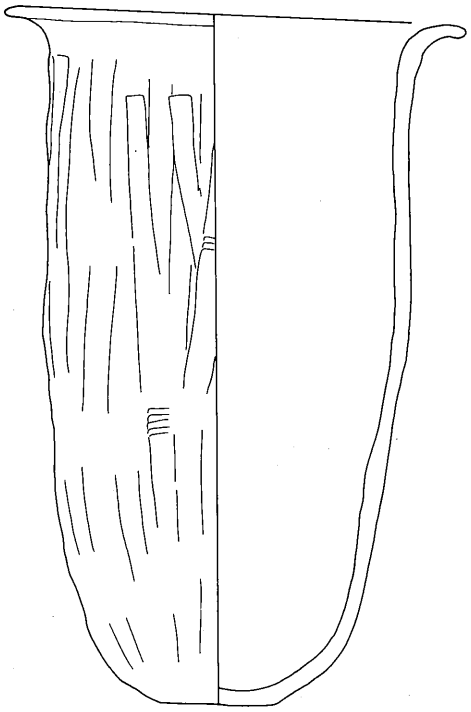
第25図　古墳時代後期の土器分類⑦

［須恵器］

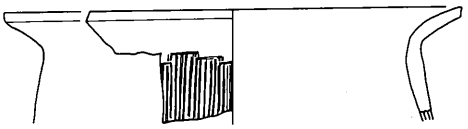


第26図　古墳時代後期の土器分類⑧

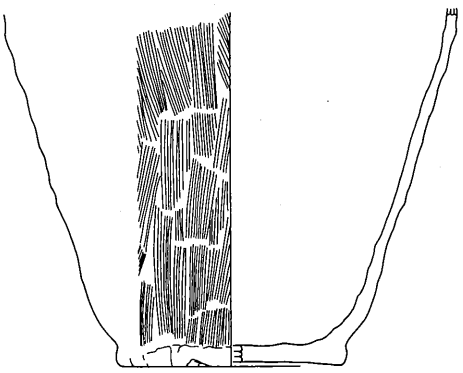
［土師器］



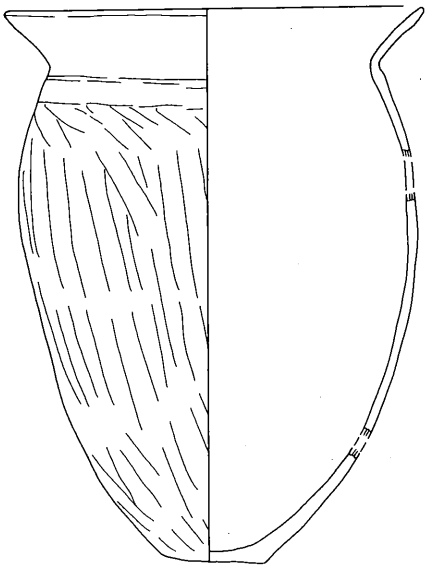
甕 A



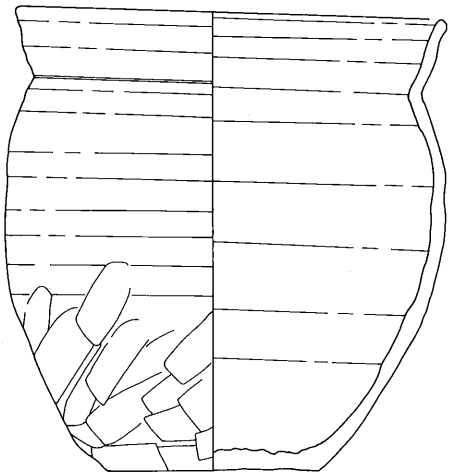
甕 B



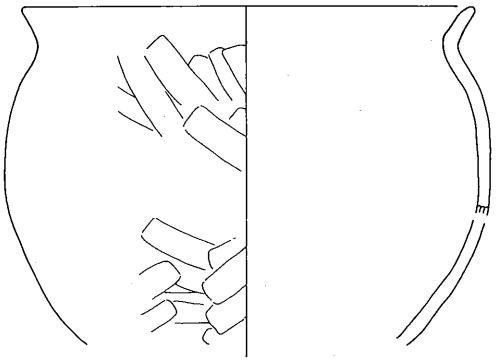
甕 B



甕 C



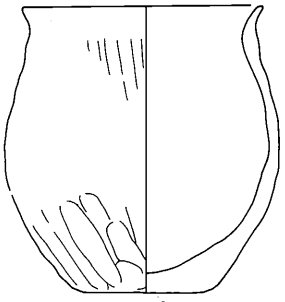
甕 D



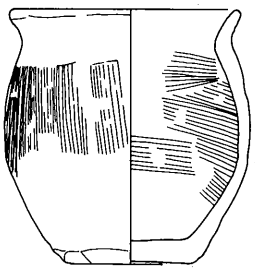
甕 F

第27図　奈良・平安時代の土器分類①

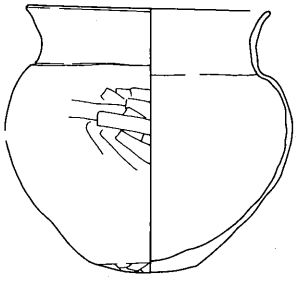
［土師器］



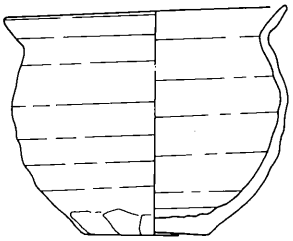
小型甕 A



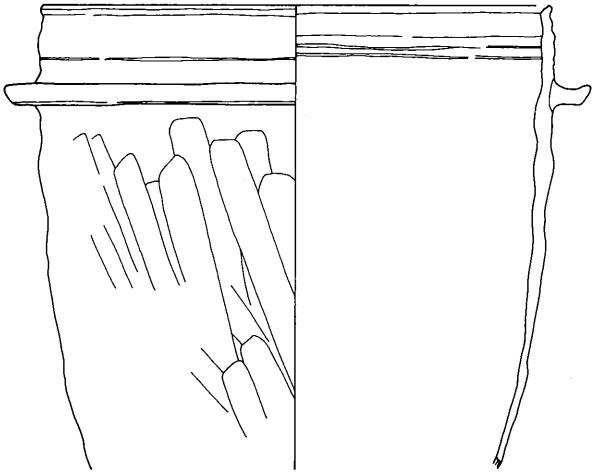
小型甕 B



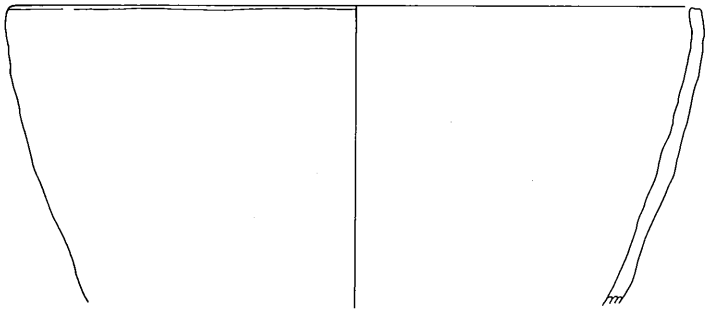
小型甕 C



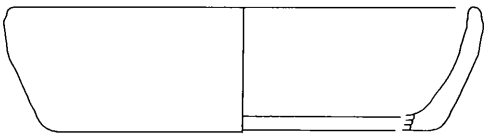
小型甕 D



羽釜 A

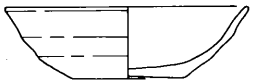


鍋 A

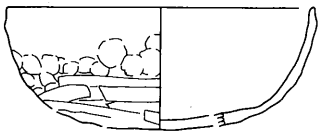


鍋 B

［土師器］



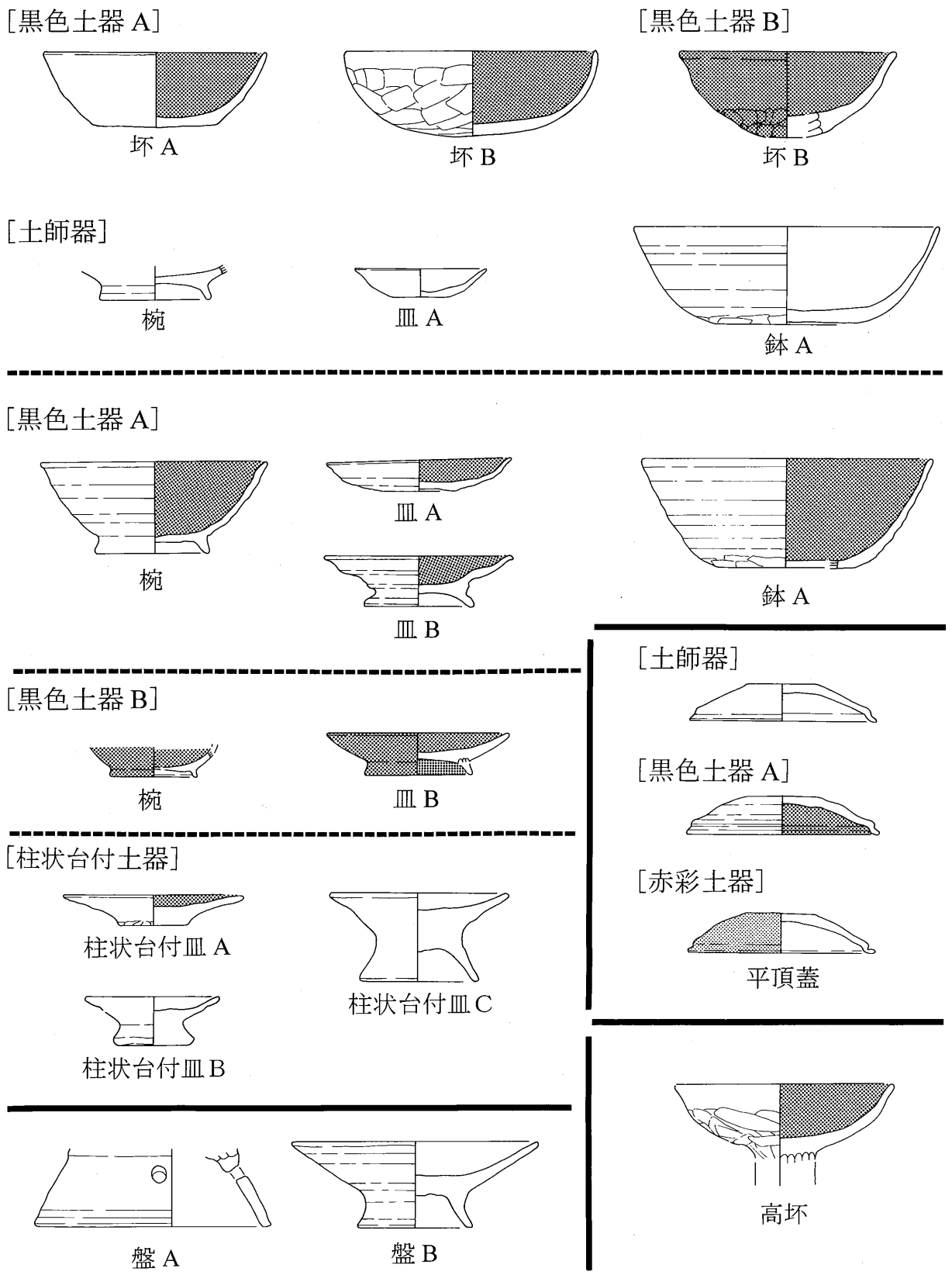
坏 A



坏 D

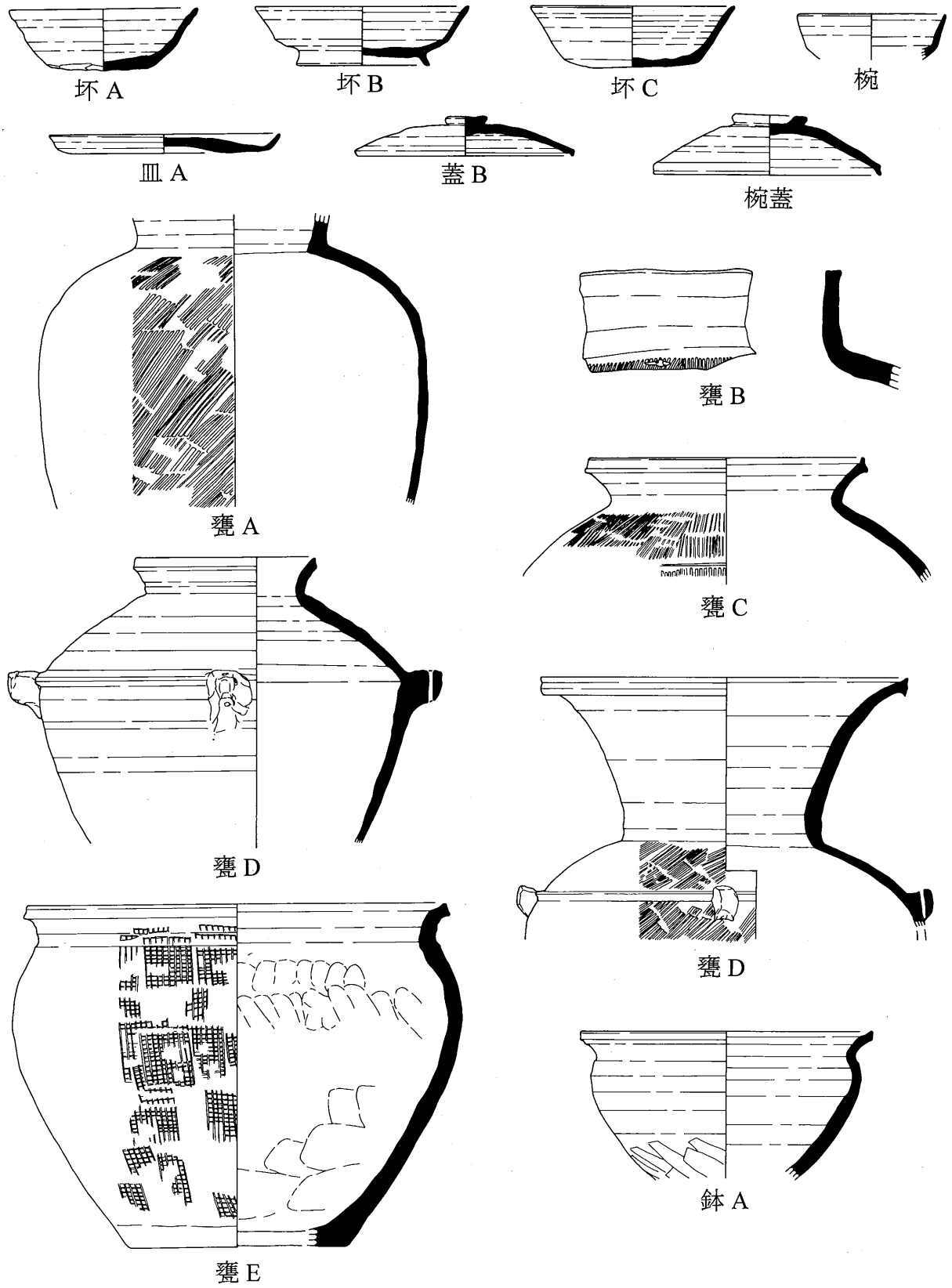
坏 E

第28図　奈良・平安時代の土器分類②



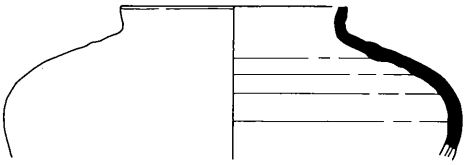
第29図　奈良・平安時代の土器分類③

[須恵器]

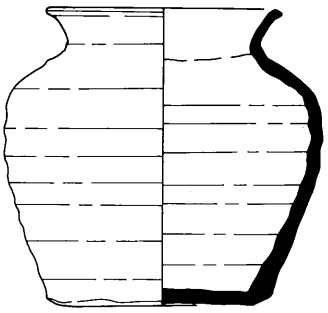


第30図　奈良・平安時代の土器分類④

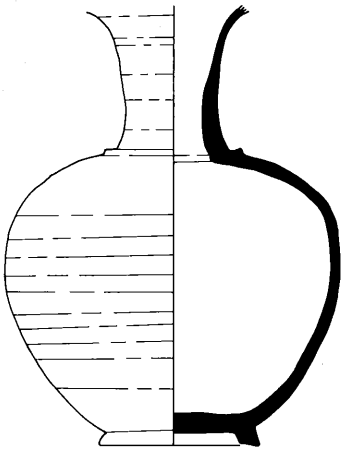
［須恵器］



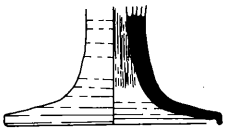
短頸壺 A



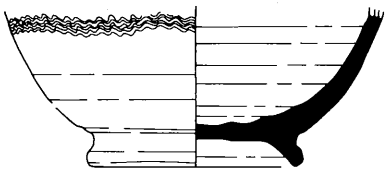
短頸壺 D



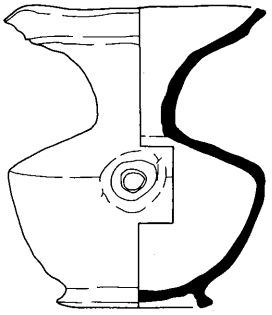
長頸壺



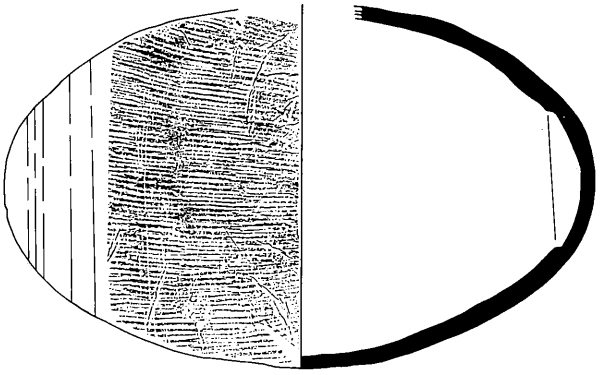
高坏



長頸壺



ハソウ



横瓶

第31図　奈良・平安時代の土器分類⑤

（2）石臼・五輪塔

石 臼

当該遺跡では粉ひき臼のみが確認されている。石臼は上部と下部に分かれており、観察表における計測部位については第３３図の凡例図に従って計測を行った。

五輪塔

当該遺跡の五輪塔は空風輪・火輪・水輪・地輪の４つの部位に分かれている。観察表に表示されている計測部位については第３２図の凡例に従って計測を行った。各部位の形態分類については、『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書２１』「観音平経塚」1999（財）長野県埋蔵文化財センターの基準に依った。また、各部位の形態別の出土点数を表３で表示した。

①空風輪（３つの視点から分類する）

・空輪幅と風輪幅の比率

Ⅰ：風輪幅が空輪幅より大きい（風：空＝1：0.9以下）

Ⅱ：風輪幅と空輪幅がほぼ同じ（風：空＝1：0.9～1.1未満）

Ⅲ：空輪幅が風輪幅よりやや大きい（風：空＝1：1.1～1.2未満）

Ⅳ：空輪幅が風輪幅より大きい（風：空＝1：1.2～1.4未満）

Ⅴ：空輪幅が風輪幅よりかなり大きい（風：空＝1：1.4以上）

・空輪高と風輪高の比率

Ａ：風輪と空輪の高さとの差はさほど目立たない（風：空＝1：1.6程度以下）

Ｂ：空輪は高く風輪との差は明確である（風：空＝1：1.6～2.0未満）

Ｃ：空輪はさらに高く風輪との差もひろがる（風：空＝1：2.0～2.7未満）

Ｄ：空輪が極端に高く風輪はごく低い（風：空＝1：2.7以上）

・空輪の最大幅位置

ａ：空輪の最大幅は下位にある。

ｂ：空輪の最大幅は中位にある。

ｃ：空輪の最大幅は上位にある。

ｄ：空輪の最大幅はかなり上位で、稜をもつ。

②火輪（３つの視点から分類する）

・軒口上縁ラインの形状

Ⅰ：反りがなく水平。

Ⅱ：ほぼ全体が緩やかに反る。

Ⅲ：ⅡとⅣの中間。

Ⅳ：ほぼ全体が強い反りをもつ。

Ⅴ：中央水平で両端が少し反る。

Ⅵ：ⅤとⅦの中間。

Ⅶ：両端の反り上りが大きく中央水平部は短い。

Ⅷ：中央は緩やかな円弧で両端がさらに反る。

・軒口下縁ラインの形状および底面の形状

Ａ１：軒口下縁は反りがなく水平で底面から軒面への転換はシャープ。

Ａ２：軒口下縁は反りがなくほぼ水平だが、底面から軒面への転換部は丸みを帯びる。

Ｂ１：底面四隅を小さく三角形状に面取りするため、軒面下縁両端に若干の反りが生じる。中間部は水平。

Ｂ２：底面四隅の面取りがＢ１より大きく、軒口下縁両端の反りもより大きい。中間部は水平。
Ｂ３：底面周縁に細い帯状の面取りを加える。そのため軒口下縁両端が若干反るが中間部は水平。
Ｂ４：底面四隅の面取りないし反り上がりが大きく長く、軒口下縁中央に若干の水平部を残すのみ。
Ｃ１：水輪と接する部分を除いて底面全体が曲面を成し、軒口下縁は緩い円弧を描く。
Ｃ２：Ｃ１より程度が強いもの。従って、軒口下縁の円弧はより急となる。

・軒中央部の外傾度（開き具合）

ａ：軒の立ち上がりはほぼ９０°となる。
ｂ：軒の立ち上がりは１００°前後まで。軒は外にやや傾く。
ｃ：軒の立ち上がりは１１０°前後まで。軒の外傾がｂより大きい。
ｄ：軒の立ち上がりは１１０°以上。軒の外傾はさらに大きい。

③水輪（４つの視点から分類する）

・側面形状

Ⅰ：球形を呈する。
Ⅱ：やや角張る。
Ⅲ：算盤玉状だが稜は不明瞭。
Ⅳ：明瞭な稜をもつ算盤玉状。

・側面突出度

Ａ：突出度が大きい（上面径：最大幅＝1：1.7 以上）
Ｂ：突出度は中程度（上面径：最大幅＝1：1.7 未満～1.5 以上）
Ｃ：突出度が小さい（上面径：最大幅＝1：1.49 未満）

・扁平度

ａ：扁平度は極小、高さがかなり高い（全高：最大幅＝1：1 以下）
ｂ：扁平度は小（全高：最大幅＝1：1 以上～1.34 以下）
ｃ：扁平度は中程度（全高：最大幅＝1：1.35 以上～1.59 以下）
ｄ：扁平度は大、高さが低く扁平な形となる（全高：最大幅＝1：1.60 以上）

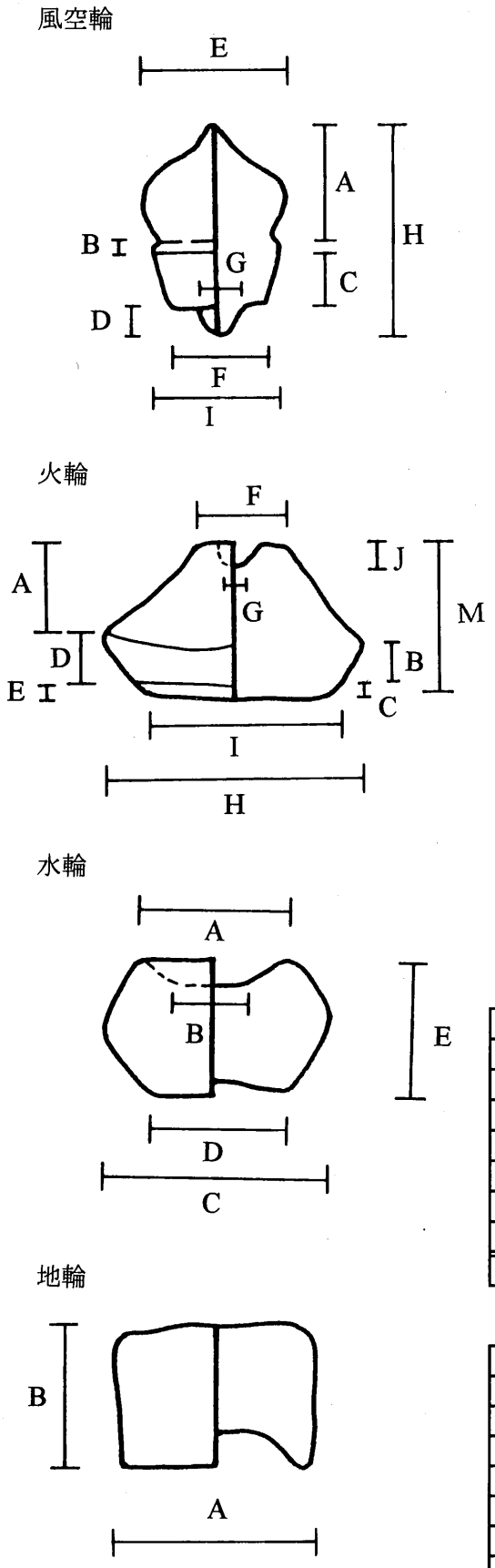
・最大幅位置

１：最大幅位置は中位より上にある（全高：上端～最大幅位置＝1：0.46 以下）
２：最大幅位置は中位にある（全高：上端～最大幅位置＝1：0.47 以上～0.53 以下）
３：最大幅位置は中位より下にある（全高：上端～最大幅位置＝1：0.54 以上）

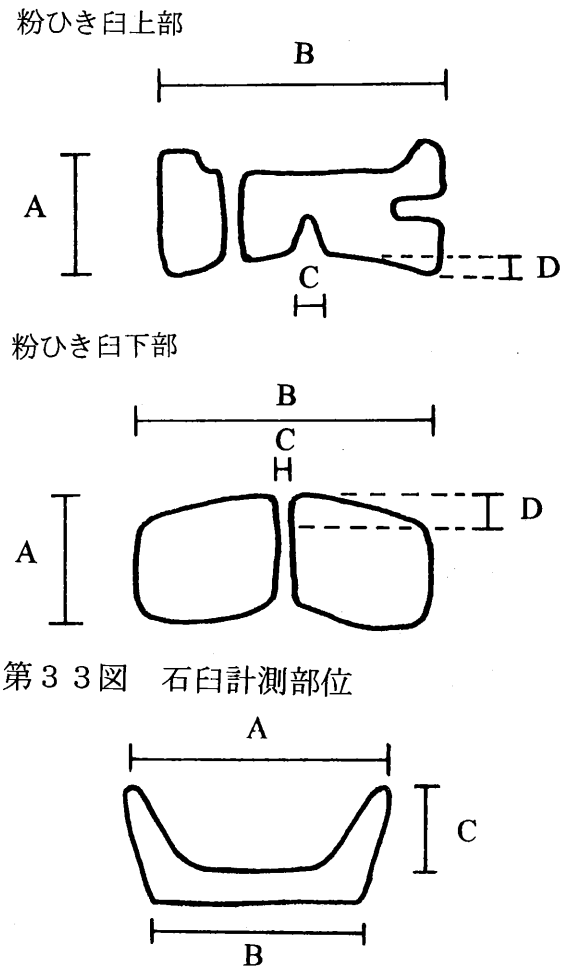
④地輪

・高さと幅の比率

Ⅰ：幅と高さがほぼ等しい（高：幅＝1：1 以上）
Ⅱ：高：幅＝１：１以上～１．３４以下
Ⅲ：高：幅＝１：１．３５以上～１．５９以下
Ⅳ：幅に対して高さがかなり低い（高：幅＝1：1.60 以上）



第３２図　五輪塔計測部位



第３３図　石臼計測部位

第３４図　搗き臼計測部位

風空輪

ⅠB	1	1
ⅡA	2	8
ⅡB	3	
ⅡC	3	
ⅢA	1	7
ⅢB	2	
ⅣA	2	
ⅣB	2	
合計	16	16

空輪

a	8
b	5
c	2
d	1
合計	16

水輪

Ⅰ	4
Ⅱ	7
Ⅲ	8
Ⅳ	5
合計	24

火輪

Ⅰ	2
Ⅱ	17
Ⅲ	5
Ⅳ	2
Ⅴ	12
Ⅵ	0
Ⅶ	1
Ⅷ	3
合計	42

地輪

Ⅰ	0
Ⅱ	3
Ⅲ	15
Ⅳ	3
合計	21

表４　五輪塔部位別形態別出土点数

２　遺物の概要

（１）土器類

縄文時代

縄文土器は、縄文時代中期後半から後期の深鉢の破片などが出土している。これらの土器片は隣接する八千原遺跡のものが流れ込んでいると思われ、遺構を伴わないものが多い。ただし、縄文時代中期後半の深鉢（第４分冊第１図１）は土坑（ＳＫ２８０）から倒立した状態で出土したとされている。これは底部を欠いているだけで残存状態は良好であり、その出土状態から埋甕の可能性が高い。この埋甕の存在は八千原遺跡の縄文集落の縁辺部を示すことになると推定される。

弥生時代後期から古墳時代初頭

当該期の土器には、櫛描波状文や赤色塗彩が施された箱清水式系の土器・いわゆる外来系土器・初期土師器がみられる。遺構に伴うものは箱清水式系の土器を中心に出土している。

箱清水式系の土器には、甕・壺・台付甕・甕形土器・高坏・鉢・甑・蓋がみられる。甕はＡ器面に櫛描波状文を施すものとＢ器面に櫛描斜走文を羽状に施すものがみられる。また、ａ口縁部を折り返すものとｂ折り返さないものがみられる。さらに、当該遺跡の甕は頸部に櫛描簾状文を施さないものが５２％（実測した甕での割合）を占めることとなり、上小地方の他の遺跡に比べて多い。また、上小地方では櫛描斜走文を羽状に施した甕と折り返し口縁をもつ甕を出土する遺跡の分布は、千曲川右岸に偏っている。当該遺跡出土の甕もこの分布状態を補強する資料になると思われる。一方、甕の器形をみると、球胴化の進んだものとそうでないものがみられる。壺は単純口縁のもの以外に、口縁部を受け口状とし櫛描波状文を施したもの（第４分冊第２図１４）・縄文が施されたもの（第４分冊第１２図１４）がみられる。壺・高坏・鉢は赤色塗彩されたものが多い。これらは、上小地方の地域編年（尾見智志「上小地方の弥生土器編年」『９９シンポジウム「長野県の弥生土器編年」』1999 長野県考古学会弥生部会）の４期から５期に該当するものと思われる。

当該遺跡では、少数ではあるが外来系土器もみられる。吉ケ谷式土器（第４分冊第９６図１３７）は埼玉県中部に分布する後期中葉以降の土器である。群馬県西部・北部では赤井戸式土器とも称され、弥生時代後期から古墳時代初頭の間で客体的に存在している。このような土器が出土したことは、群馬県側と接するという上小地方の地理的条件により群馬県地域との交流の中で流入した可能性を示している。Ｓ字甕は山陰系口縁をもつもの（第４分冊第１１６図１７９）が出土している。このＳ字甕（Ｅ類）は山陰系甕の口縁と類似した有段口縁を有するが、胴部以下の基本的なつくりは他のＳ字甕と共通する。この甕は大型品に限定され、Ｓ字甕Ｃ類からＤ類にかけての時期に存続するとみられている。また、遠隔地での出土は少なく、山梨県地域と高崎市周辺の群馬県地域に一定数の出土例がみられる程度である。当該遺跡出土のものは、口縁部は内面に肥厚する。また、下段の屈曲は弱く、外面の稜も鋭くない。肩部にはヨコハケがなく、胴部は長胴化を呈する。これらのことから、群馬県地域との関係が示唆されるが、群馬県地域のＳ字甕に特徴的な製作手法（胴部外面にヘラケズリによる一次調整を施すなど）が不明瞭で、その関係ははっきりしない。

古墳時代中期から後期

当該遺跡の古墳時代の土器をみると、弥生時代後期から続く前期前半のものが少数みられるが、明確な遺構は確認できていない。グリットＥ５地区などに覆土中の遺物として確認できるぐらいである。少し間をおいて古墳時代中期後半の土器がみられるようになり、後期へと続いている。これらの土器は、竪穴住居跡を中心として出土している。大まかな変遷をみると、甕は長胴化が進み、ハケ調整のものからヘラケズリのものとなっていく。壺は球胴化し、有段口縁のものから単純口縁のものへと変化する。坏は丸底の口縁部を短く外反させた形態のものから、平底や丸底の内面屈曲部に稜をもつものや須恵器の坏・坏蓋の模倣をしたものなど様々な形態のものが

出現する。その後、丸底の単純な形態のものへと斉一化される傾向がみられる。高坏も、屈折脚をもつものや坏部の外部下部に明瞭な稜をもつものから、坏の変化に合わせるような形態の坏部をのせるが、丸底の単純な形態のものとなっていく。また、須恵器が共伴するようになる。これらのことを含めて、５世紀中頃から８世紀初頭までを９時期に分けたが、詳細な変遷については第五節附論１に譲ることとする。

奈良・平安時代

古墳時代から継続する当該期の土器は、平安時代末期のものまでが確認されている。土器類は竪穴住居跡出土のものが多いが、井戸跡や土坑・溝状遺構などからも出土している。土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が確認されている。土器類の変遷は、拙稿「上小地方の奈良・平安時代の土器について（１）」（上田市教育委員会『上沖遺跡』1998 所収）と「上小地方の奈良・平安時代の土器について（２）」（上田市教育委員会『駕籠田遺跡』1999 所収）を参考にしてみると、１２の時期に区分される。当該遺跡における詳細な変遷については第五節附論１に譲ることとし、ここでは幾つかの注目すべき土器類について述べておくこととする。

［柱状高台付土器］

柱状高台付土器は、皿あるいは坏を身として、これらに分厚い台の付いたものとされている。上小地方では、ほとんどみられなかったが、当該遺跡では少しまとまった数の出土がある。ＳＢ３６２（第４分冊第７４図１１・１２）・ＳＢ３７２（第４分冊第７５図２）・ＳＫ２９６（第４分冊第９７図１５３）・ＳＫ３４２（第４分冊第９７図１６７・１６８）・ＳＫ３８７（第４分冊第９８図１８１）・ＳＤ０３（第４分冊第１０１図４４・４５・４６）・グリッド（第４分冊第１１３図１０７・１０８、第１１４図１４１・１４５・１４６）などから出土している。ＳＢ３６２・ＳＫ３４２の共伴する土器から１１世紀第２四半期から第３四半期のものと考えられる。また、ＳＤ０３においても同様のことが予想される。

柱状高台付土器は、１９７７年に岡田正彦氏が「平安時代土師器等の編年試論」（信濃史学会『信濃２９－９』１９７７所収）のなかで編年的位置付けを行ったことが嚆矢となろうか。さらに、１９８１年には橋原遺跡の報告書（岡田正彦「平安時代以降の遺物」『橋原』1981 岡谷市教育委員会）の中で小形高台坏形土器（高台はいわゆる貼高台やケズリ高台でなく、底部器肉を１㎝～２㎝厚くし、高台を簡略化したもの）と表現している。その後、１９８３年に鵜飼幸雄氏は「高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相」（『高部遺跡』1983 茅野市教育委員会）で小形高台坏形土器を疑似高台皿とよび、底部を意識的に厚く切り離す手法をもつことを特徴にあげている。さらに、疑似高台皿の形式的変遷について考察している。１９８６年には古代末期～中世にかけての土器のシンポジウムが開かれ、坂本美夫氏により広域的かつ総括的な論考（「柱状高台の皿・坏について」『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第２１号 1986 神奈川考古同人会）が発表されている。この中で、柱状高台の土器は皿あるいは坏を身とし、これらに分厚い台のついたものと定義し、身と台が一体として作られているとした。坂本氏は、これらを柱状高台Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類に分類し、柱状高台Ⅱ類は山梨県を中心としており、長野県・静岡県では僅かに存在が知られているとしている。また、同シンポジウムで川上元氏は「信濃における古代末期の土器様相」（『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第２１号 1986 神奈川考古同人会）の中で岡田正彦氏の編年を紹介し、柱状高台付土器を①１１世紀前半に器壁の分厚い小皿で、皿の底部を意識的に厚く切る土器が出現する。②１１世紀後半には、この手法がさらに肥大化し疑似高台状の底部を作り出すと大まかに変遷をまとめている。最近は、目立った論考はないようであるが、１９９７年に服部敬史氏は柱状高台付土器の分布状況をまとめている。服部氏は、柱状高台の坏・皿は甲斐国に近接する諏訪地方を中心に目立つが、松本平や佐久地域にも散見されるとしている。（服部敬史「信濃（長野）」『中世食器の地域性』国立歴史民俗博物館研究報告書第７１集 1997）

さて、当該遺跡では、柱状高台付土器の皿のみが確認されており、その形態的特徴からＡ類・Ｂ類・Ｃ類に分類した。Ａ類・Ｂ類は従来から柱状高台付土器とされてきたものであるが、Ｃ類については、外見上は足高高台

付土器に類似している。しかし、器壁が厚く、製作技法等が異なることから柱状高台付土器の類型の一つと考えた。類似する足高高台付土器については、川上元氏によると、高台部が極端に高くなり、薄くて長い反りのある脚部端及び口縁部端が緩やかに外反する一群の土器としている。また、この形状の範型はロクロビキ木器に求められるのではないかと推定している。(川上元「土師系什器の展開と終焉」『中部高地の考古学』1978 長野県考古学会) さて、C類を柱状高台付土器の範疇とした理由として、足高高台付土器を脚部にケズリ成形を施したものとし、柱状高台付土器を脚部にケズリ成形を施さないものとするならば、C類は、①通常の足高高台よりも底部が分厚く、脚が太い②柱状高台付土器の底部に脚を付けた形態であり、製作順序も同様であると思われる③供伴する両者の胎土はほぼ同じであるという理由から、形態が足高高台付の土器であっても、柱状高台付土器の系譜に入るものではないかと推定される。

[灰釉陶器]

灰釉陶器は、図示できない小破片も含めると数多く出土している。器種も碗・皿を中心に様々なものがみられるが、図示できたものを中心に概観しておくこととする。灰釉陶器は消費地における時間差を勘案して時期区分をすると①Ｋ１４号・Ｋ９０号窯式期（９世紀後葉）②折戸５３号窯あるいは光ケ丘１号窯式期（１０世紀前葉）③大原２号窯式期（１０世紀前葉から中葉）④虎渓山１号窯式期（１０世紀後葉）⑤丸石２号窯式期（１１世紀前葉）に分けられそうである。当該遺跡出土の灰釉陶器はＫ１４・Ｋ９０号窯式期からみられ、虎渓山１号窯式期に出土数のピークがあることがわかる。それ以降、丸石２号窯期には出土数は減少し、山茶碗もわずかな小破片しかみられなくなる。上小地方全域をみると、Ｋ９０号窯式期頃の灰釉陶器からみられ、折戸５３号窯式期から虎渓山１号窯式期のものの出土が多いようである。

一方、各時期の状況をみると、①Ｋ１４・Ｋ９０号窯式期の灰釉陶器はＳＢ９７・ＳＢ２５２などから出土している。②折戸５３号窯あるいは光ケ丘１号窯式期のものはＳＢ３１７・ＳＢ４１２などから出土しており、共伴する土器から１０世紀第１四半期の土器と共に使われていたと考えられる。ＳＢ４１２などから出土しているものも、共伴する土器から９世紀後半や１０世紀第１四半期の土器と共に使われていたと考えられる。③大原２号窯式期のものはＳＢ０７・ＳＢ９８などから出土しており、共伴する土器から１０世紀第２四半期から第３四半期頃の土器と共に使われていたと考えられる。④虎渓山１号窯式期のものは、ＳＢ９８・ＳＢ３１２・ＳＢ３４３などから出土している。共伴する土器から１０世紀第３四半期頃から１１世紀前葉の土器と共に使われていたと考えられる。⑤丸石２号窯式期のものは、ＳＢ４８６などからも出土している。共伴する土器から１１世紀前葉の土器と共に使われていたと考えられる。この様相からＳＢ９８やＳＢ４１２出土の灰釉陶器のように異なる時期の窯式のものが共伴している事例がみられる。つまり、灰釉陶器が生産された時期より後の時期の竪穴住居跡からも出土するという現象がみられるということである。この様な時間幅をもつこと、すなわち、異なる窯式の灰釉陶器が共伴するということは、消費地での使用期間などの消費状況が反映されていると考えたい。

[緑釉陶器]

緑釉陶器は図示できるものだけでも１１点が出土しており、小破片も多数確認できる。碗・皿が出土している。東海産で猿投系のもの（第４分冊第１７１図５８～６２）は９世紀後半に位置付けられる。近江産のもの（第４分冊第１７１図６３・６４・６６・６７）は１０世紀代に位置付けられる。東海産で尾北系あるいは東濃系のもの（第４分冊第１７１図６５・６８）も１０世紀代に位置付けられる。原明芳氏によると、信濃の緑釉陶器は９世紀中頃からみられるという。その後、９世紀後半から出土量が増大し、１０世紀代にピークをむかえるが、１１世紀後半にはみられなくなるという。出土が多い器種は碗・皿などの食膳具で、９世紀中頃には猿投窯と思われる東海産と京都産がみられるが、９世紀後半になると猿投窯などの東海産のものが主体となる。１０世紀になると近江産のものが加わるが、１１世紀にはいると近江産のものは姿を消すという。(原明芳「信濃の緑釉陶器」『緑釉陶器の流れ』1990 三重県埋蔵文化財センター) 当該遺跡においても、同様の傾向がみられる。ＳＢ４１７出土のもの（第４分冊第１７１図５８・５９）は共伴する土器からも９世紀後半に所属すると思われ、ＳＢ４１

１出土のもの（第４分冊第１７１図６６）は共伴する土器からも１０世紀前半に所属すると思われる。

［円面硯］

円面硯は２点（第４分冊第１６８図４・５）が出土している。両者とも圏足円面硯で硯内に内堤と外堤を有する有堤式である。内堤及び外堤の造りは９世紀代にみられる坏類の高台に類似している。脚部に長方形の透かし孔をもつ。９世紀代のものと思われるが、出土遺構は不明である。

上小地方では当該遺跡を含めて１２遺跡から陶硯が出土している。当該遺跡出土のものを含めて、上小地方の陶硯を概観しておくこととする。陶硯の分類は「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース４１』奈良国立文化財研究所 1983 をふまえ、綿貫邦男氏の分類（綿貫邦男「群馬県出土陶硯の集成及び若干の分類」『大屋敷遺跡Ⅳ』1996 前橋市埋蔵文化財発掘調査団）に準じて観察してみたい。陶硯は、この分類により（１）円面硯・（２）風字硯・（３）方形硯・（４）その他に大きく分類される。転用硯は別ものとして扱う。（１）円面硯には蹄脚硯・圏足硯・低圏足硯・無脚硯・坏皿形硯がある。出土数の多い圏足硯はＡⅠ類（硯面に内堤をもたない無堤式）・ＡⅡ（硯面に内堤と外堤をもつ有堤式）・ＡⅡｂ類（硯面の外縁に低い堤が巡り、陸・海の区別が不明瞭なもの）・ＡⅢ類（硯面の外縁には一条の堤が作られるのみのもの）・Ｂ類（硯面が小さく、堤はきわめて低く痕跡程度のもの）に細分される。坏皿形硯はＡ類（中空の硯）・Ｂ類（坏皿形に把手のつくもの）に細分される。（２）風字硯はＡ類（無堤式のもので、硯尻には縁が無いものが多い）・Ｂ類（硯頭部に弧状に堤を設ける有堤式のもの）・Ｃ類（いわゆる二面円頭風字硯）に細分される。

法楽寺遺跡：圏足円面硯が２点出土している。脚部に長方形の透かし孔をもつと思われる。ＡⅡ類である。９世紀代のものと思われるが、出土遺構は不明である。

中井遺跡（上田市）：圏足円面硯が５点出土している。脚部に長方形や十文字の透かし孔をもつＡⅡ類である。９世紀代の土器と一緒に出土している。

宮平遺跡（上田市）：圏足円面硯が１点出土している。脚部には円形透かし孔をもつＡⅠ類のものである。８世紀前半の竪穴住居跡から出土している。

信濃国分寺跡（上田市）：圏足円面硯が２点出土している。脚部には長方形の透かし孔があると思われる。ＡⅠ類とＡⅡ類のものが僧寺回廊跡より出土している。須恵器の坏の製作技法と似た作り方をしているが、坏の高台とは異なる形態の堤をもつ。作りは丁寧である。

国分寺周辺遺跡群浦沖遺跡（上田市）：圏足円面硯が１点出土している。脚部には長方形の透かし孔をもつＡⅡ類である。９世紀代のものと思われるが、出土遺構は不明である。

諏訪田遺跡（丸子町）：圏足円面硯が１点と形態が不明な数点の小破片が出土している。圏足円面硯は脚部に長方形の透かし孔をもつＡⅡ類で９世紀代のものと思われる。覆土からの出土と思われる。

稲羽北遺跡（丸子町）：圏足円面硯の脚部が１点出土している。詳細な形態は不明であるが、脚部に長方形の透かし孔をもつ。

小之入窯跡（武石村）：圏足円面硯が１点出土している。脚部に十文字の透かし孔をもつＡⅠ類である。９世紀初頭の土器と一緒に出土している。

釜村田遺跡（東部町）：円頭風字硯のＡ類が１点出土している。９世紀中頃の竪穴住居跡から出土しているが、遺構に伴うものかは不明である。

勝負沢遺跡（丸子町）：発掘調査は行われていないが坏皿形硯（提瓶形硯）のＢ類が出土している。

真行寺遺跡（東部町）：発掘調査は行われていないが円頭風字硯のＡ類が１点出土している。

大洞窯跡（丸子町）：発掘調査は行われていないが圏足円面硯が１点出土している。

これらを出土状況からみると、①信濃国分寺跡及びその周辺遺跡から出土しているもの（信濃国分寺跡・浦沖遺跡）②窯跡から出土しているもの（小之入窯跡・大洞窯跡）③集落遺跡から出土しているもの（法楽寺遺跡・宮平遺跡・中井遺跡・諏訪田遺跡・稲羽北遺跡・釜村田遺跡）に分けられる。また、出土点数の多い圏足円面硯

をみるとα信濃国分寺跡と中井遺跡出土のものは外周に鍔状の凸帯をもつ、β法楽寺遺跡・浦沖遺跡・諏訪田遺跡・中井遺跡出土のものは、内堤及び外堤の造りが９世紀代にみられる坏類の高台に類似していることが特徴的である。圏足硯の大まかな変遷は、ａ硯面の径に対して器高の低いものから高いものへと変遷し、ｂ脚部に施される意匠は多数の長方形透かし孔や円形・楕円形など色々な形の透かし孔から、透かし孔の数の減少や箆描き模様へと変化するとされているという。上小地方の陶硯は、圏足円面硯の出土が多く、９世紀代のものが多い。

［墨書土器］

墨書土器は竪穴住居跡（ＳＢ１７・ＳＢ９１）や井戸跡（ＳＫ２６）などから出土している。ＳＢ１７はその出土土器から８世紀末から９世紀初頭の竪穴住居跡で、土器の墨書（第４分冊第１６９図１）は部分的に残っているのみで判読はできない。ＳＢ９１は９世紀第４四半期のものと思われる。土器の墨書（第４分冊第１６９図２）は「大〇」と判読できたが、２文字目は判読できなかった。井戸跡は、その出土土器をみると９世紀第４四半期の土器が中心となっている。軟質須恵器の坏にも墨書がみられる。墨書土器の文字は、いずれも「共」と判読できる。ほぼ完形の使い込んでいない坏が多いことと、「共」の文字が書かれていたことから、井戸をめぐる祭祀行為が行われていたことが推定される。

中 世

当該遺跡からは、土師質土器・須恵質のもの・陶磁器類が出土している。土器類は井戸跡（ＳＸ２２）や墓坑など（ＳＫ９９・ＳＫ１１５・ＳＫ１５６）から出土しているものもあるが、多くは遺構外からの出土である。また、小破片が多いため、図示できるもののみを記載した。青磁など多くの小破片が確認されている。

土師質土器はいわゆるカワラケと呼ばれる小皿（第４分冊第９４図７７、第９５図９１・９２、第１１４図１３９）がある。これらは、１３世紀後半から１４世紀代にかけてのものである。また、土師質の擂鉢（第４分冊第９５図９７）や内耳鍋（第４分冊第９０図１７）もみられる。土師質の擂鉢は１５世紀後半から１６世紀前半にかけてのものとみられる。須恵質のものには擂鉢がある。これらは、１３世紀後半から１４世紀代のもの（第４分冊第９４図６３、第１０６図２９、第１１３図１１１、第１１４図１３２）・１４世紀代のもの（第４分冊第９６図１１３）・珠洲産の１４世紀前半のもの（第４分冊第２５図５）がある。陶磁器には輸入陶磁器の白磁・青磁や国内産の古瀬戸がみられる。白磁には、碗と合子がみられる。白磁の碗（第４分冊第１１２図８６・８７、第１１３図１００）は１１世紀後半から１２世紀代にかけてのものである。合子（第４分冊第１１３図１０９）は１２世紀代のものである。青磁には碗（第４分冊第９４図６４・６５）と皿（第４分冊第１０５図１６２）がみられる。青磁碗は龍泉窯系の１３世紀代のものと思われる。青磁皿は越州窯系の１０世紀～１１世紀にかけてのものと思われる。古瀬戸には瓶子・碗・皿がある。瓶子（第４分冊第９０図１８）は１４世紀中頃のものと思われる。碗（第４分冊第６８図１６・１７）はいわゆる天目碗で１４世紀末～１５世紀初頭のものと思われる。天目茶碗は古瀬戸系のものと思われる。皿（第４分冊第１１５図１６７）は１６世紀代のものと思われる。また、図示し得なかったが、常滑系の甕が土坑（ＳＫ２２）から出土している。

これらの土器・陶磁器の時期による特徴を４時期に区分してみてみたい。時期区分は①中世前期第１期（１１世紀後半から１２世紀前半）②中世前期第２期（１２世紀後半から１４世紀前半）③中世後期第１期（１４世紀後半から１５世紀前半）④中世後期第２期（１５世紀後半から１６世紀後半）に大きく分けてみる。当該遺跡では、中世前期第１期には白磁の碗や合子などがみられる。中世前期第２期にはカワラケ・須恵質の擂鉢・青磁の碗などがみられる。中世後期第１期には天目茶碗などがみられる。中世後期第２期には土師質の擂鉢・古瀬戸の皿などがみられる。このことから、当該遺跡では１３世紀から１４世紀代にかけてカワラケなどの土器類の出土が目立つ。また、土器・陶磁器類は１６世紀以降にはみられなくなることから、当該地区は水田に変わるなどの土地利用が変化したことが推定される。

（２）土製品

弥生時代後期から古墳時代初頭

土製紡錘車・土製玉類が竪穴住居跡から出土している。土製紡錘車（第４分冊第１２１図１６・１７）は、中央に孔が穿たれており断面形が扁平な長楕円形で比較的薄いものである。土製玉類には丸玉（第４分冊第１２６図４４）がみられる。これには、中央からはずれた箇所に孔が穿たれている。

古墳時代中期から後期

土製円板・土製紡錘車・土製玉類・羽口・円筒形土製品などが竪穴住居跡から出土している。土製円板は土器片からの転用品が多い。土製紡錘車は中央に孔が穿たれており、断面形が台形の比較的厚いものである。土製玉類には丸玉と勾玉がみられる。いずれにも、孔が穿たれている。また、玉類の範疇に属すると推定される球形土製品（第４分冊第１２６図４８）が竪穴住居跡から出土している。これは、還元炎焼成で表面には線刻が施されている。羽口は、竪穴住居跡の覆土中から破片となって出土しており、必ずしもその住居跡に伴うものとは限らない。しかし、当該期の遺物として報告しておく。円筒形土製品は、円筒形で内面に明瞭な輪積み痕や、巻きあげ痕を残すことを特徴としている。当該遺跡からは２点が出土している。両者とも竪穴住居跡から出土している。ＳＢ１８１から出土したもの（第４分冊第１２５図４１）は両端が欠けた状態で出土している。ＳＢ３５２から出土したもの（第４分冊第１２５図４０）は、カマドの袖の構築材として使用された状態で出土しており、完存している。これの口縁部形態は内湾ぎみとなり、底部は存在していない。外面調整については、縦方向のヘラケズリの後にナデを施している。円筒形土製品は、長野県内では善光寺平南部の千曲川中流域に分布の中心がある。特に、善光寺平の最南端である千曲川右岸の坂城地区に出土例が集中している。一方、隣接する上小地方における出土例は大川遺跡（東部町）ＳＢ０４でカマド周辺から出土しているもののみであり、当該遺跡のものが２例目となる。両者とも、坂城町出土例と同様に千曲川右岸からの遺跡である。

奈良・平安時代

土製円板・土製紡錘車・土製玉類・土鈴・羽口・瓦などが竪穴住居跡から出土している。土製円板・土製紡錘車は古墳時代後期と同様の形態を呈する。土製玉類は、勾玉（第４分冊第１２６図４３）が竪穴住居跡から出土している。土鈴（第４分冊第１２５図３６）は円柱状に指ナデ成形されている。Ｘ線透過試験の結果、内部に５個の小さな土玉が確認された。製作方法は、Ｘ線透過試験による接合痕の観察の結果から円筒状にした粘土に粘土玉５個を入れた後、粘土の塊で塞いで外面を指で撫でて成形している。その後、酸化炎焼成したと考えられる。上小地方での同様の土鈴は、国分寺周辺遺跡群新幹線地点から出土している。円柱状土製品（第４分冊第１２２図２３）は、土製紡錘車と同じ図版に入れてあるが、その形状からカマドの支脚などの用途が考えられる。これは、土坑（ＳＫ０２）から出土している。羽口は井戸状土坑（ＳＫ３４）・鍛冶関連遺構と思われる土坑（ＳＫ２５３）などから出土している。ＳＫ３４から出土した羽口（第４分冊第１２２図２６）は碗形滓や土器と共に出土している。ＳＫ２５３から出土したもの（第４分冊第１２３図２７）は一部が生焼けの状態であったため土の部分は洗浄時に溶けてしまったが、出土時の状態では完形品であった。これは、平面形が円形の土坑の底部から出土している。瓦は、平瓦（第４分冊第１６８図１・２）と丸瓦（第４分冊第１６８図３）が出土している。倉沢正幸氏の鑑定によると、胎土・厚さ・製作技法等から信濃国分寺跡出土の瓦に類似しているとの知見が得られた。また、これらは、調査面積に比して瓦の出土量が少ないことから信濃国分寺から持ち込まれた可能性が高いと思われる。このような事例は、国分寺周辺遺跡群新幹線地点などの信濃国分寺周辺の遺跡や宮平遺跡などに類例がある。ただし、宮平遺跡の事例については、瓦の特徴が信濃国分寺跡出土のものとは異なっており信濃国分寺の瓦とは別系統のものではないかとしている。

（3）石 器・石製品

縄文時代

尖頭器・打製石鏃・石錐・スクレイパー・剥片石器・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲き石・凹石・多孔石が出土しており、そのほとんどのものが遺構を伴わずに出土している。なお、打製石斧・磨石・敲き石・凹石は縄文時代以降に使用されているものも含まれるだろうが、まとめて本論の中で述べておくこととする。

当該遺跡からは草創期の有舌尖頭器が２点（第４分冊第１２７図１・２）出土している。いずれも、石材はチャートで先端部分を欠いている。上小地方での有舌尖頭器の出土地は標高１，０００ｍを超える南と北の高原地帯に偏在しており、平野部では西村遺跡・浦田Ａ遺跡からの出土が知られるのみであった。平野部における出土は、①一時的なキャンプ地②狩猟場における廃棄行為による結果などが考えられている。当該遺跡出土のものも同様に考えられる。打製石鏃は数多く出土している。凹基のもの・平基のもの・飛行機形のものなどがみられる。黒曜石製のものが多いが、チャート製や頁岩製のものもみられる。形態的特徴から縄文時代の早前期頃や後晩期頃のものもみられる。有舌尖頭器の出土と合わせて考えると、縄文時代の狩猟場であった可能性も考えられる。石錐・スクレイパー・剥片石器は確認できたもののみを報告した。黒曜石製のものが多い。磨製石斧は２点のみの出土であったが、打製石斧は数多く出土している。ただし、縄文時代以降のもの・石鍬（第４分冊第１３４図１２５、第１３５図１４３）などが含まれている。これらは欠損したものが多く、用途・所属時期などの検討が必要なものもある。磨石・敲き石・凹石は、古墳時代や奈良・平安時代の竪穴住居跡からも出土している。敲き石は磨石や凹石と併用して使われている場合が多い。これらは、有用性の高い石器であることから各時代で使用されていたと思われる。また、多孔石（第４分冊第１４８図２１０）も出土しているが、出土状況は不明である。

弥生時代後期から古墳時代初頭

磨製石鏃・石包丁・石鑿・砥石・石鍬・磨石・台石などが出土している。磨製石鏃は、上小地方では当該遺跡のものを含め１５点が確認されているが、そのほとんどが凹基で有孔の無茎式である。特に、当該遺跡出土のもの（第４分冊第１２８図５５）は逆刺が発達しており、特異な形態となる。石包丁は、５点が確認されている。製作途中と思われるもの（第４分冊第１２８図８１・８２）もみられる。いずれも、在地産と思われる頁岩製で上小地方に一般的な小型のものである。上小地方では集落内で製作されている事例が多く、その出土数も他の地方よりも多い。これは、頁岩の露頭が至る所に存在し石材が得やすいことも一因と考えられる。砥石・石鍬・磨石・台石は竪穴住居跡から出土している。

また、石製品とは異なるが、ガラス小玉が竪穴住居跡（ＳＢ１９９）から出土している。色調はマリンブルー（青系）である。この色が発色しているということは、成分に鉛を含んでいると思われる。

古墳時代中期から後期

紡錘車・石製玉類・石製模造品・軽石製品などが出土している。紡錘車は竪穴住居跡を中心に出土している。線刻により三角形の模様を施したもの（第４分冊第１２９図８３）・波状の模様が施されているもの（第４分冊第１２９図８６）などがある。石製玉類には、臼玉・勾玉がみられる。臼玉は、滑石製のものが多く、竪穴住居跡から出土しているものが多い。石製模造品も出土しており、これらも滑石製のものが多い。垂れ飾りは未製品を含めて５点が出土している。石材は緑泥片岩製のもの（第４分冊第１３０図９５・９６・９７・９９）と滑石製のもの（第４分冊第１３０図９８）がある。緑泥片岩には光に反射する鉱物が含まれており、きらきらと輝く。この石材のものは縄文時代の玉箆（ぎょくべら）と捉えることができる。しかし、いずれも古墳時代の竪穴住居跡から出土しており、滑石製のものも存在することから古墳時代後期の垂れ飾りと考えることもできる。

奈良・平安時代

石製勾玉・砥石・軽石製品などが出土している。石製勾玉は水晶などの透明度の高い石材を使用したもの（第

４分冊第１５０図５７）が竪穴住居跡から出土している。また、凹石・磨石・敲き石・台石なども、古墳時代に引き続き出土している。

中 世

搗き臼・石臼・五輪塔などが確認されている。搗き臼（第４分冊第１４７図２０９）は破片である。これは、底部から外開しながら直線的に立ち上がっている。石臼は１２点が確認されている。これらは全て粉ひき臼と思われる。また、制作途中と思われるものも確認されている。茶臼は確認することができなかった。いずれも、明確な遺構からの出土ではなく、重機により検出面まで掘削した時に出土したものである。

五輪塔は当該遺跡から１０６点のものが確認されている。風空輪（１９点）・火輪（４２点）・水輪（２４点）・地輪（２１点）の各部位が出土している。中には火輪に空輪が付いたもの（第４分冊第１５２図３９、第１５３図６１）や制作途中と思われるものも確認されている。紀年銘をもつものはなかった。遺構に伴うものとしては、ＳＸ１５の遺構上部からは投げ込まれた状態で出土している火輪（第４分冊第１５２図３５）・ＳＸ２７からは集石を構成する石として出土している地輪（１点・どの地輪が該当するのかは不明）・ＳＸ２８からは集石を構成する石として出土している水輪（２点・どの水輪が該当するのかは不明）がある。しかし、ほとんどは明確な遺構からの出土ではなく、重機により検出面まで掘削した時に出土したものである。ただし、発掘の記録写真を見るとＳＤ０３周辺からの出土が多いようである。五輪塔を伴う遺構（ＳＸ１５・ＳＸ２７・ＳＸ２８）もＳＤ０３周辺に位置している。石材は多孔質安山岩製のものが多い。

当該遺跡の五輪塔の規格をみると、色々な形態のものが存在している。大まかな傾向を上げると、風空輪は風輪幅と空輪幅がほぼ同じものや空輪幅が風輪幅より大きいものが多い、火輪は軒口上縁ラインに反りがあるものが多い、水輪は扁平度の高いものが多い、地輪は高さに対する幅の比率が大きいものが多い傾向がみられる。また、日向畑遺跡（真田町）や観音平経塚（坂城町）の五輪塔の規格をみると、日向畑遺跡では風空輪は空輪幅が風輪幅より大きいものが多い、火輪は軒口上縁ラインに反りがあるものが多い、水輪は扁平度の高いものが多い、地輪は高さに対する幅の比率が大きいものが多い傾向がみられる。観音平経塚では、風空輪は風輪幅と空輪幅がほぼ同じものや空輪幅が風輪幅より大きいものが多い、火輪は軒口上縁ラインに反りがあるものが多い、水輪は扁平度の高いものが多い、地輪は高さに対する幅の比率が大きいものが多い傾向がみられる。これらのことと、宮下真澄氏の中世石造塔婆の様式変遷についての研究（宮下真澄「東信地方における中世石造塔婆の様式手法の推移について」『信濃第１７巻１０号』1965 信濃史学会）を参考にし、日向畑遺跡（１５世紀から１６世紀初頭）や観音平経塚（１４世紀第２四半期から１６世紀前半）の五輪塔の検討と１５世紀後半から１６世紀中頃のものと思われる耕雲寺（真田町）の五輪塔を実見して当該遺跡のものを検討すると、五輪塔の形成は１４世紀第２四半期頃に始まり、１６世紀中頃までは行われていたと思われる。また、１５世紀代から１６世紀初頭頃が造立活動の盛期であったと思われる。

（４）金属器

弥生時代後期から古墳時代初頭

小型の銅鏃が２点（第４分冊第１５７図２８・２９）出土している。これらは、遺構には伴っていない。両者とも逆刺をもつ有茎腸抉柳葉式（ゆうけいわたくりやないばしき）の銅鏃である。全体的に刃こぼれが多く、鏃身部の形状を損ねている。同様の形態のものは当該遺跡東側の烏帽子山麓の大日ノ木遺跡からも出土しており、千曲川流域に多い形態である。

古墳時代中期から後期

銅釧・耳環・鉄鏃・刀子・手斧（第４分冊第１６２図９０）・鍬先（第４分冊第１６２図９２）・鉋（第４分冊

第１６２図９９）などが出土している。銅釧（第４分冊第１５７図２７）は一部が欠けているが断面が菱形を呈するものと思われる。これは、平面形が円形で直径約３０㎝の土坑から出土している。耳環は竪穴住居跡及び溝状遺構から出土している。鉄鏃は折れたものが多く形態がはっきりしないものが多い。形態のはっきりしているものではＳＢ３０４から出土した鉄鏃の片刃箭式（かたはやしき）のもの（第４分冊第１６０図５１）が確認できる。刀子も数点（第４分冊第１６０図５６等）が確認されている。鍬先は破片であるがＵ字型鍬先であると思われるものが出土している。また、所属時期は不明であるが、馬具の轡の一部（第４分冊第１６３図１０６・１１５）なども出土している。

奈良・平安時代

仏教関連の遺物から生活用品まで、金銅三尊仏・磬（けい）・銅鋺・銅印・小刀・短剣・鉄鏃・刀子・鎌・釘・苧引金（おひきがね）など様々なものが出土している。金属製品は、古墳時代後期と比べてその数量が増加する。特に、刀子の出土数は目立って増加している。

金銅三尊仏（第４分冊第１５８図３７）は土坑から出土したとの話もあるが、出土位置も含めて出土状況は不明である。金銅仏は阿弥陀三尊像とみられ、その形状から頭に宝冠を付けた宝冠阿弥陀仏と考えられる。座像の阿弥陀如来を中央にして、向かって右に観音菩薩・左に勢至菩薩を配している。表面には鍍金が施されていたとみられる。こうした小金銅仏は７世紀後半の白鳳時代から平安時代までの間に、全国で２１０点ほどが確認されているという。これらは釈迦如来像と阿弥陀如来が多く、両者で全体の４割を占めているという。阿弥陀如来像は１１世紀から１２世紀にかけての平安時代後期に多くのものが製作されているという。

磬（第４分冊第１５８図３４）も出土状況が不明である。元来、磬は中国の古い楽器であったが初唐頃に仏事に使用されるようになったと考えられている。日本での磬の形状は左右均等の山形をなしており、仏堂内においては導師の右脇机の上に置かれて使用される。日本では８世紀には使用されていたことが推定されている。当該遺跡出土のものはほぼ真ん中から割れているが、形状はよく保存されている。その形状から１２世紀後半頃の特徴をもっているとみられる。

銅鋺（第４分冊第１５８図３６）は遺構外の覆土中から出土したことになっているが、出土状況の写真をみると土坑（ＳＫ１３５）から出土していると思われる。ＳＫ１３５は平面形が１．６５ｍ×１．４５ｍの隅丸長方形である。銅鋺は礫の間で破片が潰れた状態で出土した。原明芳氏は県下の銅鋺を集成して、①県下では松本平を中心に出土例があるが、他地域でも出土するようになってきている。②これらは、７世紀後半から８世紀前半と９世紀中頃から１１世紀を中心に古墳・集落跡から出土している。また、破片が多く、器としての使命を終了して廃棄されたと考えられる。③使用されたと思われる建物や施設が特定できるような出土状態のものはないと述べている。（原明芳「銅鋺」『長野県の考古学』1996（財）長野県埋蔵文化財センター）当該遺跡の銅鋺は、その形態から８世紀代の高台付鋺と思われる。

銅印（第４分冊第１５８図３５）はＳＤ１７の覆土中から出土したと思われる。ＳＤ１７の覆土は人頭大の礫を含む砂礫からなり、これは当該遺跡の北を流れる行沢川の氾濫等による自然流路と思われる。しかし、詳細な出土地点は不明である。銅印は平川南氏により「宍来（未）私印」と判読された。平川氏によると「宍（しし）」は食用の獣肉を意味するという。当時、信濃から都へ鹿などの獣肉が特産物として送られていたが、それを管理していた集団が使用した私印と考えられるという。読みの「宍」は宍人部（ししとべ）、すなわち、鳥獣の肉の貢納・調理を職とする部を意味し、「来（未）」は宍人部という姓に続く名前の頭の文字と考えられるという。また、当該私印は従来の私印と比較すると線が細くて彫りが浅いという。永島正春氏の化学的分析の結果では、現状重量が３５．８０８６５ｇ・密度は６．７９ｇ／㎤（古代印の一般的な密度）・成分は銅を１００として、ヒ素４．０・鉛１．０・銀０．２５・錫０．１０・ビスマス０．２５・アンチモン０．１５で、永島分類のタイプⅠ～Ⅱの範疇となり古代印の特質を示しているという。私印は天平宝字２年（７５８年）の「惠美家印」に始まり、貞観１０年（８

６８年）には太政官より家印を使用することを奨励する布告が出されて普及していったとされている。また、「宍」の字は、国分寺周辺遺跡群明神前遺跡の９世紀後半の墨書土器にも書かれており示唆的である。

苧引金（第４分冊第１６３図１０７）は両端の曲がった鎹状（かすがいじょう）を呈する鉄片で、両端の曲がった部分を板ないし木片に挿入し、木片部分を手に持って鉄を刃として使用したとされている。苧引金は火打金と違って刃の部分が包丁のように薄くなる。山梨県では９世紀に出現するとされている。長野県においても同様に平安時代に出現するが、出土数は多くない。

小刀（第４分冊第１５９図３９）・短剣（第４分冊第１５９図４１）は竪穴住居跡から出土している。刀子も竪穴住居跡を中心に数多く出土している。その出土数から当該期の主要な鉄製品として位置付けられる。鉄鏃は竪穴住居跡から多く出土している。雁又式（第４分冊第１５９図４２）・長三角形Ⅰ式（第４分冊第１５９図４５）・長三角形Ⅱ（第４分冊第１５９図４８）などがみられ、角根式（第４分冊第１６２図１００）と思われるものも出土している。その他に、鉄鎌も２点出土している。いずれも、小型のものである。また、釘・鎹や用途不明の鉄製品も出土している。

一方、金属製品ではないが鉄滓が古墳時代後期から古代の竪穴住居跡や土坑などから出土している。碗形滓や粒状滓などがみられる。これらは鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）とみられるが、科学的分析が行われておらず、今後の詳細な分析が課題となろう。また、上小地方では国分寺周辺遺跡群新幹線地点で鍛冶炉などの施設の可能性がある遺構が確認され、弥勒堂遺跡では１０世紀前半頃に精錬鍛冶・鍛錬鍛冶を操業していたとみられる遺構・遺物が確認されており、真田町の四日市遺跡Ｃ地区では平安時代の鍛冶製鉄遺構と思われるものが確認されている。今回の調査によって新たな資料が加わったと言えよう。

中 世

多くの墓坑が確認されているためか古銭が出土している。確認できた古銭には唐銭（開元通宝）・北宋銭（皇宋通宝・熙寧元宝・元祐通宝・紹聖元宝・聖宋元宝・元豊通宝）・明銭（洪武通宝・永楽通宝）・寛永通宝がみられる。ＳＫ５９からは３枚の古銭（第４分冊第１５７図１０・１３・１５）が出土しており、中世の土坑墓の可能性がある。永楽銭が混じっていることから、１５世紀後半以降には確実に存在した遺構であることが考えられる。また、所属時期は不明であるが、指輪（第４分冊第１５７図２６）が出土している。出土状況は不明であるが、飾り気のない素朴なものである。仏具の類の可能性があるものの、類例の検討が必要となろう。

（５）木製品

木製品には、図示していないが住居等の建築材や井戸枠などの大型のものと、人形・盤・木杭などの比較的小型のものが出土している。井戸跡と推定されるＳＫ２６からは「供」の字が書かれた墨書土器と共に盤・人形・木樋が出土している。これらは井戸をめぐる祭祀遺物と考えられる。同じく祭祀遺物としてＳＤ０３より斎串が出土している。斎串は細長い薄板の両端を削って尖らせた串状の木製品で井戸・溝状遺構などから発見されることが多い。斎串とは祭祀に用いられる神聖な串の意味で、両端に加えられた切り掛けに注目した名称であるが、必ずしも切り掛けがあるとは限らない。黒崎直氏によると、井戸などの水辺と斎串との関係は、浄域を設定して神を請ぎ降ろし、神の助けによって清らかな水を得ようとする目的に結びつき、井戸等が祭礼の場となるという。また、奈良・平安時代の遺跡から発見されることが多いとしている。（黒崎直「斎串考」『古代研究 第十号』1977）当該遺跡出土の斎串（第４分冊第１６７図２）は黒崎直氏の分類の斎串Ａ（切り掛けを全く施さず、山形に尖る上端と両側から鋭く尖らす下端をもつ。）に該当する。これは８世紀後半に多くみられるとされている。木杭は下端の尖らせた部分を中心として出土している。これは、地中にさし込まれていたものが多いためと思われる。柵などに用いられた可能性があると考えられる。また、掘立柱建物の柱根と思われるもの（第４分冊第１６７図１２）も出土している。

（6）骨 類

骨類は、人骨と獣骨とに分けることができる。顎及び歯の部分については明らかに人骨と獣骨の区別が可能であるが、他の部位については科学的分析を行っていないため区別をすることはできなかった。しかし、はっきり獣骨と分かる骨だけでも３８ケ所で出土しており、骨類出土総数の２４．８％にも及んでいる。分析を行えば獣骨の総数は増加するものと思われる。骨類は破片となって出土しており、骨類の出土状況によって①竪穴住居跡②溝状遺構③土坑④遺構外出土のものに分類することができる。①竪穴住居跡出土のものはカマド出土のものとそれ以外のものに分けられる。当該遺跡からは、当該期の国分寺周辺遺跡群新幹線地点・宮平遺跡などと比較しても獣骨の出土数が多いように思われる。国分寺周辺遺跡群新幹線地点では１３ケ所からイノシシ・ニホンジカ・ウマの骨類が出土している。宮平遺跡では竪穴住居跡を中心に２６ケ所からイノシシ・ニホンジカ・ウマ・ウシの骨類が出土している。獣骨の出土が多いということは、当該遺跡出土の私印に肉を表す「宍」の字が使われていることと関係する現象とも考えられる。すなわち、当該集落では食肉の加工等を集落の長の指導の下に行っており、その際に出た骨が埋められたとも考えられる。集落の存在理由に関わることだけに、今後も検討が必要になると思われる。

（7）炭化物等

炭化物等は、その出土状況によって①竪穴住居跡②溝状遺構③土坑④遺構外出土のものに分類することができる。竪穴住居跡の炭化材には住居構築材と思われる炭化した木材も確認されている。しかし、樹種同定は行っていない。他に、土坑（Ｐ５４０７）からは穀類が炭化したと思われる炭化物が出土している。また、奈良・平安時代の竪穴住居跡（ＳＢ４８３）からベンガラと思われる顔料が出土している。これは固まって出土しており、土器には入っていなかったものの何らかの容器に入っていた可能性もある。

＜参考引用文献＞

・土器、土製品

浅野晴樹「中世遺跡の土器組成における問題」『埼玉県考古学論集』１９９１（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
上田市教育委員会『平成１２年度市内遺跡発掘調査報告書』２００１
鵜飼幸雄「高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相」『高部遺跡』１９８３茅野市教育委員会
岡田正彦「平安時代土師器等の編年試論」『信濃２９－９』１９７７信濃史学会
岡田正彦「平安時代以降の遺物」『橋原』１９８１岡谷市教育委員会
尾見智志「上小地方の弥生土器編年」『９９シンポジウム「長野県の弥生土器編年」』１９９９長野県考古学会弥生部会
尾見智志「第三節まとめ」『大日ノ木遺跡』２００２上田市教育委員会
尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（1）」『上沖遺跡』１９９８上田市教育委員会
尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（2）」『駕籠田遺跡』１９９９上田市教育委員会
川上元「土師系什器の展開と終焉」『中部高地の考古学』１９７８長野県考古学会
川上元「信濃における古代末期の土器様相」『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第２１号１９８６神奈川考古同人会
岐阜県陶磁資料館『美濃の天目碗』２００１
小林真寿「上小地方出土の灰釉陶器その１」『上小考古』１９８２上小考古学会
坂井美嗣『大川遺跡・中原遺跡群』１９９２東部町教育委員会
坂本美夫「柱状高台の皿・坏について」『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第２１号１９８６神奈川考古同人会

助川朋広『中之条遺跡群宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』２００１坂城町教育委員会
中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』１９９５真陽社
奈良国立文化財研究所「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース４１』１９８３
西山克己「７世紀代に用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌７９』１９９６長野県考古学会
ニュー・サイエンス社『考古学ジャーナルNO211特集越州窯青磁と平安時代の緑釉・灰釉陶器』１９８２
橋本久和「中世社会と土器研究」『概説中世の土器・陶磁器』１９９５真陽社
服部敬史「信濃（長野）」『中世食器の地域性』国立歴史民俗博物館研究報告書第７１集１９９７
原田幹「Ｓ字甕の分布と地域型」『鍋と甕そのデザイン』１９９６東海考古学フォーラム
原田幹「Ｓ字甕の波及と定着を巡る問題」『Ｓ字甕を考える』２０００東海考古学フォーラム
原明芳「信濃の緑釉陶器」『緑釉陶器の流れ』１９９０三重県埋蔵文化財センター
深澤敦仁「群馬県出土の「赤井戸式」土器について」『東日本弥生時代後期の土器編年』２０００東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
水口由紀子「武蔵国における中世成立期の煮炊土器小考」『埼玉県考古学論集』１９９１（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
若林卓他「第６章宮平遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２１』１９９９
（財）長野県埋蔵文化財センター
綿貫邦男「群馬県出土陶硯の集成及び若干の分類」『大屋敷遺跡Ⅳ』１９９６前橋市埋蔵文化財発掘調査団
・石器、石製品
川上元・小林幹男『真田町日向畑遺跡』１９７３真田町教育委員会
児玉卓文他「第三編縄文時代」『上田・小県誌第六巻歴史編上(一)考古』１９９５上田・小県誌刊行会
児玉卓文「第二章縄文時代」『上田市誌歴史編(1)上田盆地のあけぼの』２０００上田市誌刊行会
宮下真澄「東信地方における中世石造塔婆の様式手法の推移について」『信濃第１７巻１０号』１９６５信濃史学会
若林卓「観音平経塚」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２１』１９９９
（財）長野県埋蔵文化財センター
・鉄製品、木製品
石田茂作 監修『新版仏教考古学講座第５巻仏具』１９８４雄山閣
井上和人「官印と私印」『古代史復元８古代の宮殿と寺院』町田章 編１９８９講談社
尾上元規「古墳時代鉄鏃の地域性」『考古学研究第４０巻第１号』１９９３考古学研究会
倉沢正幸「上田市内出土の銅印・金銅仏について」『上小郷土研究會報４８』２０００上小郷土研究会
黒崎直「斎串考」『古代研究第十号』１９７７
国立歴史民俗博物館『日本古代印の基礎的研究』１９９９
津野仁「古代・中世の鉄鏃」『物質文化５４』１９９０物質文化研究会
原明芳「銅鋺」『長野県の考古学』１９９６（財）長野県埋蔵文化財センター
平川南「長野県内出土・伝世の古代印の再検討」『長野県考古学会誌９９・１００』長野県考古学会
広瀬都巽『日本銅磬の研究』１９４３清閑舎
柳沢亮他『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書２』１９９８（財）長野県埋蔵文化財センター
山下孝司『「苧引金」覚書』『山梨県考古學協會誌第５号』１９９２山梨県考古学協会
和根崎剛『四日市遺跡Ｃ地区』１９９４真田町教育委員会

第四節　まとめ

1　弥生時代後期

弥生時代後期には、箱清水式期の集落が確認されている。集落は、調査地域のほぼ中央の帯状に広がった微高地上に立地している。周囲に当該期の遺構が確認できないことから、集落のほぼ全域を調査したことになると思われる。集落は自然堤防上に立地しているためか、住居の入り口を川下側に向けて細長く分布している。しかし、その配置をみると竪穴住居の間に広場がみられる。すなわち、ＳＢ３９５・ＳＢ２４５・ＳＢ２２１・ＳＢ２８４・ＳＢ３１４・ＳＢ３３３などに囲まれているにも関わらず竪穴住居が造られなかった空間・ＳＢ２０５・ＳＢ１９９・ＳＢ１６８に囲まれた空間が広場として考えられる。岳の鼻遺跡や東五町遺跡の当該期の集落においても同様の空間が確認できる。この広場に竪穴住居を造らなかったということは、その場所が必要な空間として認識されていたためと思われる。つまり、集落内の小集団ごとに行う行事の場あるいは日常生活の場と考えることができる。一つの空間は一つの小集団が形成するものと仮定すると、法楽寺遺跡は大きく二つの集団により形成されていたことになる。また、竪穴住居跡は３３軒が確認されており、土器の形態的な特徴から２時期（第３５図）に分けることができる。すると、集落は２世代～３世代の期間しか営まれなかったことが推測される。

ところで、法楽寺遺跡からは竪穴住居跡を中心に良好な箱清水式土器が出土しており、上小地方の千曲川右岸の土器様相をよく表している。この土器の分布する範囲は箱清水式土器文化圏と呼ばれており、その範囲は若干の地域相を見せながら千曲川流域および松本平北部の地域までひろがっていることがわかってきた。近年、長野県考古学会弥生部会による県下資料の総括的な研究（９９シンポジウム「長野県の弥生土器編年」1999 長野県考古学会弥生部会）も行われ、小地域圏を想定することができた。その後、上小地方についても、周囲を山地に囲まれた千曲川流域の小地域圏としての様相が見え隠れしていることがわかってきた。（尾見智志「第三節まとめ」『大日ノ木遺跡』2002 上田市教育委員会）このことを簡単にまとめると、一般的な箱清水式土器の甕は単純口縁で器面に櫛描波状文が施され、頸部には櫛描簾状文が施されるものである。しかし、それとは異なる甕が上小地方では偏在してみられることが問題となってきた。特異な甕として、①Ｔ字文を施した甕②器面に斜走文を施した甕③折り返し口縁をもつ甕があげられる。①の甕は、箱清水式土器文化圏の中では上小地方に集中して出土していることが認められる。②の甕は、上小地方では千曲川右岸から集中して出土している。③の甕も、上小地方ではほとんどのものが千曲川右岸から集中して出土している。今回は、当該遺跡出土の土器にも②の甕が良好な状態で確認できることから、土器と地域圏との関係を検討してみたい。

さて、当該遺跡でも出土している②器面に斜走文を施した甕を特徴としている地域は佐久地方千曲川右岸地域にあることは、すでに確認されている。これは、近年の発掘調査の成果から上小地方の千曲川右岸にまで及んでいることがわかってきた。上小地方の弥生時代後期の遺跡をみると、この特徴をもった甕は、ほとんどが千曲川右岸の遺跡から出土している。（例外として和手遺跡出土のものがあげられる。これは、数点の破片資料で古墳時代初頭に位置付けられる可能性のある土器である。）それでは、佐久地方千曲川右岸地域の特徴をもったものは甕のみであろうか。文化的様相の検討の進んだ佐久地方の状況を確認しながら、上小地方の様相をみていきたい。佐久地方千曲川右岸の土器の特徴は、甕の器面に櫛描斜走文が施される・壺は箆描矢羽根状文を施すことや口縁部が受け口状を呈するものがあることに象徴されている。遺構についてみると、炉縁石をもつ地床炉の他に石囲い炉・土器敷き炉・埋甕炉など多様なものがみられることが特徴となっている。それに対して上小地方ではどのような状況であろうか。甕は前述のとおりである。壺は、法楽寺遺跡では口縁部の形状が受け口となっているものがみられる。また、城の前遺跡や高呂添遺跡・下町田遺跡などには、頸部に箆描矢羽根状文を施すものがみられる。この様な壺は資料数が少ないものの、千曲川右岸の遺跡から確認されている。遺構についてみると、炉は、法楽寺遺跡・下町田遺跡・大日ノ木遺跡などの千曲川右岸の遺跡からは炉縁石をもつ地床炉が高い割合で確認されている。また、石囲い炉・土器敷き炉も確認されている。これらの形態の炉は、千曲川左岸では確認されてい

ない。このことから、上小地方の千曲川右岸は佐久地方の千曲川右岸との関係が強いことがうかがえる。一方、県外では南蛇井・増光寺遺跡（群馬県富岡市）にも佐久地方千曲川右岸の特徴をもった土器がみられるという。烏帽子・浅間山麓から佐久平の千曲川右岸地帯にかけての小地域圏が設定できる可能性がみえてきた。

<参考・引用文献>
尾見智志「第三節まとめ」『大日ノ木遺跡』２００２上田市教育委員会
小山岳夫「地域編年の再検討」『信濃第４２巻第１０号』１９９０信濃史学会
小山岳夫「第三節佐久の弥生時代の繁栄」『佐久市志歴史編（１）原始・古代』１９９５佐久市志刊行会

２　古墳時代中期から後期

古墳時代中期から後期の集落は、調査地域全域に広がっている。１８１軒の竪穴住居跡が確認されており、所属時期不明の竪穴住居跡も、多くのものが当該期に所属すると考えられることから、総数は２００軒を超えると思われる。遺跡の北側は、行沢川が神川に流れ込んでおり、西側には神川の河岸段丘が形成されている。また、南側と東側は、遺構が確認されない空間となっている。このことから、当該期の集落のほぼ全域を調査したものと考えられる。集落は、自然堤防上に細長く形成されている。当該期の法楽寺遺跡の集落は、古墳時代中期後半から始まっている。上小地方では、当該期の集落遺跡の調査は小規模なものが多く、集落全体を見わたせるものは少なかった。しかし、近年の宮平遺跡・国分寺周辺遺跡群新幹線地点および当該遺跡の調査により、面的に広がりのある調査事例が加わった。宮平遺跡は、古墳時代後期に成立する集落である。国分寺周辺遺跡群新幹線地点は、当該遺跡と同様に古墳時代中期後半に成立する集落と考えられる。また、法楽寺遺跡は国分寺周辺遺跡群新幹線地点と同様に、河岸段丘上に位置する遺跡で平安時代まで集落が営まれている。

当該遺跡では、長期間にわたり集落が存続していることが予想された。そのため、集落の変遷を土器様相の変化によりみることにした。当該遺跡では、今まで資料が希薄であった古墳時代中期の集落を確認することができたことから、上小地方における古墳時代中期を中心とした土器様相（第４分冊第３６・３７図）を確認することからはじめた。これは１期～６期に分けることができた。資料は上小地方の比較的良好な遺跡の竪穴住居跡から出土した一括土器と捉えられるものを中心として、形態の変化・須恵器との共伴関係などから分類した。１期は、箱清水式土器の影響がなくなった時期と捉えた。ハケ甕・器台などの形態は、バラエティ豊かである。前期後半と考えた。２期では、ハケ甕・Ｓ字甕などの前期の特徴が残るが、高坏には屈折脚高坏が出現する。前期から中期への端境期と考えた。３期では、ハケ甕がみられなくなる。中期前葉と考えた。４期では、球形胴の甕に長胴化の傾向がみられるようになる。竪穴住居にはカマドはみられない。中期中葉と考えた。５期では、須恵器がみられるようになる。甕は長胴化が進む。竪穴住居にはカマドがみられるようになる。中期後葉と考えた。６期では、甕が長胴甕となる。中期から後期への端境期と考えた。これらに実年代を当てはめると、１期は４世紀後半頃・２期は４世紀末から５世紀初頭頃・３期は５世紀第１四半期頃・４期は５世紀第２四半期から第３四半期頃・５期は５世紀第４四半期頃・６期は５世紀末から６世紀初頭頃と考えた。この土器変遷からみると、当該遺跡は４期の頃からはじまったと考えられる。また、その後の土器様相を含めて、当該遺跡の竪穴住居跡出土の一括土器を中心として、形態の変化・須恵器との共伴関係などから土器変遷図（附論１の第１～８図）を作成した。この土器変遷観から集落の変遷をみると、６世紀前葉・６世紀後葉から７世紀前葉にかけての時期・７世紀後葉に竪穴住居が多く構築されるようであるが、集落は比較的安定して継続的に維持されていたことがよみとれる。

<参考・引用文献>
東国土器研究会『東国土器研究第４号東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向』１９９５
東国土器研究会『東国土器研究第５号東国における古墳時代中期の土器様相と諸問題』１９９９

３　奈良・平安時代

奈良・平安時代の集落は、調査地域全域に広がっている。１８６軒の竪穴住居跡が確認されており、所属時期不明の竪穴住居跡も、多くのものが当該期に所属すると考えられる為、総数は２００軒を超えると思われる。遺跡の北側は行沢川が神川に流れ込んでおり、西側には神川の河岸段丘が形成されている。南側は、隣接する太田遺跡の調査でも１０世紀前半の竪穴住居が確認されていることから、さらに調査区域外へと広がることが予想される。東側は遺構が確認されない空間となっている。これらの事から、当該期の集落はさらに南へと帯状に広がるものの、集落のほぼ全域を調査したものと思われる。

まず、集落としてみていくことにする。拙稿「奈良・平安時代の竪穴住居・集落」(『駕籠田遺跡』1999 上田市教育委員会）において、当該期の上小地方の集落について集落変遷からみて３類型に分けたことがあった。第１類は、９世紀代に入ると竪穴住居を中心に構成される集落から掘立柱建物を中心とした集落に変化するもの（宮ノ前遺跡・高田遺跡・蔵替遺跡など）とした。第２類は、竪穴住居を中心に構成されるもの（浦田Ａ遺跡・藤之木遺跡・林之郷遺跡・七ツ石遺跡・石原田遺跡・神林遺跡など）とした。第３類は、２軒～３軒の竪穴住居からなる小集落で、存続期間が短いものが多いもの（上沖遺跡・琵琶塚遺跡・上田原遺跡など）とした。また、第４類として、掘立柱建物を中心とした集落（宮脇遺跡・駕籠田遺跡など）があることを確認した。この分類に従えば、法楽寺遺跡は第２類に分類されると思われる。

ところで、竪穴住居や掘立柱建物が整然と配置されている集落は律令体制下の公権力をもって造られた「計画集落」と推定されることが多いが、当該遺跡ではこのような整然とした遺構の配置を見ることができない。これは、法楽寺遺跡が古墳時代中期に自然発生的に成立した集落であることから、その後も律令体制下に完全には組み込まれなかったことを意味している可能性がある。その一方で、「宍来私印」の私印の出土から「宍人部」の存在が推定される。つまり、鳥獣肉の加工を生業とした集団を中心にした集落が形成されていたことが推定され、ある程度自立的に集落を営んでいたことが考えられる。「宍人部」については、関係すると思われる墨書土器が信濃国分尼寺跡の西側に位置する明神前遺跡からも出土している。試掘調査のため、検出された竪穴住居跡等の調査は行われなかったが、包含層からは多くの遺物が出土している。その中の１０世紀前半に所属すると思われる土器に「宍」の文字が墨書されている。古代の上小地方の生業に新たなものが加わることとなり、地域の成り立ちを考える上で大変興味深い状況となった。

一方、当該期の集落は、遺構・遺物からみると比較的安定した状態で、長期間維持された集落であると思われる。集落の配置をみると、弥生時代後期の集落と同様の空間が幾つも確認できる。一つの空間を一つの小集団が形成するものと仮定すると、当該期の法楽寺遺跡には１５～１６の小集団があったことになる。また、集落の中心となるような大型の竪穴住居や掘立柱建物も確認することができる。

出土した土器類についてみると、奈良時代から平安時代および中世に至るまでの長期間にわたるものが出土している。このように、単独の遺跡で長期間にわたり土器様相の変遷を追えるものは少ない。土器様相の変遷をみると、拙稿（尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（1）」『上沖遺跡』1998 上田市教育委員会・「上小地方の奈良・平安時代の土器について（2）」『駕籠田遺跡』1999 上田市教育委員会）で述べた状況と同様の状況が確認される。しかし、希薄であった１１世紀代の資料が得られたことは大きい。古代から中世へと移り変わる時期の土器は、遺構と共に資料の蓄積段階にあると思われる。今後の進展に期待したい。

＜参考・引用文献＞

上田市教育委員会『平成１２年度市内遺跡発掘調査報告書』２００１
尾見智志「奈良・平安時代の竪穴住居・集落」『駕籠田遺跡』１９９９上田市教育委員会
尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（1）」『上沖遺跡』１９９８上田市教育委員会
尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（2）」『駕籠田遺跡』１９９９上田市教育委員会

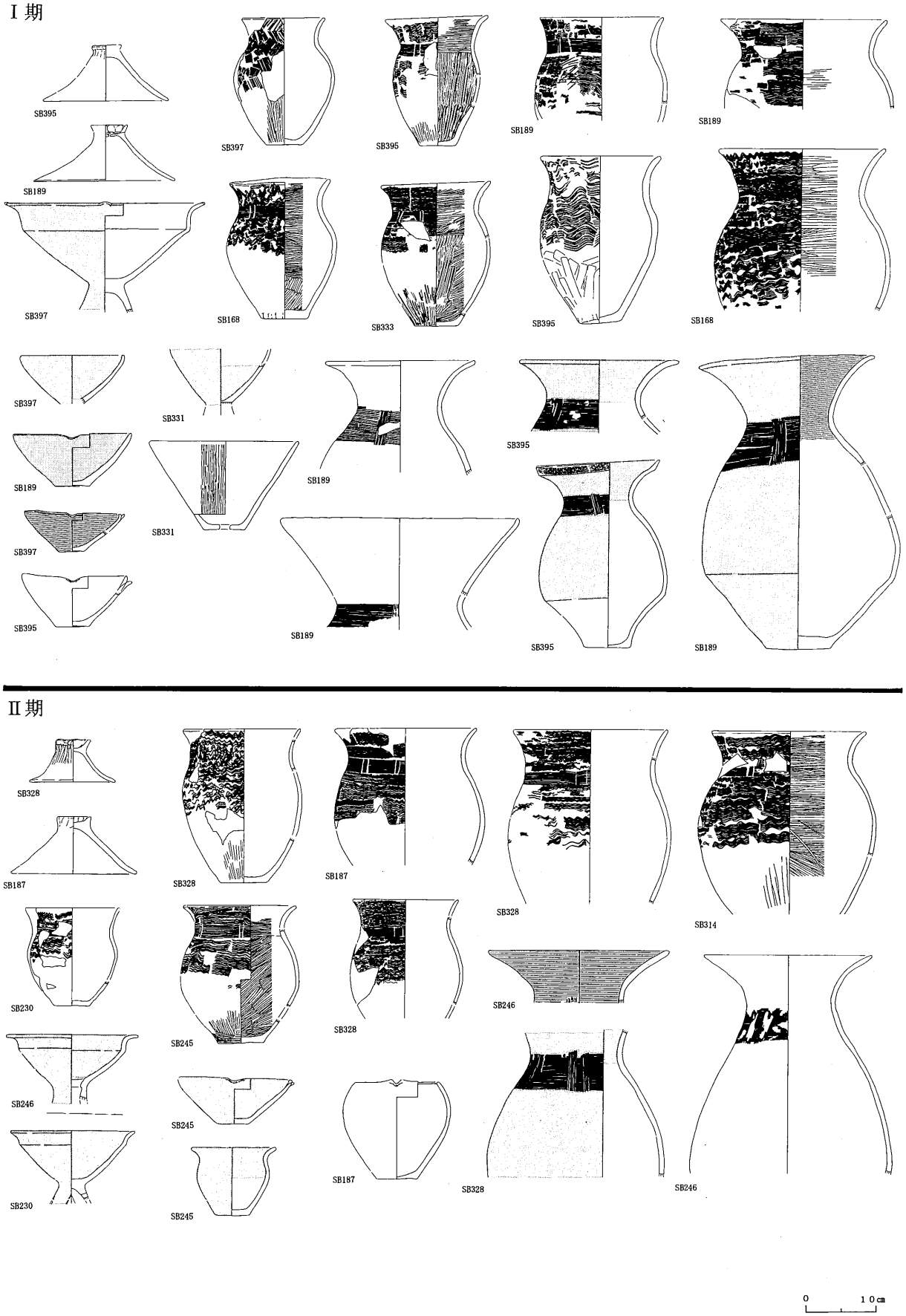
４　中世

中世になると、法楽寺遺跡は集落域から墓域へと土地利用が変化する。金銅三尊仏・磬などの仏教関連遺物の出土や地籍名が「法楽寺」と呼ばれていることから、寺院の存在が期待される。しかし、調査地域からは寺院と思われる遺構は確認することができなかった。それでは、寺院は無かったのかというと、そうとも言えない。中世の寺院は、墓域と一定の距離を置いていることが一般的であることから、調査地域の周辺にも寺院の存在する可能性を残している。また、「法楽寺」地籍周辺には「茅御堂」と呼ばれる地籍も存在しており、堂宇が存在した可能性を示唆している。地名の成り立ちにも関わる問題も含まれており、今後の研究の進展が望まれる。

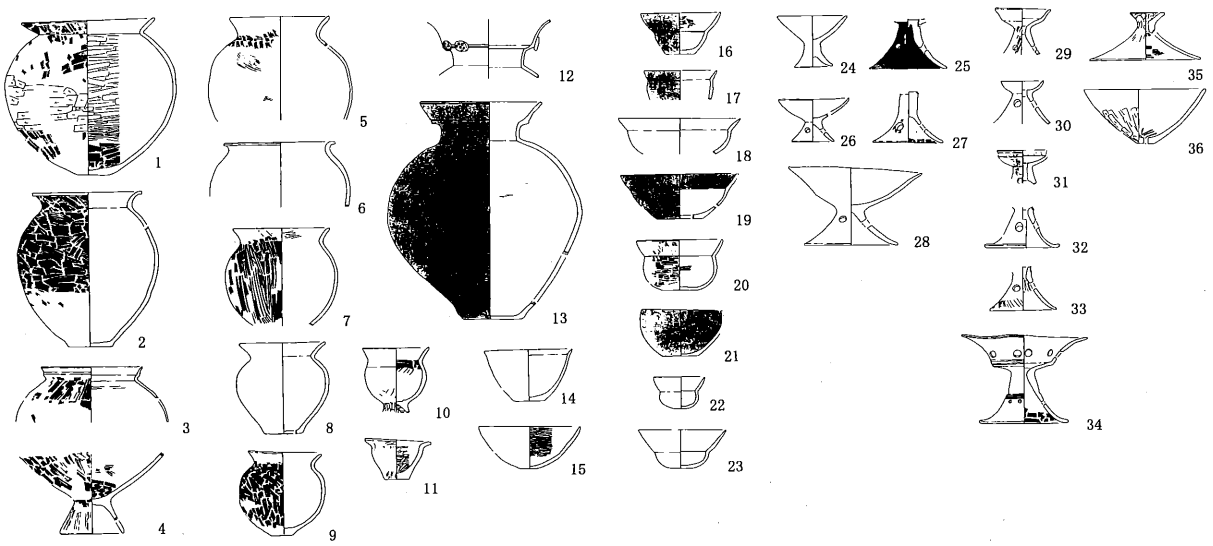
遺物をみると、弥生時代をはじめ、古墳時代や奈良・平安時代と比べて圧倒的に出土数が少ない。特に少ない土器・陶磁器類の所属時期をみると、平安時代末から鎌倉時代・南北朝時代・室町時代の各時代のものが出土している。比較的出土数の多い五輪塔は、１４世紀第２四半期頃に始まるとみられることから、鎌倉時代の終わり頃から墓域が形成され始めていると推定される。すると、中世後期は墓域であったとしても、中世前期については、どのような土地利用をしていたのだろうか。結論から言うと、当該遺跡は古代の竪穴住居を中心とした集落から掘立柱建物を中心とした集落に移行していったと思われる。東日本では、中世前期は遺構・遺物が少なく、１１・１２世紀にはほとんど人が住んでいないような状態を呈しているといわれている。土器・陶磁器などの遺物も少なく、遺構についても集落を構成する掘立柱建物や竪穴の建物・板壁掘立柱建物などの検出数も少ない。また、掘立柱建物については、建物となる柱穴が方形に拾えないものが多い状況にある。近年、この状況を踏まえて中世の遺構の調査方法や掘立柱建物などの遺構のまとめ方を見直す傾向がみられる。さて、上小地方で中世前期の遺跡として確認されているものには浦田Ｂ遺跡がある。浦田Ｂ遺跡においても東日本各地の遺跡と状況は同じであったが、他の時代の遺構とほとんど混在していなかったことから比較的容易に遺構の確認をすることができた。しかし、柱穴は柱穴群と称するほど数多く確認できるものの、柱穴を拾えた掘立柱建物は少なかった。また、遺物の出土数は僅かなものであった。法楽寺遺跡についても同様の状況が考えられる。当該遺跡は、各時代の遺構が重複しており中世に所属する掘立柱建物等の遺構の確認については慎重な対応が必要であると思われる。そのため、今のところ具体的な遺構の認定については保留にしておくことにするが、柱穴群の検出状況等をみると、漠然とではあるが方形に柱穴が高密度で集中している場所がみられる。これを、詳細にみていくと掘立柱建物を中心とした遺構が確認できる。一方、土器・陶磁器は、点数は少ないが柱穴群の密度の濃い地点の周辺から出土している。これらは、大きくみるとＳＤ０５・０６・０９・１５・１８からなる「コ」字形の溝跡の内側から出土していることになる。すると、この溝跡は中世前期に属するもので、その内側には集落が立地していたのではないかと推定することもできる。法楽寺遺跡は、古代から続く竪穴住居を中心とした集落が中世に入ると掘立柱建物を中心とした集落に移行し、中世前期の末葉には墓域へと変わっていったと考えられる。

＜参考・引用文献＞

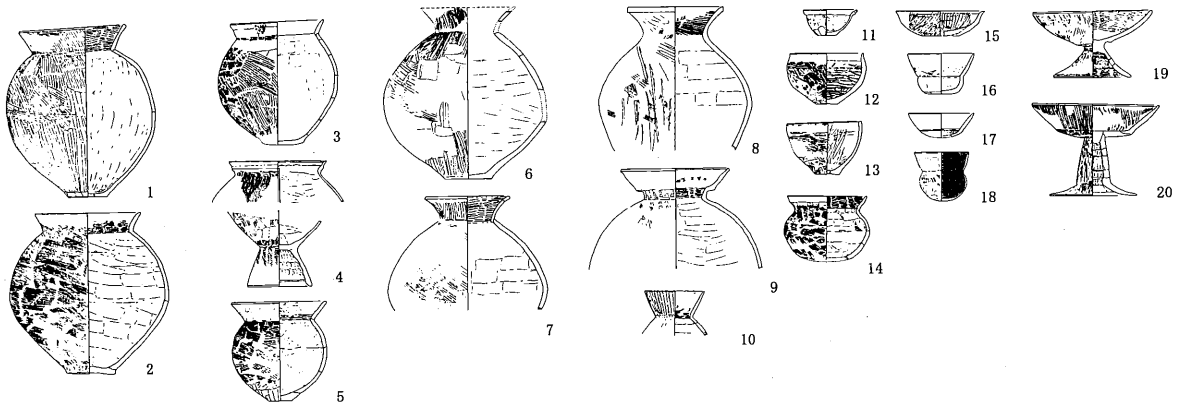
福島県考古学会中近世部会『東北地方南部における中近世集落の諸問題』２０００
飯村均「ムラがない - 中世前期の東国 - 」『ムラ研究の方法 - 遺跡・遺物から何を読みとるか - 』２００２帝京大学山梨文化財研究所
東北中世考古学会『掘立と竪穴 - 中世遺構論の課題 - 』２００１
第９回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会『東海の中世集落を考える - 考古学から中世のムラをどう読み解くか - 』２００２
上田市教育委員会『浦田Ｂ遺跡』１９９９



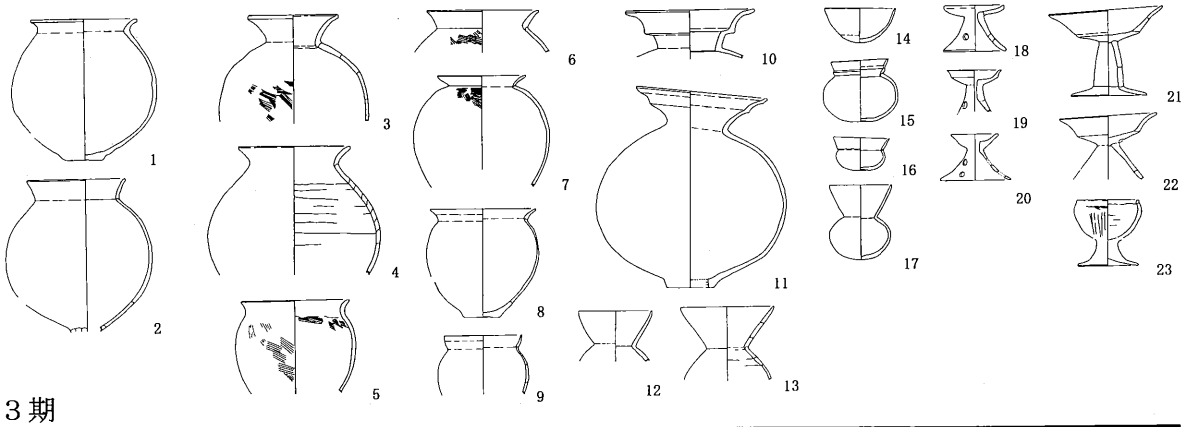
第35図　弥生時代後期の土器様相（法楽寺遺跡）



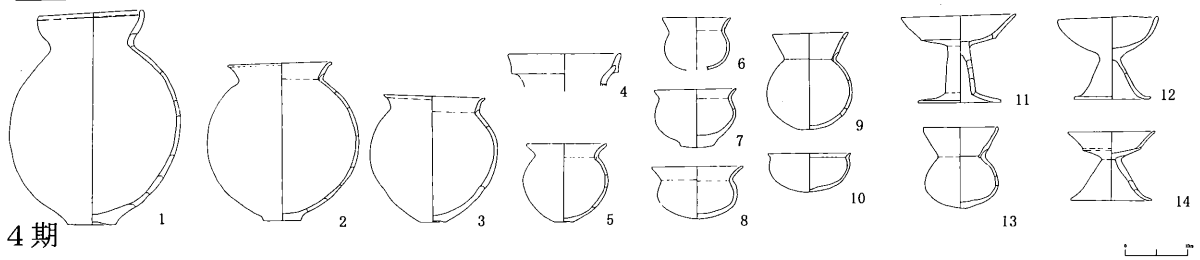
1期



2期

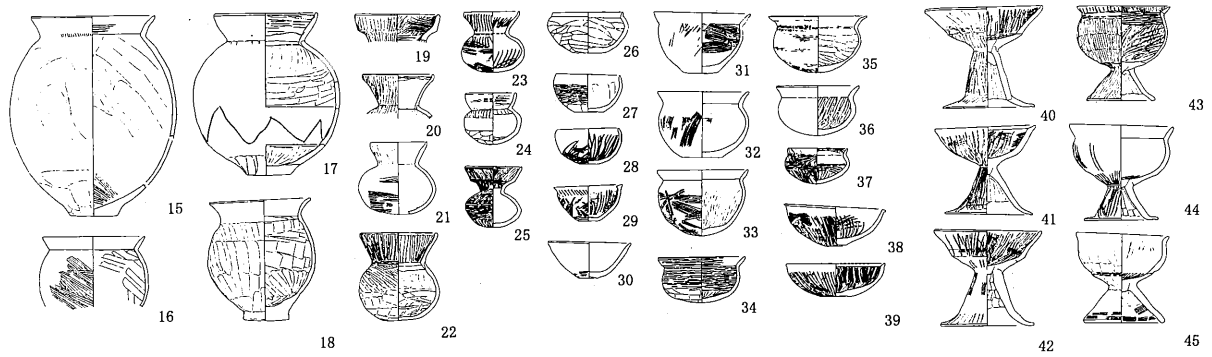


3期

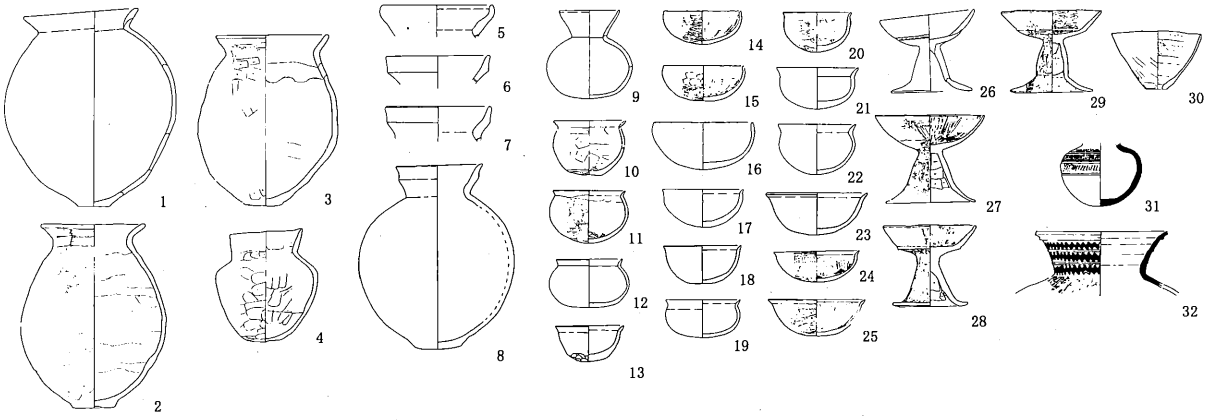


4期

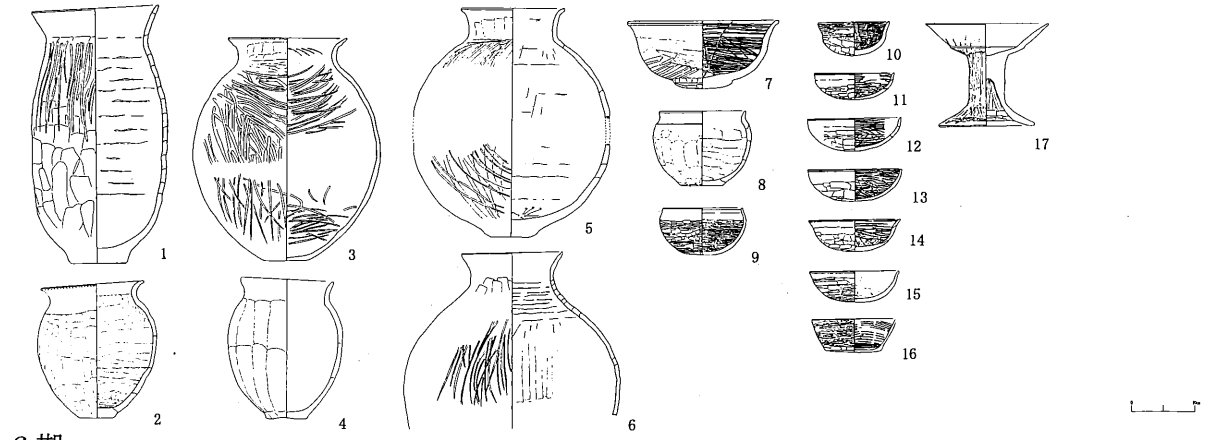
第36図　古墳時代中期の土器様相（上小地方）①



4期



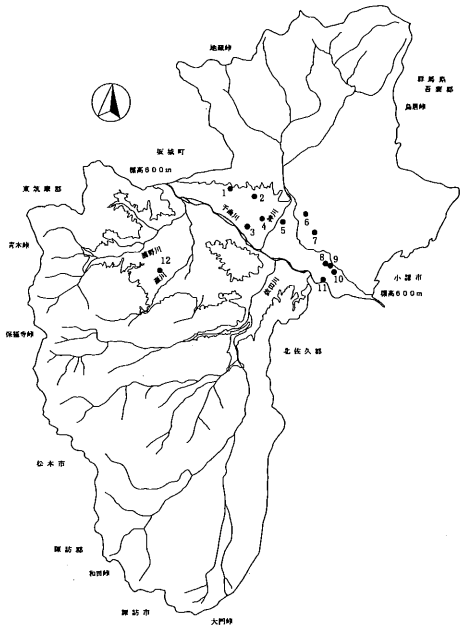
5期



6期

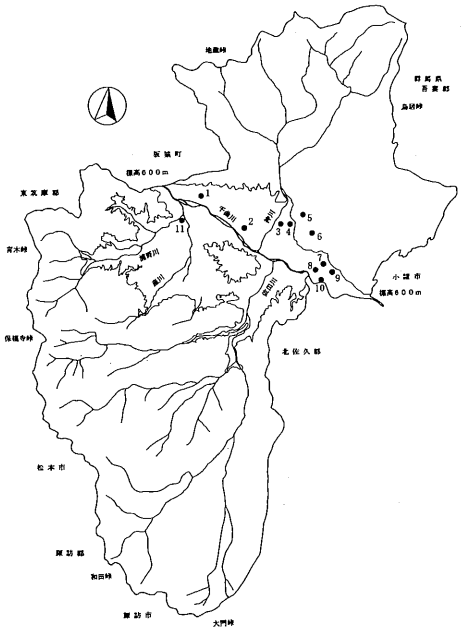
1期：「浦田A遺跡」ＳＢ０２（３、７、１０、１１、１２、１９、２０、２１、２２、２３、２６、３０、３１、３２、３３、３５）・ＳＢ１８（１、２、５、６、８、９、１３、１７、１８、２４、２５、３４、３６）・ＳＢ１９（４、１４、１５、１６、２７、２８、２９）
2期：「高呂添遺跡」ＳＢ０８（１、２、３、５、６、７、８、１０、１１、１２、１３、１４、１５１７、１９）・ＳＢ２４（４、９、１６、１８、２０）
3期：「大道下遺跡」ＳＢ１４（１、２、８、９、１１、１２、１８、１９、２０）・「琵琶塚遺跡」ＳＢ２２（３、４、５、７、１０、１７、２３）・ＳＢ５３（６、１３、１４、１５、１６、２１２２）
4期：「大道下遺跡」ＳＢ４４（１、３、４、６、７、８、１０、１１、１２、１３、１４）・ＳＢ４５（２、５、９）・「高呂添遺跡」ＳＢ３７（１５～４５）
5期：「大道下遺跡」ＳＢ１３（１、５、６、７、９、１２、１６、１７、１９、２１、２２、２６、３１）・「和手遺跡」ＳＢ０６（８、１３、１８、２３）・「国分寺周辺遺跡群」ＳＢ３３９（２、３、４、１０、１１、１４、１５、２０、２４、２５、２７、２８、２９、３０、３２）
6期：「高呂添遺跡」ＳＢ２３（２、３、４、８、９、１０、１１、１２、１３、１４、１５、１６）・ＳＢ３８（１、５、６、７、１７）

第37図　古墳時代中期の土器様相（上小地方）②



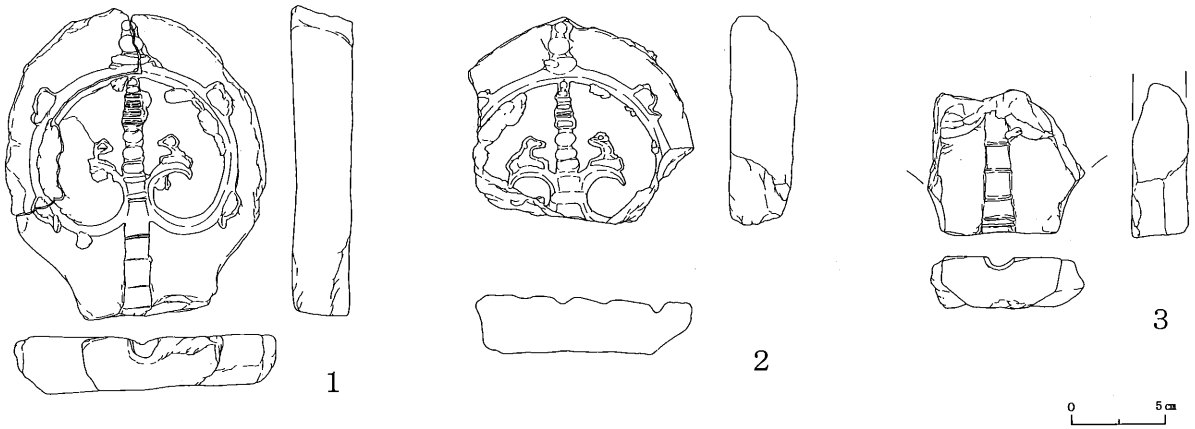
	遺　跡　名	所在地
1	上平遺跡	上田市
2	金井裏遺跡	上田市
3	下町田遺跡	上田市
4	国府調査Ⅲ・Ａ地点	上田市
5	法楽寺遺跡	上田市
6	大日ノ木遺跡	上田市
7	たたら堂遺跡	東部町
8	石原田遺跡	東部町
9	東五町遺跡	東部町
10	高呂添遺跡	東部町
11	城の前遺跡	東部町
12	和手遺跡	上田市

第38図　斜走文を施した甕の分布状況



	遺　跡　名	所在地
1	宮原遺跡	上田市
2	下町田遺跡	上田市
3	法楽寺遺跡	上田市
4	林之郷遺跡	上田市
5	大日ノ木遺跡	上田市
6	たたら堂遺跡	東部町
7	石原田遺跡	東部町
8	海善寺遺跡	東部町
9	高呂添遺跡	東部町
10	城の前遺跡	東部町
11	浦田Ａ遺跡	上田市

第39図　折り返し口縁をもつ甕の分布状況



第40図　錫杖鋳型（国分遺跡群、市道川辺町国分線地点、附論2補図）

第五節　附論

附論１　法楽寺遺跡の土器変遷について

尾見　智志

１　はじめに

法楽寺遺跡では、弥生時代後期の箱清水式期に一時的に集落が形成された後、古墳時代前期から中期前半までは集落が形成されず、古墳時代中期後半から再び集落が営まれることとなった。この古墳時代中期から平安時代までの長期間にわたる集落遺跡を概観するには土器による時期区分が不可欠であることから、当該遺跡における土器様相を把握しておくことが必要となった。今回、こうして作成した土器変遷図（第１～８図）について、若干の説明をさせていただくこととする。

２　各期の様相

法楽寺遺跡の古墳時代中期から平安時代の土器変遷は２１期に分けることができた。土器様相の違いから、古墳時代中期後半～古墳時代後期（１期～９期）と奈良・平安時代（１０期～２１期）に大きく分けてみていくことにする。古墳時代については、供伴する須恵器の年代観を意識しながら、本村東沖遺跡における編年（千野浩『本村東沖遺跡』1993 長野市教育委員会）・高呂添遺跡における編年（西沢浩『高呂添遺跡・井高遺跡』1989 東部町教育委員会）・東国土器研究第４号・同第５号などを参考にした。奈良・平安時代については、須恵器・灰釉陶器の年代観を意識しながら、「中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書４－総論編－」に準じながら拙稿（尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（１）」『上沖遺跡』1998 上田市教育委員会・尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（２）」『駕籠田遺跡』1999 上田市教育委員会）および国分寺周辺遺跡群新幹線地点の土器様相・宮平遺跡の土器様相を参考にした。各段階の様相を簡単にまとめておきたい。

第１期：甕は、器面にハケ調整を施したもの（甕A）がみられる。胴部は球形を呈する。壷は、有段口縁のもの（壷Ａ２ａ）がみられる。高坏は坏部が半球状を呈するもの（高坏C）・坏部が直線的に外反するもの（高坏E）がみられる。脚部が屈折脚のものも出土している。甑は、逆円錐状を呈する弥生時代からの伝統的な形態のものである。坏は丸底で口縁部を短く外反させた形態のものがある。須恵器は確認できない。

第２期：甕は、長胴化したもの（甕D・Ｅ２）が現れる。壷は、単純口縁で球胴のもの（壷Ａ３ｂ）・広口壷（壷B）・小型丸底壷（壷G・H）がみられる。高坏は、坏部が須恵器の坏類の模倣形態を呈するもの（高坏G）が現れる。鉢は、丸底気味で口縁部を若干外反させるもの（鉢A）・球形胴を呈するもの（鉢C）がある。坏は、丸底のもの（坏Ａ１・Ｂ１・Ｃ・Ｅ・Ｉ１）が中心となる。また、須恵器が伴うようになる。須恵器は、ＴＫ２３型式あるいはＴＫ２０８型式のものと思われるものやＭＴ１５型式のものと思われるものがみられる。

第３期：甕は、長胴化したもの（甕D・Ｅ２）がみられる。小型甕は、甕Dを小型化したもの（小型甕B）・胴部が球形のもの（小型甕C）・器高が低く頸部の収束しないもの（小型甕D）がみられる。壷は、単純口縁で球胴のもの（壷Ａ１ｂ・Ａ３ｂ）・小型の球形胴の壷（壷F）がみられる。高坏は、坏部の口縁端部が外反するもの（高坏D）・坏部が直線的に外反するもの（高坏E）・坏部が半球形のもの（高坏Ｉ）がみられる。いずれも、円錐形の脚部をもつものが多い。鉢は、球形胴を呈するもの（鉢C）がみられる。坏は、丸底のもの（坏Ａ１・Ａ３・Ｂ３・Ｆ・Ｉ１・Ｊ１・Ｋ・Ｍ・Ｏ・Ｐ）

が中心となる。甑は、単孔のもの（甑B）がみられる。

第４期：甕は、長胴化したもの（甕D・Ｅ１・Ｅ２・Ｅ３）がみられる。小型甕は、甕Aを小型化したもの（小型甕A）・甕Dを小型化したもの（小型甕B）・胴部が球形のもの（小型甕C）・丸底の底部から直立気味に立ち上がるもの（小型甕E）がみられる。壷は、単純口縁で球胴のもの（壷Ａ１ｂ・Ａ２ｂ・Ａ３ｂ）・大型の広口壷（壷D）・小型の球形胴の壷（壷F）がみられる。高坏は、坏部が外に開くもの（高坏A）・坏部が半球形のもの（高坏Ｉ）がみられる。鉢は、口縁部を外反させるもの（鉢A）・口縁部が直立気味にのびるもの（鉢B）・球形胴を呈するもの（鉢C）・須恵器を模倣したと思われるもの（鉢D）がみられる。坏は、丸底のもの（坏Ａ１・Ａ２・Ａ３・Ｂ１・Ｂ３・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｉ１・Ｉ２・Ｊ１・Ｊ２・Ｊ３・Ｋ・M）が中心となる。須恵器の模倣をした坏が多くみられるようになる。また、平底のもの（坏Q）もみられる。甑は、単孔のもの（甑A）・多孔のもの（甑C）がみられる。須恵器は、ＴＫ１０型式のものと思われるものがみられる。

第５期：甕は、長胴化したもの（甕C・Ｄ・Ｅ１・Ｅ２）がみられる。小型甕は、甕Aを小型化したもの（小型甕A）・甕Dを小型化したもの（小型甕B）・器高が低く頚部の収束しないもの（小型甕D）・丸底の底部から直立気味に立ち上がるもの（小型甕E）がみられる。壷は、単純口縁で球胴のもの（壷Ａ１ｂ・Ａ３ｂ）・逆卵形のもの（壷B）・大型の広口壷（壷D）・小型の球形胴の壷（壷F）がみられる。高坏は、坏部が外に開くもの（高坏A）・坏部が須恵器の模倣形態のもの（高坏H）・坏部が半球形のもの（高坏Ｉ）がみられる。鉢は、口縁部が直立気味に立ち上がるもの（鉢B）・球形胴を呈するもの（鉢C）・須恵器を模倣したと思われるもの（鉢D）がみられる。坏は、丸底のもの（坏Ａ１・Ａ３・Ｃ・Ｉ１・Ｊ１・Ｊ２・M・Ｏ・Ｐ）が中心となる。甑は、単孔のもの（甑Ａ・Ｂ）がみられる。

第６期：甕は、長胴化したもの（甕D・Ｅ２）がみられる。小型甕は、甕Aを小型化したもの（小型甕A）・胴部が球形のもの（小型甕C）・器高が低く頚部の収束しないもの（小型甕D）・丸底の底部から直立気味に立ち上がるもの（小型甕E）がみられる。壷は、単純口縁で球胴のもの（壷Ａ１ｂ・Ａ３ｂ）がみられる。高坏は、坏部が直線的に外反するもの（高坏E）がみられる。鉢は、丸底気味で口縁部を若干外反させるもの（鉢A）・口縁部が直立気味にのびるもの（鉢B）がみられる。
坏は、丸底のもの（坏Ａ３・Ｂ３・Ｃ・Ｉ１・Ｋ・Ｌ・M・Ｐ）が中心となる。また、平底のもの（坏G）もみられる。甑は、多孔のもの（甑C）がみられる。須恵器は、ＴＫ２１７型式のものと思われるものがみられる。

第７期：甕は、長胴化したもの（甕D）が主流であるが、球胴のもの（甕A）もみられるようになる。球胴のものは、器面をヘラ削り気味の調整が施されている。これは、壷に代わるものの可能性もある。
小型甕は、甕Dを小型化したもの（小型甕B）・胴部が球形のもの（小型甕C）・丸底の底部から直立気味に立ち上がるもの（小型甕E）がみられる。壷は、小型の球形胴の壷（壷F）がみられる。高坏は、坏部が半球形のもの（高坏Ｉ）がみられる。坏は、丸底のもの（坏Ａ３・Ｃ・Ｉ１）が中心となる。須恵器は、ＴＫ４６型式のものとＴＫ４８型式のものと思われるものがみられる。

第８期：甕は、長胴化したもの（甕D）が主流であるが、球胴のもの（甕A）もみられる。小型甕は、甕Aを小型化したもの（小型甕A）・甕Dを小型化したもの（小型甕B）・胴部が球形のもの（小型甕C）・器高が低く頚部の収束しないもの（小型甕D）・丸底の底部から直立気味に立ち上がるもの（小型甕E）がみられる。壷は、単純口縁で球胴のもの（壷Ａ１ｂ・Ａ３ｂ）がみられる。高坏は、坏部が半球形を呈し、脚部は円錐形の短脚をもつもの（高坏F）がみられるようになる。鉢は、球形胴を呈するもの（鉢C）がみられる。坏は、丸底のもの（坏Ａ１・Ａ３・Ｂ１・Ｂ３・Ｃ・Ｉ１・Ｌ）が中心となる。須恵器は、ＴＫ４８型式のものと思われるものがみられる。

第 9 期：甕は、長胴化したもの（甕D）が主流であるが、球胴のもの（甕A）もみられる。坏は、丸底のもの（坏B１・Ｉ１・Ｉ２）がみられる。須恵器は、MT２１型式のものと思われるものがみられる。

第１０期：甕は、古墳時代からの伝統をもった長胴甕（甕A）・器面にハケ目で調整を施すもの（甕B）・球形胴のもの（甕F）がみられる。小型甕は、甕Aを小型にしたもの（小型甕A）がみられる。高坏も古墳時代からの伝統をもったもの（古墳時代の土器分類、高坏Ｉ２）がみられる。坏類は、古墳時代後期から続く丸底のもの（坏D・E、黒色土器Aの坏B）がみられる。須恵器は、坏・蓋などがみられる。

第１１期：甕は、古墳時代からの伝統をもった長胴甕（甕A）に加えて、器厚を薄く仕上げた甕（甕C）がみられるようになる。坏類は、古墳時代後期から続く丸底のもの（坏D）に加えて、平底のもの（坏A・黒色土器Aの坏A）がみられるようになる。須恵器は、坏・蓋などがみられる。

第１２期：甕は、器厚を薄く仕上げた甕（甕C）が中心となる。小型甕は、甕Aを小型にしたもの（小型甕A）に加えて、甕Cを小型にしたもの（小型甕C）がみられる。坏類は、平底のもの（坏A・黒色土器Aの坏A）が中心となるが、古墳時代後期から続く丸底のもの（坏D）も少しみられる。鉢もみられるようになる。須恵器は、坏・蓋などがみられる。

第１３期：甕は、器厚を薄く仕上げた甕（甕C）が中心となっている。小型甕は、甕Aを小型にしたもの（小型甕A）・甕Cを小型にしたもの（小型甕C）・ロクロ調整をおこなったもの（小型甕D）がみられる。坏類は、内黒で平底のもの（黒色土器Aの坏A）が中心となるが、黒色土器でないもの（坏A）もみられる。また、鉢もみられる。須恵器は、坏・蓋などがみられる。

第１４期：甕は、器厚を薄く仕上げた甕（甕C）が中心となっている。小型甕は、甕Cを小型にしたもの（小型甕C）・ロクロ調整をおこなったもの（小型甕D）がみられる。坏類は、内黒で平底のもの（黒色土器Aの坏A）が中心となる。また、高台を付した皿（黒色土器Aの皿B）もみられるようになる。須恵器は、坏・蓋などがみられる。

第１５期：甕は、器厚を薄く仕上げた甕（甕C）が中心となっている。小型甕は、甕Cを小型にしたもの（小型甕C）・ロクロ調整をおこなったもの（小型甕D）がみられる。坏類は、内黒で平底のもの（黒色土器Aの坏A）が中心となる。また、高台を付した皿（黒色土器Aの皿B）もみられる。内黒の碗がみられるようになる。須恵器は、坏・蓋などがみられる。灰釉は、黒笹１４号窯式期あるいは黒笹９０号窯式期のものがみられる。

第１６期：甕は、器厚を薄く仕上げた甕（甕C）とロクロ調整をおこなった甕（甕D）がみられるようになる。小型甕は、ロクロ調整をおこなったもの（小型甕D）がみられる。坏類は、内黒で平底のもの（黒色土器Aの坏A）が中心となるが、黒色土器でないもの（坏A）が再びみられるようになる。また、柱状台付皿（柱状台付皿A）や小型の皿がみられるようになる。内黒の碗もみられる。須恵器は、坏・蓋などがみられるが、当該期以降は見られなくなる。灰釉は、折戸５３号窯式期や光ケ丘１号窯式期のものがみられる。

第１７期：甕は、器厚を薄く仕上げた甕（甕C）もみられるが、ロクロ調整をおこなった甕（甕D）が中心となる。小型甕は、甕Cを小型にしたもの（小型甕C）・ロクロ調整をおこなったもの（小型甕D）がみられる。坏類は、内黒で平底のもの（黒色土器Aの坏A）と黒色土器でないもの（坏A）がみられる。内黒の碗もみられる。灰釉は、大原２号窯式期のものがみられる。

第１８期：甕は、ロクロ調整をおこなった甕（甕D）もみられるが、煮炊具は羽釜が中心となる。小型甕は、ロクロ調整をおこなったもの（小型甕D）がみられる。坏類は、内黒で平底のもの（黒色土器Aの坏A）と黒色土器でないもの（坏A）がみられる。内黒の碗に加えて黒色処理が施されないものもみられる。灰釉は、大原２号窯式期と虎渓山１号窯式期のものがみられる。

第１９期：資料が少なく詳細は不明である。煮炊具は羽釜が中心となる。碗は、内黒のものと黒色処理が施されないものがみられる。灰釉は、虎渓山１号窯式期のものがみられる。

第２０期：第１９期と同様に煮炊具は羽釜が中心となり、碗は内黒のものと黒色処理が施されないものがみられると思われる。加えて、肉厚の坏（坏A）や小型の皿が多くみられるようになる。また、柱状台付皿（柱状台付皿B・C）がみられる。灰釉は、丸石２号窯式期のものがみられる。

第２１期：資料が少なく詳細は不明であるが、小型の皿・柱状台付皿（柱状台付皿B）がみられる。

3　古墳時代の土器変遷概要

資料数が多く、主要な器種である土師器の甕・小型甕・壷・高坏・坏を中心に古墳時代における土器の変遷をまとめておく。甕は、中期的な甕Aが第１期までみられる。甕Dは、古墳時代後期（第２期～第９期）をとおしてみられる。甕Eは、６世紀代（第２期～第６期）を中心としてみられる。小型甕は、資料の制約はあるが、甕D・甕Eが出現した後に小型甕A・小型甕Bが出現すると思われる。壷は、古墳時代後期を通してほとんど変わらない。中期的な壷A２aは第１期で消える。高坏は、坏に歩調を合わせるように、坏部の形態が変化する。また、丸底で半球形の形態のもの（坏A・坏B・坏C）と直線的に開く体部をもつもの（坏Ⅰ）を坏部にしたものは、古墳時代後期をとおしてみられる。坏は、丸底で半球形の形態のもの（坏A・坏B・坏C）と直線的に開く体部をもつもの（坏Ⅰ）は、古墳時代後期をとおしてみられる。中期的な坏Eは、６世紀の中頃（第４期）に姿を消す。須恵器を模倣した坏は６世紀代から７世紀前半（第２期～第８期）にかけて盛行する。

なお、国分寺周辺遺跡群新幹線地点（第１期～第９期）・宮平遺跡（第６期～第８期）の竪穴住居跡土器についても土器分類を行い、土器変遷表を作成してみたが、法楽寺遺跡のものと同様の変遷がみられた。

4　奈良・平安時代の土器変遷概要

主要な器種である土師器の甕・小型甕・坏を中心にして、奈良・平安時代の土器の変遷をまとめておく。甕は、古墳時代からの伝統をもった甕Aが第１１期までみられる。器厚を薄く仕上げた甕Cは、第１１期～第１７期までみられる。ロクロ調整をおこなった甕Dは、第１６期からみられる。これは、上小地方の資料をみると第２０期までみられると思われる。羽釜は、第１８期からみられる。これは、上小地方の資料をみると第１７期からみられるようである。甕Aを小型にした小型甕Aは、第１０期～第１３期にかけてみられる。また、小型甕Aで器面をヘラで撫でたものが第１８期～第２０期にかけてみられるようになる。甕Cを小型にした小型甕Cは、第１２期～第１７期までみられる。ロクロ調整をおこなった小型甕Dは、第１３期～第１８期までみられる。坏は、古墳時代後期から続く丸底のもの（黒色土器Aの坏B）が、第１１期～第１２期までみられる。平底のものは、第１２期からみられ、第１３期には坏の中心的な形態となる。平底のものには、黒色処理がほどこされたものと黒色処理がほどこされないものがある。内黒で平底のもの（黒色土器Aの坏A）は、第１３期に坏の中心となる。また、第１４期には黒色処理が施されないものはみられなくなるが、第１６期に再び現れるようになる。須恵器は、第１７期にはみられなくなる。灰釉陶器は、第１５期にみられるようになる。

5　実年代の想定

土器変遷図の各期における実年代の想定は、土器の変化と須恵器・灰釉に頼りながら行った。

第１期：５世紀中葉～後葉・第２期：５世紀後葉～６世紀初頭・第３期：６世紀前葉・第４期：６世紀中葉・第５期：６世紀後葉・第６期：７世紀前葉・第７期：７世紀中葉・第８期：７世紀後葉・第９期：７世紀末～８世紀初頭とした。これらを、古墳時代と考えた。

第１０期：８世紀第１四半期～第２四半期・第１１期：８世紀第２四半期～第３四半期・第１２期：８世紀第３四半期～第４四半期・第１３期：８世紀末～９世紀初頭・第１４期：９世紀第１四半期～第２四半期・第１５

期：９世紀第３四半期～第４四半期・第１６期：９世紀第４四半期・第１７期：１０世紀第１四半期・第１８期：１０世紀第２四半期～第３四半期・第１９期：１０世紀第４四半期・第２０期：１１世紀第１四半期・第２１期：１１世紀第２四半期～第３四半期とした。これらを、奈良・平安時代以降と考えた。

６　おわりに

法楽寺遺跡の竪穴住居跡から出土した一括性の高い土器を中心にして、土器変遷をみてきた。しかし、全ての器種・器形が揃っている訳ではなく、土器様相を十分に捉えられていない部分もある。今後、上小地方の土器様相を構築するなかでの検証が必要となってくると思われる。また、参考・引用させていただいた論考や編年についても筆者の取り違えている部分もあると思われる。そのため、矛盾や誤解が生じている場合もあると思われる。大方のご教示・ご叱正をお願いしたい。

＜参考・引用文献＞

尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（1）」『上沖遺跡』１９９８上田市教育委員会

尾見智志「上小地方の奈良・平安時代の土器について（2）」『駕籠田遺跡』１９９９上田市教育委員会

（財）長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財報告書４－総論編－』１９９０

千野浩『本村東沖遺跡』１９９３長野市教育委員会

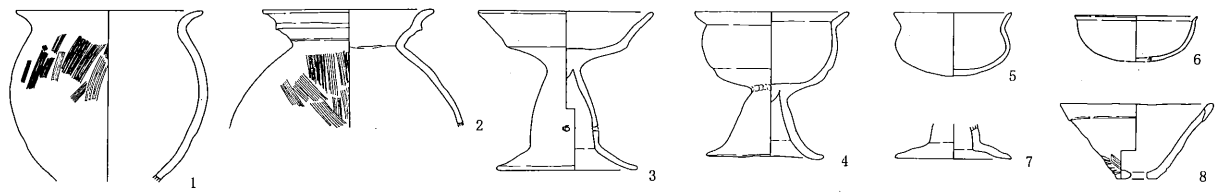
東国土器研究会『東国土器研究第４号東国における律令制成立までの土器様相とその歴史的動向』１９９５

東国土器研究会『東国土器研究第５号東国における古墳時代中期の土器様相と諸問題』１９９９

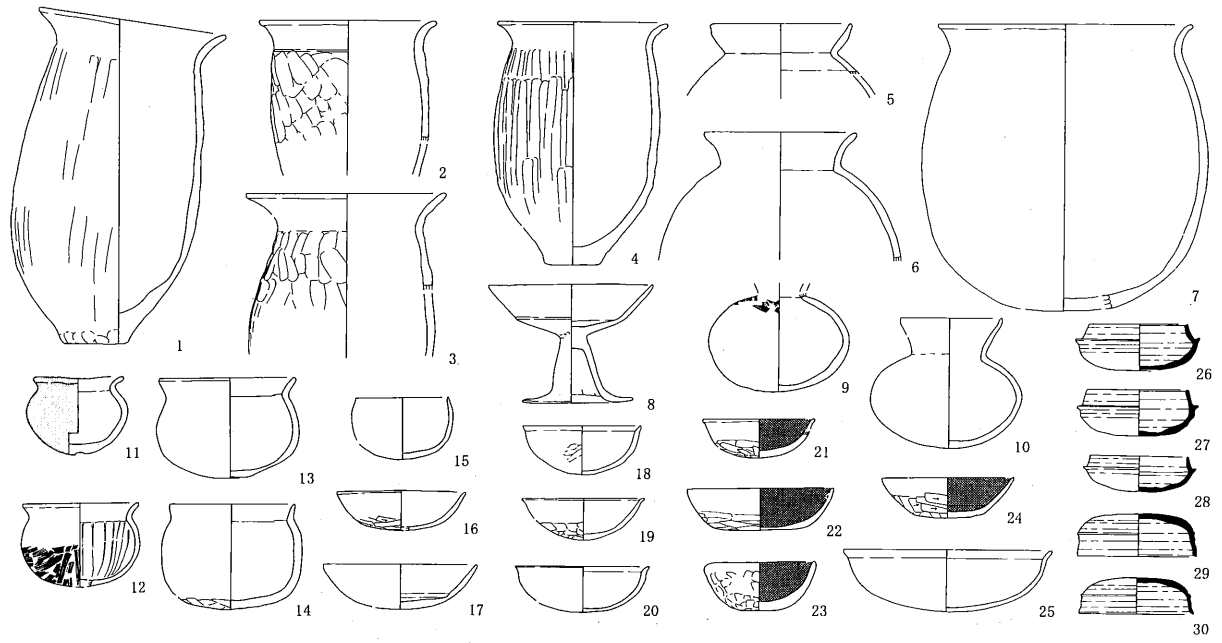
西沢浩他『高呂添遺跡・井高遺跡』１９８９東部町教育委員会

柳沢亮「第３章第１節国分寺周辺遺跡群」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書２』１９９８（財）長野県埋蔵文化財センター

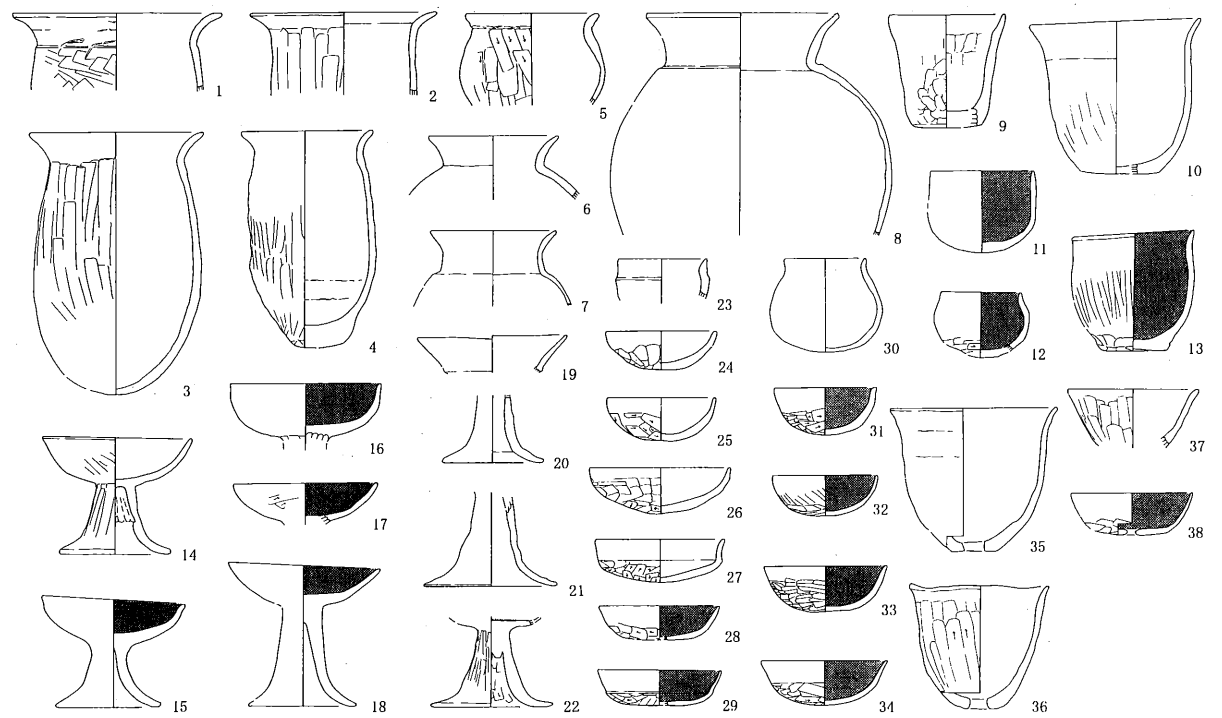
若林卓他「第６章宮平遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２１』１９９９（財）長野県埋蔵文化財センター



1期



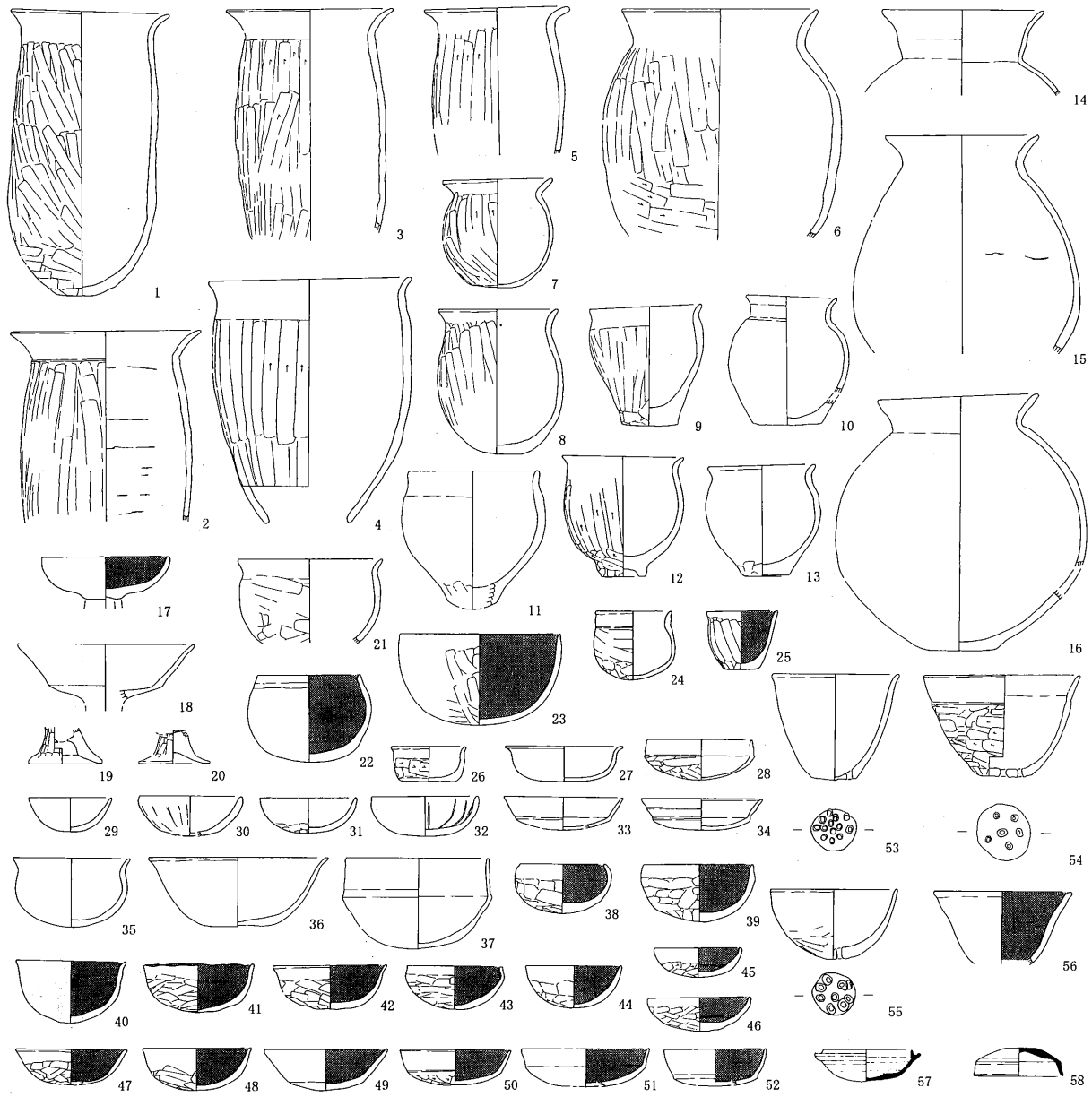
2期



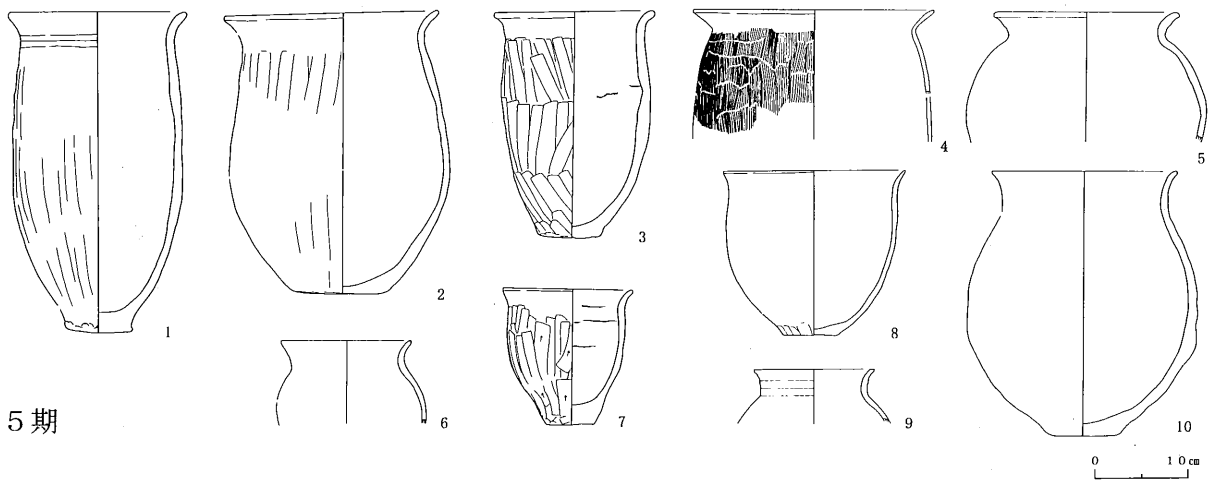
3期

0　10cm

第1図　法楽寺遺跡における土器変遷図①

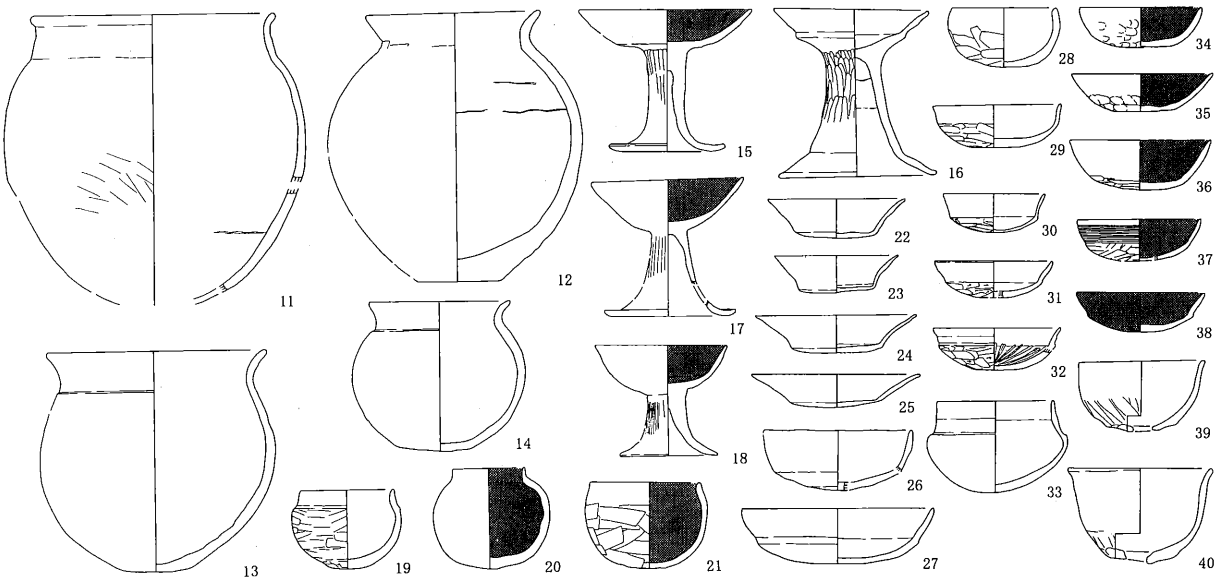


4期

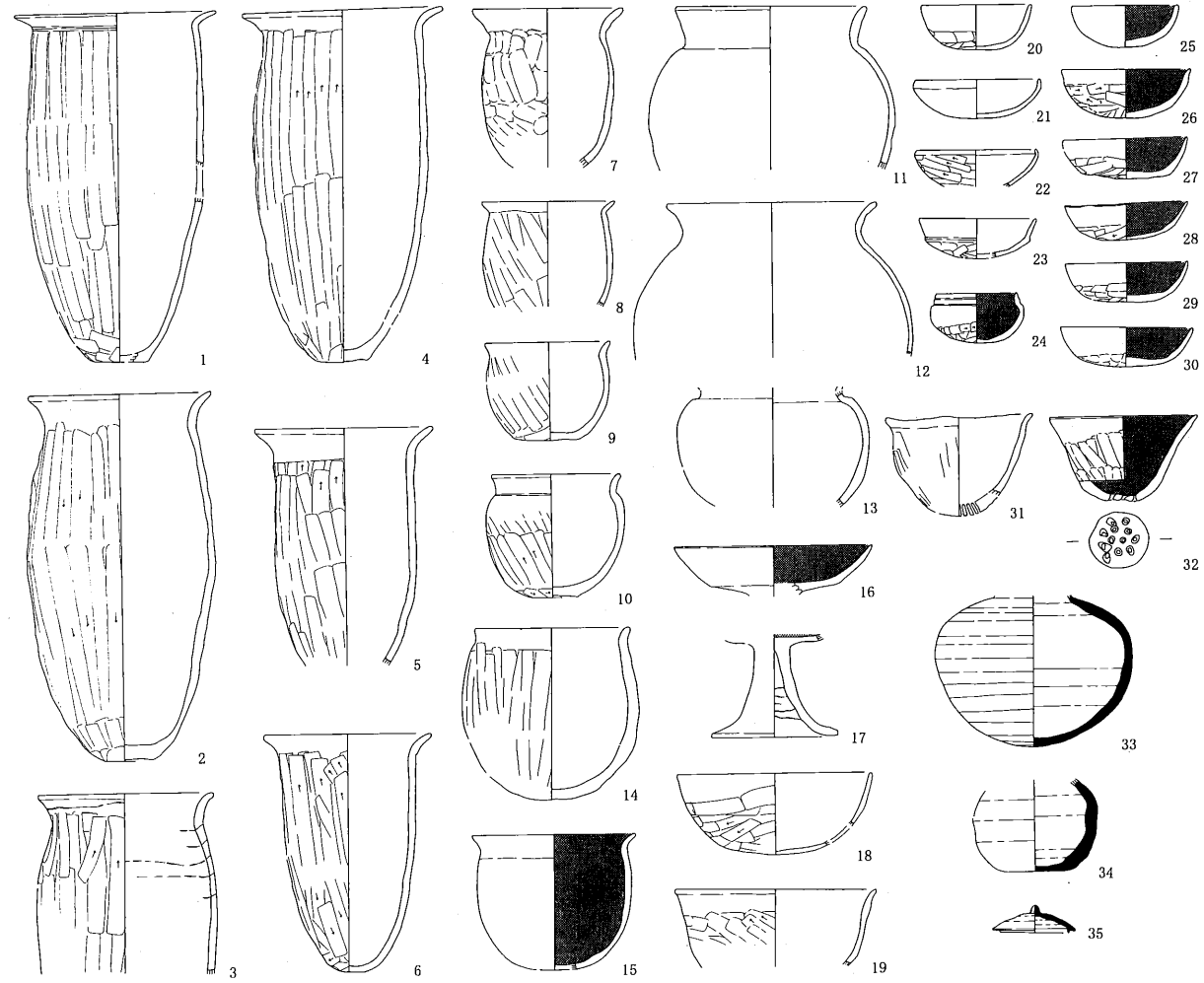


5期

第2図　法楽寺遺跡における土器変遷図②



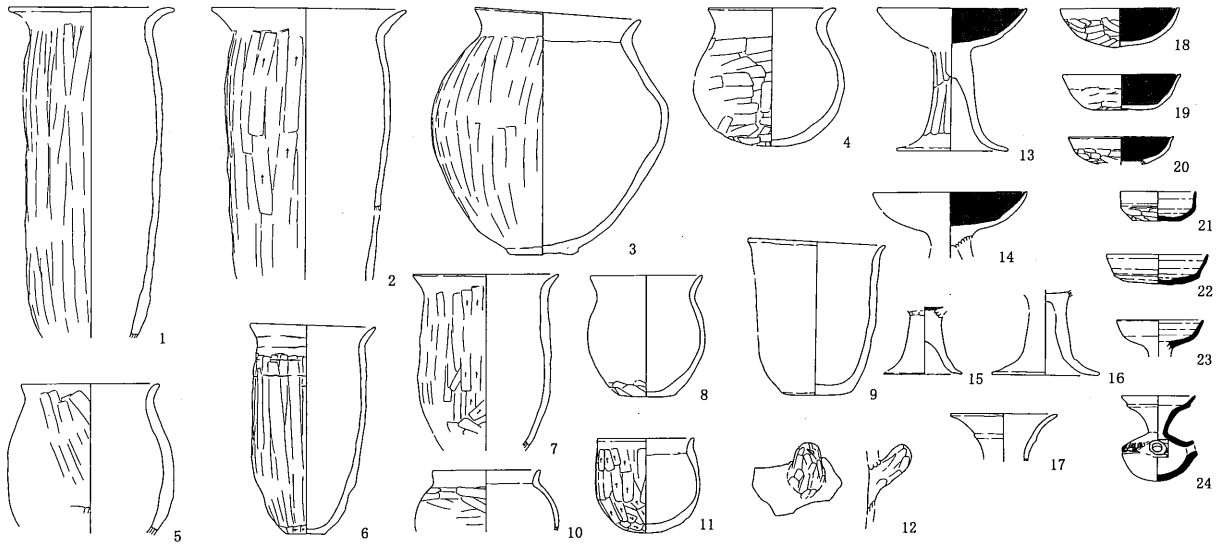
5期



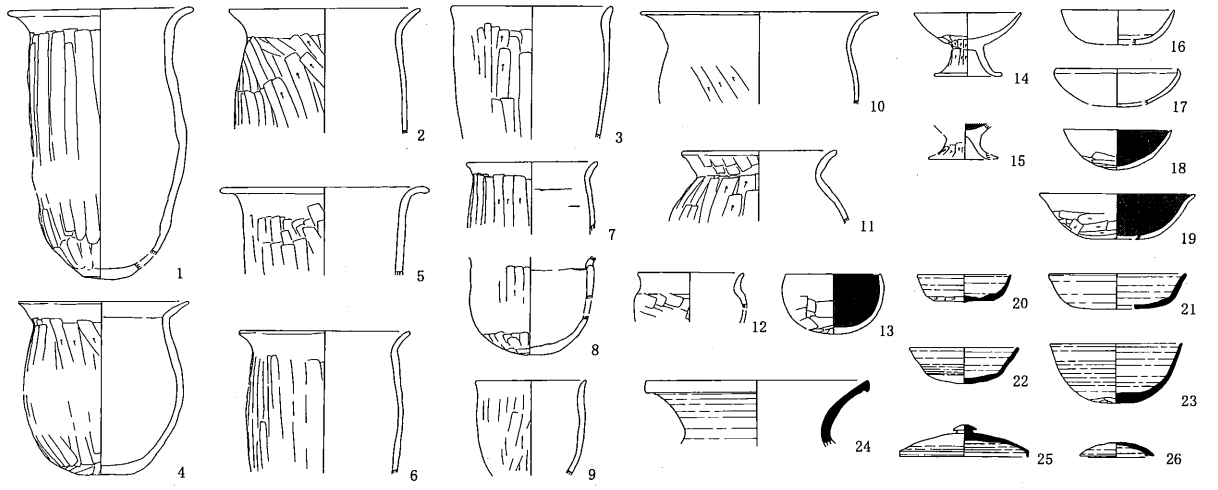
6期

0　10cm

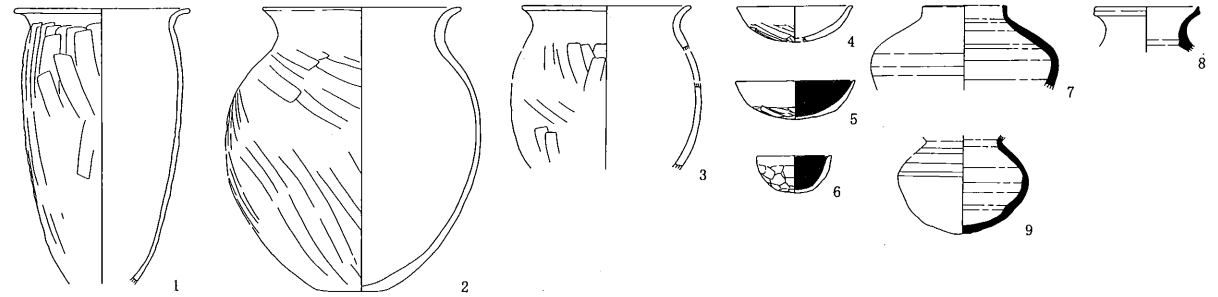
第3図　法楽寺遺跡における土器変遷図③



7期



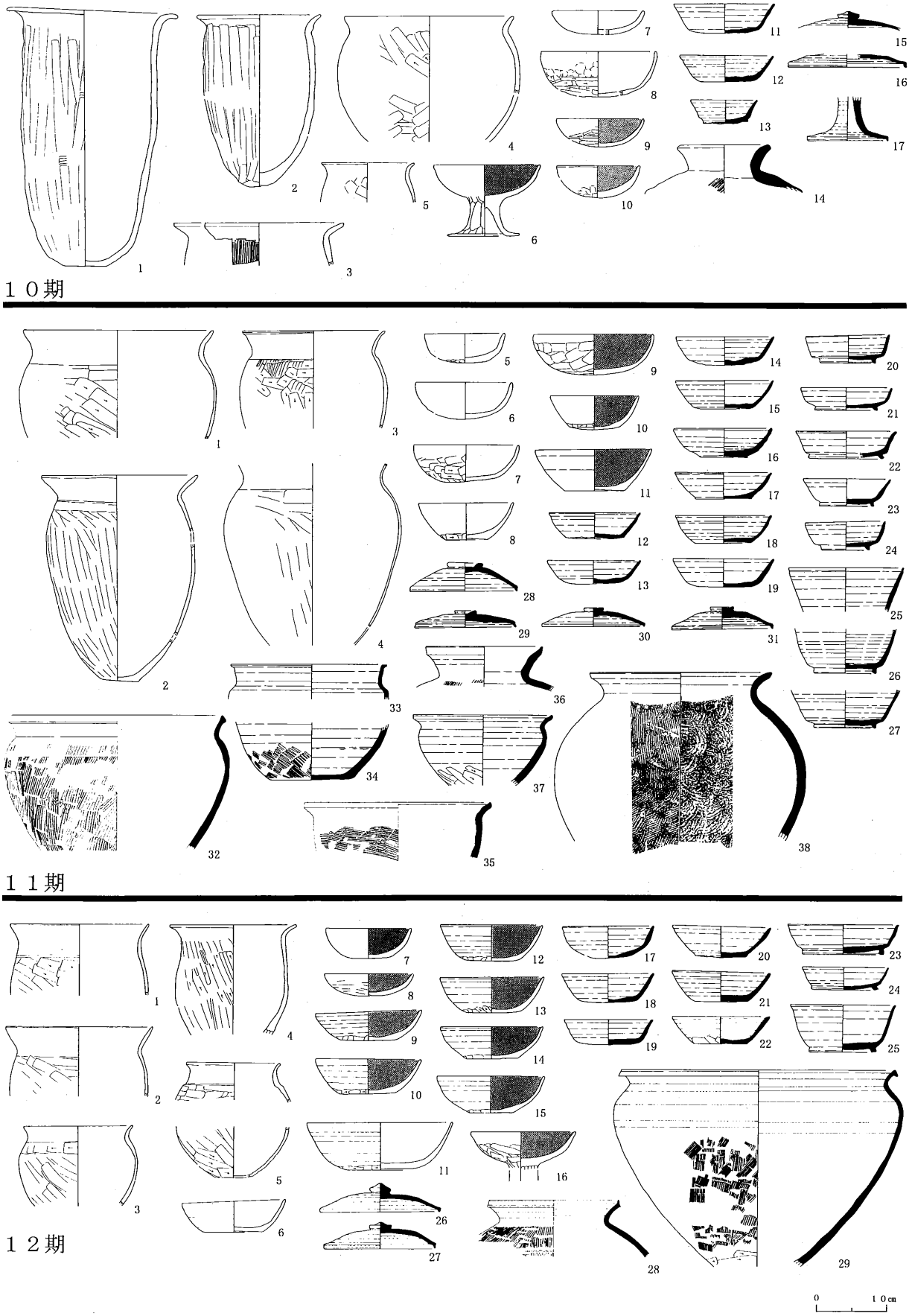
8期



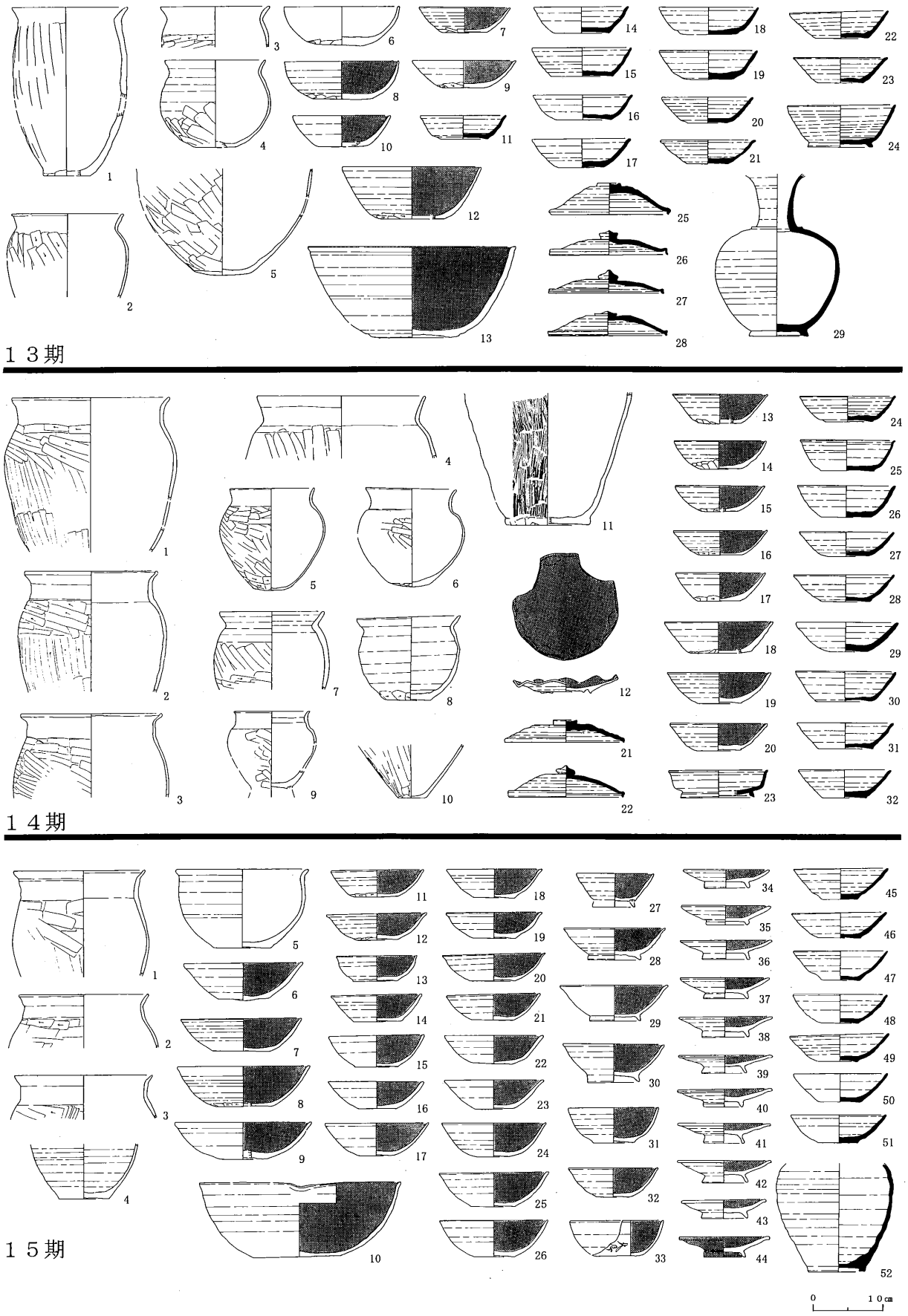
9期

0　10cm

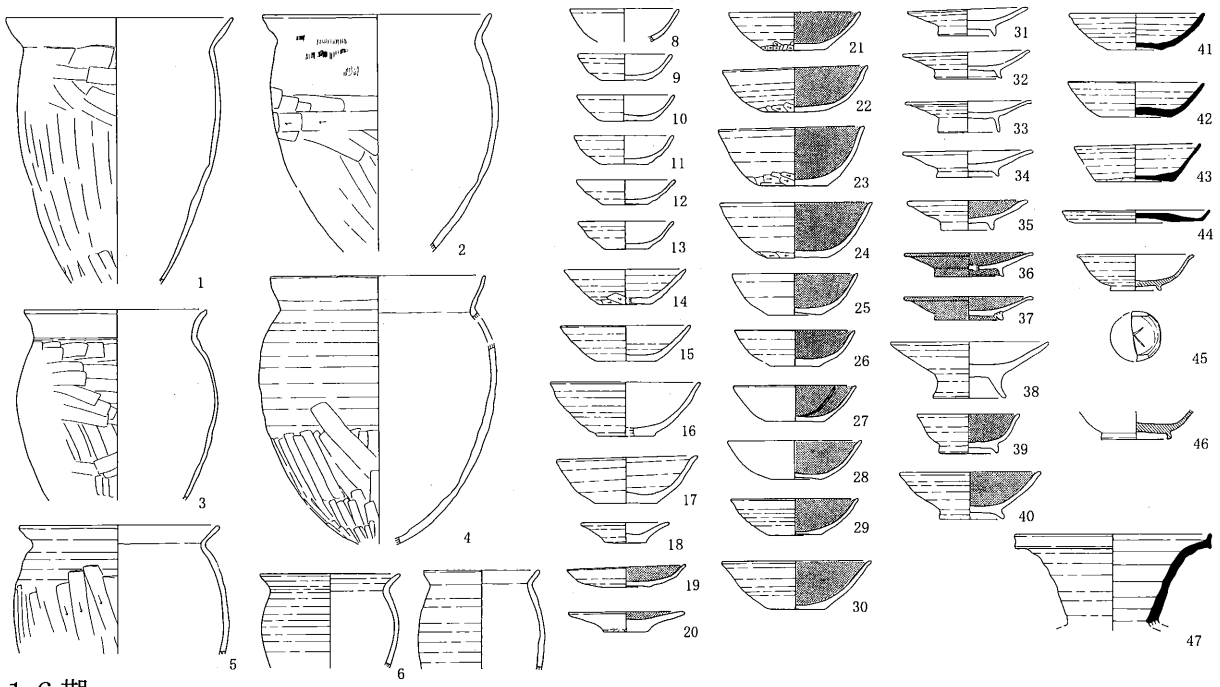
第４図　法楽寺遺跡における土器変遷図④



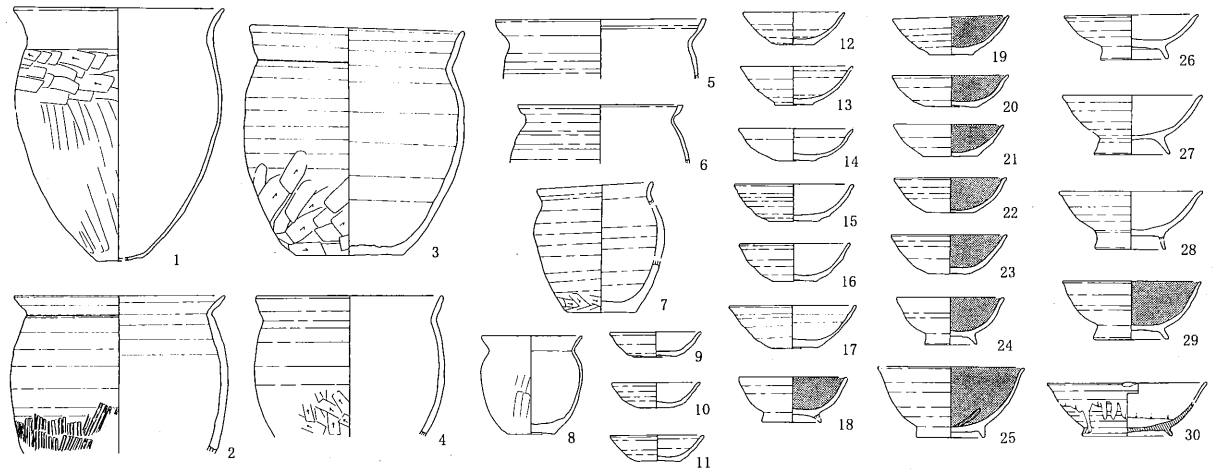
第５図　法楽寺遺跡における土器変遷図⑤



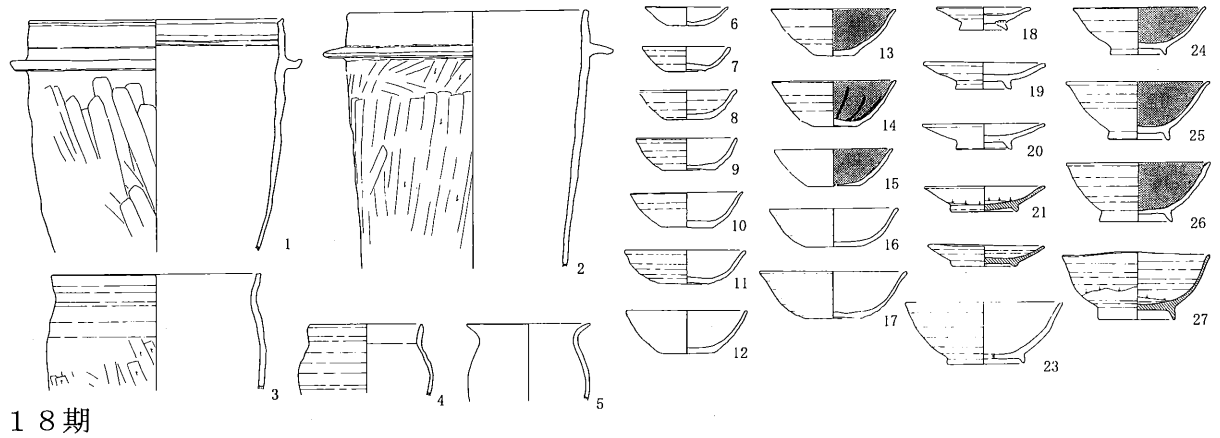
第６図　法楽寺遺跡における土器変遷図⑥



１６期



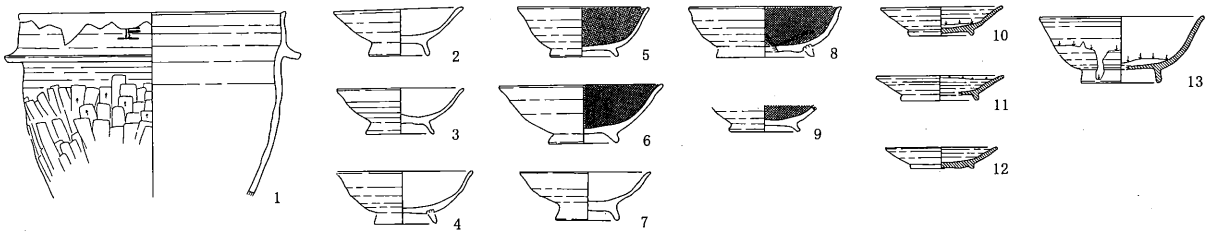
１７期



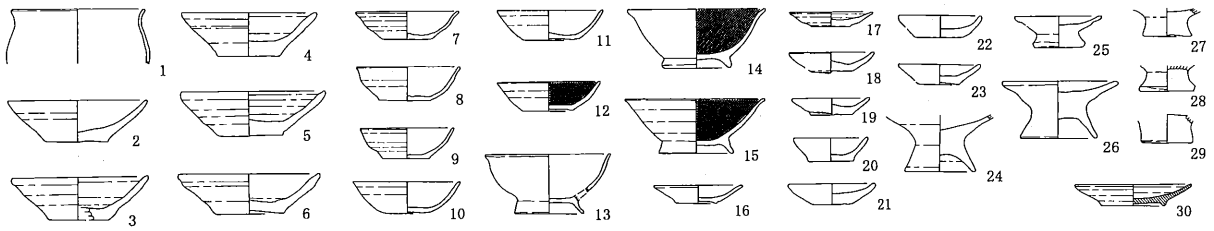
１８期

0　10cm

第７図　法楽寺遺跡における土器変遷図⑦



１９期



２０期

２１期

0　10cm

1期	SB131 (1, 2, 3, 4, 7, 8)・SB470 (5, 6)
2期	SB31 (2, 3, 7, 12, 16, 21, 22, 23)・SB64 (5, 6, 10, 11, 17, 24, 25)・SB461 (1, 4, 9, 13, 14, 15, 20, 26, 27, 28, 29, 30)・SB521 (8, 18, 19)
3期	SB41 (14, 27, 36)・SB147 (4, 8, 9, 21, 29, 35)・SB188 (24, 25, 31, 34)・SB338 (1, 2, 5, 6, 15, 16, 17, 18, 20, 22, 23, 26, 32, 33, 37)・SB501 (3, 7, 10, 11, 12, 13, 19, 28, 30, 38)
4期	SB14 (14, 18, 27, 35, 40, 57)・SB16 (9, 11, 21, 28, 29, 34, 36, 37, 49)・SB41 (48)・SB292 (1, 2, 3, 6, 8, 10, 20, 23, 26, 38, 45, 46, 50, 54)・SB386 (4, 5, 7, 12, 16, 33, 47, 51, 52)・ SB413 (13, 15, 17, 19, 22, 24, 25, 30, 31, 32, 39, 41, 42, 43, 44, 53, 55, 56, 58)
5期	SB43 (4, 5, 9, 26, 29, 32)・SB129 (6, 8, 22, 23, 24, 25)・SB415 (1, 3, 7, 10, 11, 12, 16, 19, 20, 21, 33, 35, 39, 40)・SB452 (2, 13, 14, 27, 34, 37)・SB476 (15, 28, 36, 38) SB529 (17, 18, 30, 31)
6期	SB02 (1, 8, 9, 18, 20, 33)・SB04 (5, 10, 13, 16, 27, 28, 31)・SB183 (2, 4, 7, 11, 15, 17, 19, 23, 24, 29, 30, 32, 34)・SB304 (3, 6, 12, 14, 21, 22, 25, 26, 35)
7期	SB249 (4, 5, 7, 8, 9, 13, 14, 15, 19, 21, 23)・SB273 (22)・SB345 (1, 2, 3, 6, 10, 11, 12, 16, 17, 24)・SB349 (18, 20)
8期	SB434 (2)・SB439 (1, 3, 6, 8, 11, 13, 17, 21, 24, 25, 26)・SB478 (4, 5, 7, 12, 18, 23)・SB510 (9, 16, 19, 20)・SB523 (10, 14, 15, 22)
9期	SB410 (7)・SB480 (1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9)

10期	SB270 (4, 5, 9, 10, 14, 15, 16, 17)・SB374 (3, 7, 13)・SB511 (1, 2, 8, 11)・SK04 (6, 12)
11期	SB05 (4, 10, 11, 15)・SB17 (1, 16, 17, 26, 27)・SB260 (3, 5, 12, 20)・SB340 (13, 21, 25 29, 30, 31, 34, 36)・SB393 (6, 22, 32, 33, 35, 37)・SB428 (8, 18, 19, 24)・SB460 (2, 9, 14, 38)・SB549 (7, 23, 28)
12期	SB379 (1, 6, 9, 10, 11, 12, 13, 23, 25, 27, 28)・SB533 (7, 20, 22)・SB539 (4, 5, 14, 15, 21, 29)・SB552 (2, 3, 8, 16, 17, 18, 19, 24, 26)
13期	SB108 (5, 7, 11, 22, 24)・SB133 (3, 12, 14, 15, 16, 26)・SB408 (9, 17, 20, 25, 29)・SB414 (2, 4, 18, 28)・SB475 (6, 8, 13)・SB527 (1, 10, 19, 21, 23, 27)
14期	SB100 (6, 9, 11, 18, 21, 24, 31)・SB154 (22, 23, 25, 26, 30)・SB155 (8, 13, 14, 19, 20, 29)・SB377 (1, 2, 3, 4, 10, 15, 16, 17, 28)・SB402 (7, 12)・SB431 (5, 27, 32)
15期	SB91 (11, 13, 14, 21, 25, 26, 28, 29, 33, 34, 35, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49)・SB112 (1, 3, 6, 12, 13, 27, 52)・SB161 (17, 24, 30, 31, 32, 50) ・SB422 (2, 9, 22) SB481 (4, 5, 7, 8, 10, 15, 16, 18, 19, 20, 36, 51)
16期	SB403 (25, 28, 34, 35, 36, 41)・SB409 (1, 2, 4, 5)・SB411 (3, 7, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 27, 29, 30, 31, 32, 33, 37, 38, 40, 45, 46, 47)・SB420 (6, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 39, 43, 44)・SB483 (14, 15, 26, 42)
17期	SB07 (2, 3, 12, 13, 14, 19, 20, 21)・SB141 (1, 8, 9, 10, 11, 15, 16, 26, 29)・SB175 (5, 6, 17, 22, 23)・SB317 (4, 7, 18, 24, 25, 27, 30)・SB400 (28)
18期	SB09 (5, 6, 8, 18)・SB94 (1, 9, 14, 22)・SB97 (3, 4, 10, 13, 15, 19, 20, 23, 24, 25,)・SB98 (2, 7, 11, 21, 26, 27)・SB372 (12, 16, 17)
19期	SB312 (2, 6, 10, 11)・SB343 (1, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 12, 13)
20期	SB95 (1, 7, 8, 9, 12, 13, 15)・SB362 (14, 16, 24, 25)・SB372 (26)・SB486 (10, 11, 30)・SD03 (3, 4, 5, 6, 17, 18, 19, 20, 28, 29)・D5 (2, 21, 22, 23, 27)
21期	グリットD4 (1, 2, 3)

第８図　法楽寺遺跡における土器変遷図⑧

古墳時代

<土師器>

	甕						小型甕					壺								
1期	A											A2a								
2期			D		E2										A3b	B			G	H
3期			D		E2			B	C	D			A1b		A3b			F		
4期			D	E1	E2	E3	A	B	C				A1b	A2b	A3b		D	F		
5期		C	D	E1	E2		A	B		D	E		A1b		A3b	B	D	F		
6期			D		E2		A		C	D	E		A1b		A3b					
7期			D					B	C		E							F		
8期			D				A	B	C	D	E		A1b		A3b					
9期			D																	

	鉢				高坏							
1期	A					C		E				
2期	A		C							G		
3期			C				D	E			I	
4期	A	B	C	D							I	
5期		B	C	D	A						I	H
6期	A	B						E				
7期											I	
8期			C						F			
9期												

	坏																				
1期								E													
2期	A1			B1		C		E			I1										
3期	A1		A3		B3				F		I1		J1			K		M	O	P	
4期	A1	A2	A3	B1	B3	C	D	E	F		I1	I2	J1	J2	J3	K		M			Q
5期	A1		A3			C					I1		J1	J2				M	O	P	
6期			A3		B3	C				G	I1					K	L	M		P	
7期			A3			C					I1										
8期	A1		A3	B1	B3	C					I1						L				
9期				B1							I1	I2									

奈良・平安時代

<土師器>

	甕					小型甕			高坏	盤	羽釜	鉢	皿	柱状台付皿			坏			
10期	A	B			F	A			I2									D	E	
11期	A		C														A	D		
12期			C			A	C					A					A			
13期			C			A	C	D									A			
14期		B	C				C	D												
15期			C					D				A								
16期			C	D				D		B			A	A			A			
17期			C	D			C	D									A			
18期				D		A		D		B	A		A				A			
19期										B	A									
20期						A							A		B	C	A			
21期													A		B					

<黒色土器A>

	鉢	皿		坏		
10期					B	
11期				A		
12期				A		E
13期	A			A		
14期			B	A		
15期	A		B	A		
16期		A	B	A		
17期				A		
18期				A		
19期						
20期				A		
21期						

<黒色土器B>

	皿	坏
10期		
11期		E
12期		
13期		
14期		
15期	B	
16期	B	
17期		
18期		
19期		
20期		
21期		

<須恵器>

	甕			皿	壺		鉢	蓋	坏		
10期						D		B	A	B	C
11期	C		E				A	B	A	B	C
12期	C		E					B	A	B	
13期					A			B	A	B	C
14期								B	A	B	
15期					A				A		
16期		D		A					A		
17期											
18期											
19期											
20期											
21期											

表１　法楽寺遺跡の土器変遷表（※器種ごとの記号は、土器分類表の記号に対応する）

附論２　法楽寺遺跡出土の銅印・金銅三尊仏・銅製磬について

倉沢　正幸

１　銅印

法楽寺遺跡の第１７号溝跡覆土中から出土した銅印（第１図）は、印面の大きさが縦２．８㎝、横２．８㎝、高さ２．８㎝、重さ３５．８ｇで、一部が腐食のため欠損しているが、ほぼ完全な形で検出された。出土した溝状遺構からは１０世紀代の遺物が出土しており、本銅印は１０世紀代の資料と位置付けられる。四角な印面には、四文字が鋳出されていた。

そのため、平成１２年２月２日に国立歴史民俗博物館の平川南教授（現在、同博物館副館長）・永嶋正春助教授に文字の解読・銅印の化学分析の調査を依頼し、ご教示をいただいた。この調査結果については、平川南氏が「長野県内出土・伝世の古代印の再検討」（『長野県考古学会誌　99・100号』長野県考古学会 2002年）で詳細に考察されている。この考察によると、本銅印は、「宍□私印」と判読でき、□は「来」または「未」の文字とされている。この四文字は、「ウジの頭文字＋名の頭文字＋私印」とされ、ウジの頭文字「宍」は、「宍人部」の頭文字と考察されている。宍人部については、『日本書紀』の雄略天皇二年十月条に狩の鳥獣を調整するために宍人を置いたとある。また、千曲市の屋代遺跡群から出土している７世紀末の第１３号木簡にも「宍人部」・「宍部」といった部姓がみられることが指摘されている。「宍人部」は文献史料によると大和・山背（山城）・駿河・伊豆・武蔵・越前・伯耆などの諸国にみられるとされている。平川氏は、屋代遺跡群出土の木簡にみられる「宍人部」は宮廷で鳥獣の肉の調理に携わった宍人の資養を負担する部と考察されている。また、信濃国は『延喜式』や『藤原宮木簡』によると、調庸物や交易雑物などの名目で鳥獣の肉や皮を貢進していた事が知られると指摘されている。さらに、古代の信濃国には鳥獣肉の貢納に従事する民が広く分布し、埴科郡内の屋代遺跡群出土木簡・小縣郡内の本銅印の出土によって、宍人・宍人部（宍部）が両郡内にも分布したことを証明できると考察されている。また、永嶋正春氏によるＸ線透過検査・蛍光Ｘ線分析によって、銅（Ｃｕ）を１００として、ヒ素（Ａｓ）4.0・鉛（Ｐｂ）1.0・銀（Ａｇ）0.25・錫（Ｓｎ）0.10・ビスマス（Ｂｉ）0.25・アンチモン（Ｓｂ）0.15 の成分である事が判明し、古代の銅印の範疇に入る資料であることが自然科学的調査によっても確認されている。

前述したとおり、銅印の「宍」の文字については食用の獣肉をさし、特に食肉のために捕獲する猪（いのしし）・鹿（かのしし）の肉をさすとされている。上田市内では、史跡信濃国分寺跡に包含される明神前遺跡より「宍」（第２図５）と判読される墨書土器が１点出土している。（上田市教育委員会『上田市文化財調査報告書第８５集市内遺跡　平成１２年度市内遺跡発掘調査報告書』2001年）この墨書土器は、史跡信濃国分寺跡の個人住宅改築による現状変更申請に伴う試掘調査で出土した。調査面積は２００㎡で、古墳時代後期と平安時代前半と思われる竪穴住居跡が５軒検出された。出土した墨書土器は、口径１６．０㎝（推定）・器高５．０㎝・底径６．４㎝で、内面に黒色処理が施された土師器の体部外面に正位で「宍」と書かれている。底部は回転糸切りの後、篦調整され内面は丁寧な篦磨きが施されている。その形態から９世紀末～１０世紀初頭に位置付けられる資料とみられる。この「宍」の資料の他に、「北」（第２図３）・「中」（第２図４）・「仲」（第２図８）・「□□舟□」（第２図７）の墨書土器が出土している。さらに、「完」・「宍」・「閲」のいずれかの文字とみられる墨書が施された土器（第２図６）も出土している。

平成１２年度の明神前遺跡調査地点（第３図）は、尼寺跡の北西側に隣接しており、昭和４６年の調査地点から南西側に約３０ｍ離れているが、両者は一体の遺跡と考えられる。昭和４６年の調査（上田市教育委員会『信濃国分寺 -本編- 』吉川弘文館 1974年）でも「仲」・「舟」・「講院」・「子」・「寶」・「人」・「仙」・「八」・「八千」と墨書が施された土器が出土し、平成１２年に出土した「仲」・「□□舟□」と墨書が施された土器との共通性が注目される。明神前遺跡の性格については、昭和４６年の調査でタタラ跡や鞴の羽口・鉄滓・釘・鎌・鍬先などが

出土し、鍛冶工房跡の存在が推定されている。この場所は、国分寺営繕施設の修理院などの可能性が考えられ、信濃国分寺の付属施設の一部と推測される。昭和４６年の調査では竪穴式建物跡９軒・カマド７基・焼土層４ヶ所が検出され、出土した土師器・灰釉陶器などから９世紀後半～１０世紀前半に位置付けられる遺構と推定されている。なお、昭和５１年には８世紀後葉の竪穴住居跡１軒、昭和６３年には１０世紀代の竪穴住居跡２軒が確認されている。こうした遺構がみられる明神前遺跡から「宍」と書かれた墨書土器が出土したことは、宍部・宍人部との関わり・法楽寺遺跡との関係などの重要な検討課題を含んでいる。

さて、猪・鹿に関係する事象をみると、法楽寺遺跡から南西方向約２kmの地点の黒坪地区には、「猪」の地字名がある。この「猪」の字の地区からほぼ真北方向に「猪堰」が通じ、条里的水田遺構がこの付近にみられる。（上田市教育委員会『条里遺構分布調査概報 -神川東部地区・浦野川地区- 』1976 年）この条里的水田遺構の構築時期は古代あるいは中世とされ明確ではないが、「猪」という地字名は注意が必要である。また、鹿については、丸子町腰越の国史跡の鳥羽山洞穴遺跡から、鹿角製紡錘車・鹿角製鳴鏑・鹿角装刀子・鹿角装剣が出土している。伴出した土師器・須恵器から古墳時代の５世紀代の資料（永峯光一「鳥羽山洞穴遺跡」『長野県史考古資料編　主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会 1982 年）とみられ、古墳時代における鹿との関わりが窺える。上田・小県地方では、近年でも山沿いの集落では猪や鹿による作物への食害が知られている。本地方でも、『延喜式』の調庸物などの記載の様に、奈良・平安時代には多数の猪・鹿が生息しており、宍人や宍人部・宍部と深い関わりがあったと推測される。さらに本遺跡からは明確な獣骨だけでも３８ヶ所から出土し、他の遺跡に比べて出土数が多いと指摘されており、今後の検討が必要とされている。

長野県内では、長野市篠ノ井塩崎の篠ノ井遺跡群出土の「大半（伴？）□□」印（９世紀前半）・松本市三間沢川左岸遺跡出土の「長良私印」印（９世紀後半）・千曲市更埴条里遺跡出土の「王強私印」印（９世紀後半～１０世紀初頭）・南佐久郡臼田町清川出土の「物部楮丸」印・諏訪大社下社伝世の「賣神祝印」印の５例の銅印（国立歴史民俗博物館『同館研究報告７９　日本古代印の基礎的研究』1999 年）が知られており、本銅印を含めると６例目となる。所属時期の判明している銅印は、いずれも９世紀～１０世紀代の平安時代前半の資料である。なお、厳しい管理のもとに鋳造された公印に対して比較的自由に製作することのできた私印の印章鋳型が、埼玉県花園町の台耕地遺跡・千葉県千葉市の谷津遺跡・群馬県前橋市および群馬町の国分僧寺尼寺中間地域遺跡から出土（田路正幸「考古資料としての古代銅印について」『国立歴史民俗博物館研究報告７９』1999 年）し、有力者の存在した集落内の鋳物師工房でも鋳造されたことが確認されている。桐原健氏は篠ノ井遺跡群出土の「岑」の刻書・墨書土器の分析や松本市下神遺跡の則天文字の検討などから自墾地系荘園形成の基礎づくりを行った「富豪の輩」が私印を所有し、私印の所有者を集落内の有力者と推察している。従来、私印の価値については過大評価される傾向が強かったが、径１５０m程の圏内で２０軒前後のグループの長でも私印を鋳造して使用することができたとする桐原氏の考察（桐原健「古代信濃の私印所有者」『信濃』第５５巻１１号 2003 年）は、この法楽寺遺跡の銅印の事例にも適合すると考えられる。

２　金銅三尊仏

法楽寺遺跡から出土した金銅三尊仏（第４図）の出土地点は不明である。これは、極めて小さな小金銅仏で、中央に宝冠を付けた阿弥陀如来座像・向かって右側に観音菩薩立像・左側に勢至菩薩立像を配した三尊仏である。三尊仏の総高７．１cm・総幅８．７cmである。中尊の阿弥陀如来座像の法量は総高７．１cm・像高４．１cm・台座高３．０cm・面長０．８cm・頭頂から顎までが１．８cmである。この座像は土中への埋没による摩耗や錆の付着が著しく、像容は判然としない。向かって右側の観音菩薩立像は総高４．３cm・像高３．９cm・台座高０．４cm・頭頂から顎までが０．９cmで、左側の勢至菩薩立像も同一の大きさで両像とも摩耗や錆の付着が著しく、像容は判然としない。中央に位置する阿弥陀如来座像の框座の両脇から直径０．６cmの蓮茎が伸び、両脇侍の台座を支えている。阿弥陀如来座像の框座の底部法量は、奥行３．６cm・幅４．４cm、台座の法量は奥行３．１cm・幅３．５cmである。ま

た両脇侍の台座の法量は奥行・幅共に１．５cmである。阿弥陀如来座像は、腹部の前で定印を結び、結跏趺座している。袈裟は左肩を覆っており、右肩をあらわしたいわゆる偏袒右肩の姿である。三尊仏全体の重量は１９７．８ｇで、表面には鍍金が施された小金銅仏である。その形状から、前後合わせ型の一鋳造りと考えられる。

こうした小金銅仏は、７世紀後半の白鳳時代から平安時代まで、全国で２１０点ほどが確認されている。これらの中では、釈迦如来像と阿弥陀如来像が多く全体のほぼ四割を占める。阿弥陀如来像は１１世紀～１２世紀の平安時代後期に多数製作されている。（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『古代の誕生仏』1978 年・埼玉県立博物館『甦る光彩　関東の出土金銅仏』1993 年・大嶌正之「平安時代末期の小金銅仏」『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会 1999 年）これらのうち、本三尊仏と極めて共通性が高いと思われる宝冠阿弥陀如来座像として、和歌山県那智勝浦町の那智経塚出土座像・山梨県敷島町の松ノ尾遺跡出土座像があげられる。那智経塚出土宝冠阿弥陀如来座像（奈良国立博物館『山岳信仰の遺宝』1985 年）は、平安時代の１２世紀の資料とされている。脇侍の観音菩薩立像が残存した資料（東京国立博物館蔵）と中央の阿弥陀如来座像のみが残存した資料（熊野那智大社蔵）に本三尊仏との共通性が高い。松ノ尾遺跡出土宝冠阿弥陀如来座像（大嶌正之『松ノ尾遺跡』敷島町教育委員会 1996 年）は２体出土している。このうち第２号の仏像は、総高７．２cm・像高４．１cmで、法楽寺遺跡出土の中尊の法量とほぼ同一であり像容も近似している。この像は中尊のみであるが台座の框の両脇部には欠損が認められ、その形状より本来は一茎三尊形式の阿弥陀三尊像であったと推察されている。両像とも、出土状況や製作技術などから１１世紀末～１２世紀初頭の資料とされている。

長野県内の三尊形式の小仏像としては、長野市松代町の個人所蔵の宝冠阿弥陀如来座像、松本市平瀬遺跡出土の平安時代の銅製三尊仏（澤柳秀利他『平瀬遺跡Ⅱ』松本市教育委員会 2000 年）などの事例がある。長野市の仏像は像高が８cmで、台座の裏面に建久二年（１１９１）八月の銘がある。（長野市立博物館 『古代・中世人の祈り －善光寺信仰と北信濃－ 』1997 年）その形状をみると現在は中尊のみであるが、本来は一茎三尊形式の宝冠阿弥陀如来座像であったと推定されている。この資料は信濃国分寺資料館の平成１５年特別展「上田・小県地方の山岳信仰」に出品されている。その際に計測がなされ、像高８．０cm・頭頂から顎までが３．０cm・首から膝までが３．４cm・台座高１．６cmであった。頭部は宝冠部高１．６cm・面長１．４cm・面幅１．６cm・肩幅２．９cmであった。所蔵者の家はかつて修験に関係していたとされている。像容は摩耗などで判然としないが、一茎三尊形式の宝冠阿弥陀如来座像である。松本市の平瀬遺跡出土の銅製三尊仏は、高さ９．８cm・幅８．２cmで、一本の茎から三本に分岐した茎の上部に像が製作されている。平安時代後期の竪穴住居跡から出土しており、その形状から念持仏として台上などに安置された可能性が推測される。

法楽寺遺跡出土の小金銅仏は、その形状や技術から那智経塚や松ノ尾遺跡出土の仏像と同様に、１１世紀末～１２世紀の平安時代後期に位置付けられる資料と推察される。永承７年（１０５２）に末法の世にはいるとされた末法思想が当時の人々の間に急速に広まり、極楽往生を求めて阿弥陀如来の信仰が高まっていった。この仏像も個人が身近に置いて礼拝する念持仏として、当時用いられた可能性が推測される。また、平安時代後期の宝冠阿弥陀如来および左脇侍立像の鋳型が栃木県芳賀郡市貝町の多田羅遺跡から出土しており、当時信仰の隆盛を背景に宝冠阿弥陀如来像が大量に製作されたと指摘されている。（林宏一「出土金銅仏 －関東地方を中心に－ 」『甦る光彩　関東の出土金銅仏』埼玉県立博物館 1993 年）一方、上田市国分の国分遺跡群からは、平成１１年に錫杖鋳型が出土して注目された。（上田市教育委員会『国分遺跡群』2002 年）この遺跡は現在の信濃国分寺境内から北方へ約１００ｍの地点にあり、信濃国分寺との関係が注目されている。９世紀～１０世紀の平安時代前期のものと位置付けられる３点の錫杖鋳型は包含層から出土した。同時に鞴の羽口・鍛冶滓・銅滓などの遺物も出土しており、信濃国分寺に関係した法具を製作する工房が所在したと推側される。法楽寺遺跡出土の金銅三尊仏も関東地方の事例等から、当地方の在地の鋳物師工房によって製作された可能性が考えられる。また、法楽寺遺跡からは、鞴の羽口や碗形滓・粒状滓などの鍛冶滓、さらに鉄鏃・刀子・鎌・苧引金などの鉄製品の出土もみられる。鍛冶関連遺構として、ＳＫ２５３・ＳＫ３３０の土坑が考えられている。このため本遺跡でも小鍛冶が行われ、

鉄製品が集落内で調達された可能性が高いと考えられる。

3　銅製磬

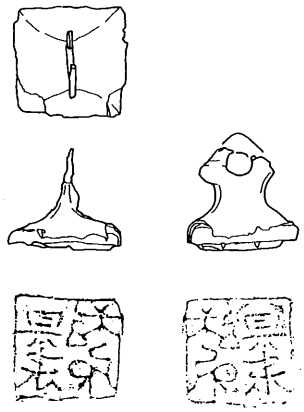
法楽寺遺跡から出土している銅製磬（第５図）の出土状況は明確ではない。磬は銅の鋳造製で、山形の中央に撞座があり、その横に草花文と上に蝶が舞う文様が表現されている。上縁には鈕孔が２箇所ある。磬は欠損部分の法量を推定すると、横幅（絃）１７．３㎝・縦（博）の長さ９．１㎝・上部の肩間の長さ１３．６㎝・側縁の高さ６．４㎝・中央下部の股入の長さ２．８㎝であったと思われる。上縁の鈕孔は直径９㎜・孔の径４㎜である。中央部には、直径４．５㎝の八葉複弁蓮華文を表現した撞座がある。蓮華文の蓮弁は、幅が１．４㎝～１．８㎝と不揃いである。器面は、使用されたことによる摩滅が進行している。中房の内部には、１＋４の蓮子が表現されている。蓮子は径が０．４㎝程度で、形はやや不揃いなものである。この磬は、表裏に同様の文様を表現した両面磬である。表面に向かって右側が２／５程度欠損している。全体に薄手の磬で、厚さは周囲の縁が最も厚い箇所で３．２㎜、上部中央部の薄い部分が厚さ０．９㎜である。この磬の薄さは類例が少なく、この磬の大きな特徴といえる。本磬に鋳出されている八葉複弁蓮華文の文様は、信濃国分寺の創建期の軒丸瓦にも用いられている。この軒丸瓦の中房の蓮子は、１＋６で表現されている。磬の蓮子の表現とは異なるが、信濃国分寺跡から直線で北東へ約３．２㎞の地点にある法楽寺遺跡出土の磬の撞座に軒丸瓦のそれと類似した八葉複弁蓮華文があることは注目される。なお、本遺跡からは、信濃国分寺跡出土の平瓦・丸瓦に極めて類似した瓦が出土している。出土数が少なく破片であるが、信濃国分寺から何らかの理由で持ち込まれた可能性が高い。両寺院の関連性が窺える資料である。

本資料は、平成１３年４月２４日に東京国立博物館法隆寺宝物室長の原田一敏氏（現在、同館上席研究員）に実見していただいた。その結果、極めて薄手であり、裾が開いた形状等から平安時代後期の１２世紀後半に位置付けられる「花卉蝶鳥文磬（かきちょうちょうもんけい）」とのご教示をいただいた。また、撞座の横にある蝶の図柄は横向きで、平安時代の鏡にみられる蝶と共通性があること、その下方の草花文は鏡の文様と共通するが、鏡の文様の方がより繊細さがあること、草花文は植物の葦をかたどったようにも見受けられるとのご指摘もいただいた。この様な横向きの蝶の図柄は、埴科郡坂城町の北日名経塚出土の鏡（米山一政「北日名経塚」『長野県史考古資料編　主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会 1982 年）の裏面の文様にもみられる。この遺跡からは７面の鏡が出土しており、荻蝶鳥鏡に分類される鏡の文様の中に蝶の図柄（前掲文献の写真図版第２図９）が認められる。この経筒の蓋には保元２年（１１５７）の平安時代後期の銘が陽刻されており、１２世紀後半とされる本磬の年代と同時期である。隣接する坂城町からの出土でもあり、注目される。

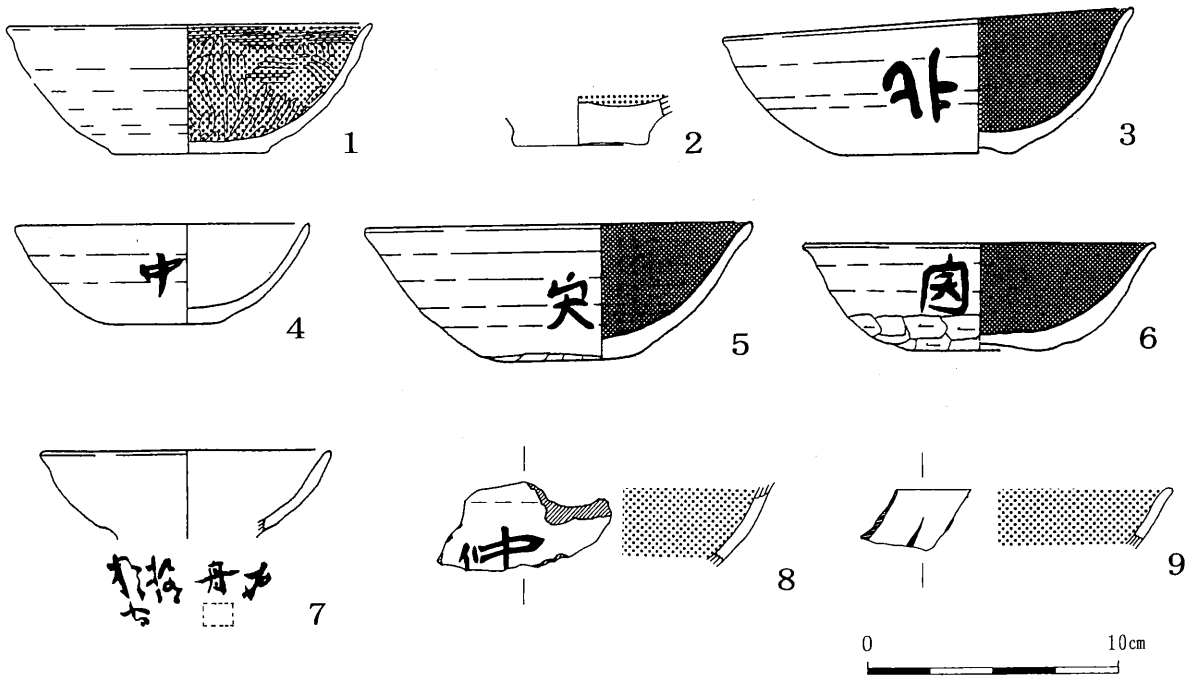
さて、磬は吊り下げて打ち鳴らす仏具で、俗に「うちならし」ともいわれている。元来は中国の古い打楽器で石製や玉製のもので、後に銅製や鉄製のものが使用された。わが国に伝えられてからは主として仏具として用いられ、仏堂内で磬架にかけて使用された。古代の磬は銅製のものがほとんどであり、多くは鏡造りの工人によって製作されたと推測されている。（香取忠彦他『仏教考古学講座　第５巻　仏具』雄山閣 1984 年）長野県内では、昭和１０年に松本市宮淵から長保３年（１００１）銘のある鰐口とともに出土した蝶をかたどった大形の蝶形磬（東京国立博物館所蔵）が出土し、国重要文化財に指定されている。また松本市新村の旧専称寺跡から出土した孔雀文磬（くじゃくもんけい）が松本市立博物館に所蔵されている。この磬は全体の形状から１２世紀末の鎌倉時代初期の製作と推定され、国重要文化財に指定されている。当時の磬の図柄は孔雀文が多数を占め、法楽寺遺跡出土のものの様な平安時代後期の花卉蝶鳥文の磬は類例が少なく、その意味からも本資料は貴重な資料と考えられる。法楽寺遺跡からは、この銅製磬をはじめ、金銅三尊仏・銅製碗・五輪塔などの遺物が出土しており、「法楽寺」・「堂下」などの地字名の存在から、平安時代から中世にかけて寺院がこの地域に存在したことが推測される。また、本遺跡から出土している五輪塔は、その形状から１４世紀後半～１６世紀代の造立に位置付けられ、同じく出土した永楽通宝、洪武通宝の明銭から１６世紀までは寺院か、墓が営まれていた可能性が指摘されている。現在、この寺院については文献などでは確認はできないが、こうした出土資料の分析などを通して、今後そ

の解明が期待される。

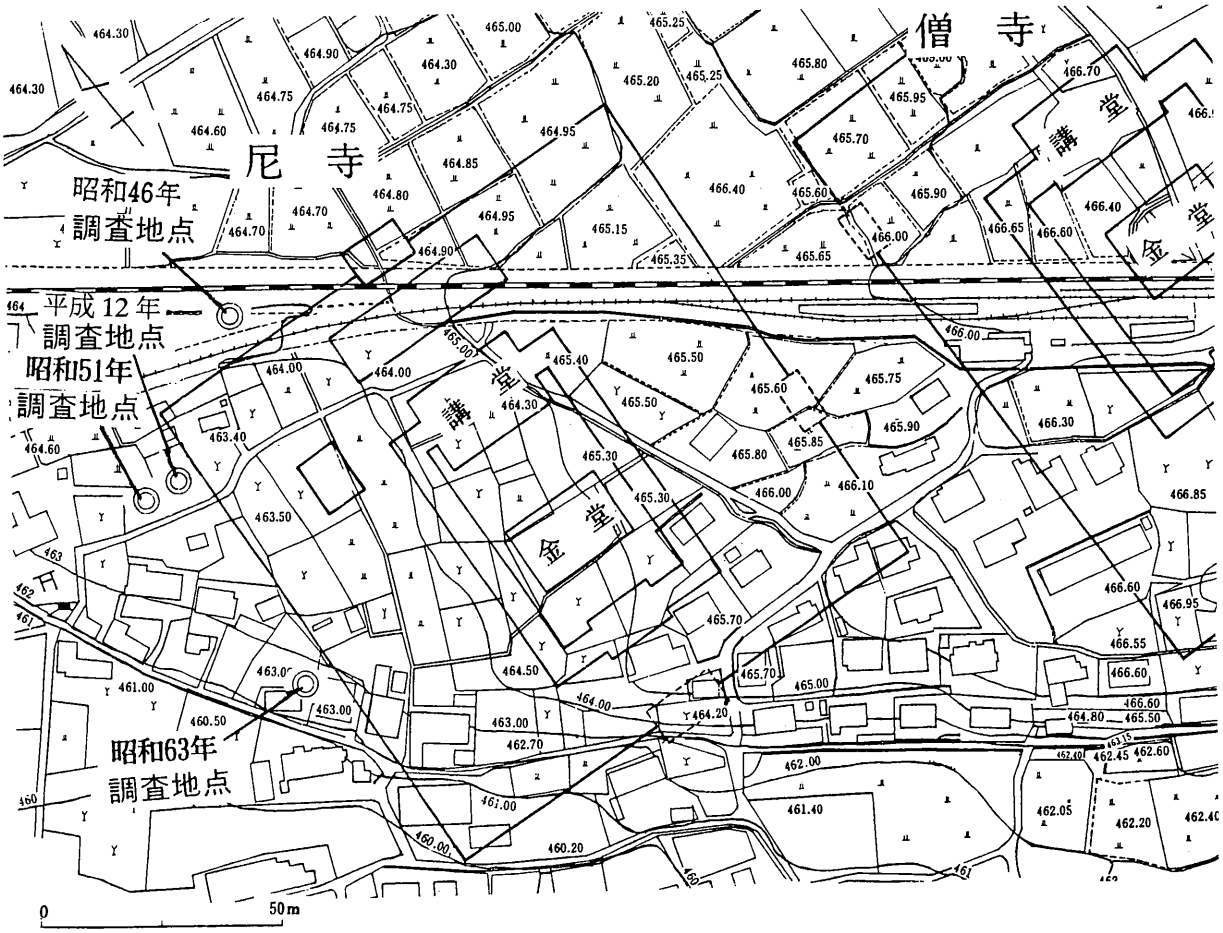
なお、出土遺物につきまして、ご指導、ご教示いただきました国立歴史民俗博物館の平川南氏、永嶋正春氏、東京国立博物館の原田一敏氏、帝京大学山梨文化財研究所の畑大介氏、上田市誌編纂副委員長の桜井松夫氏、上田市誌編纂室長の川上元氏の各先生方に、厚くお礼申し上げます。



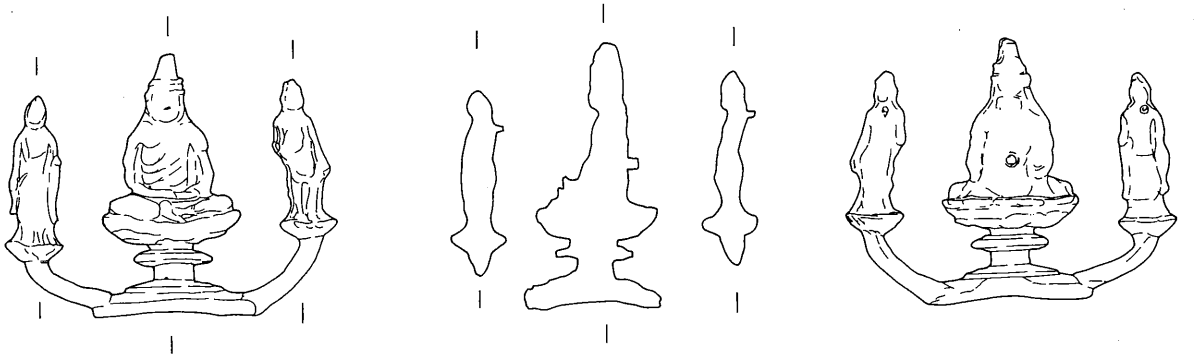
第１図　銅印　縮尺：1/4



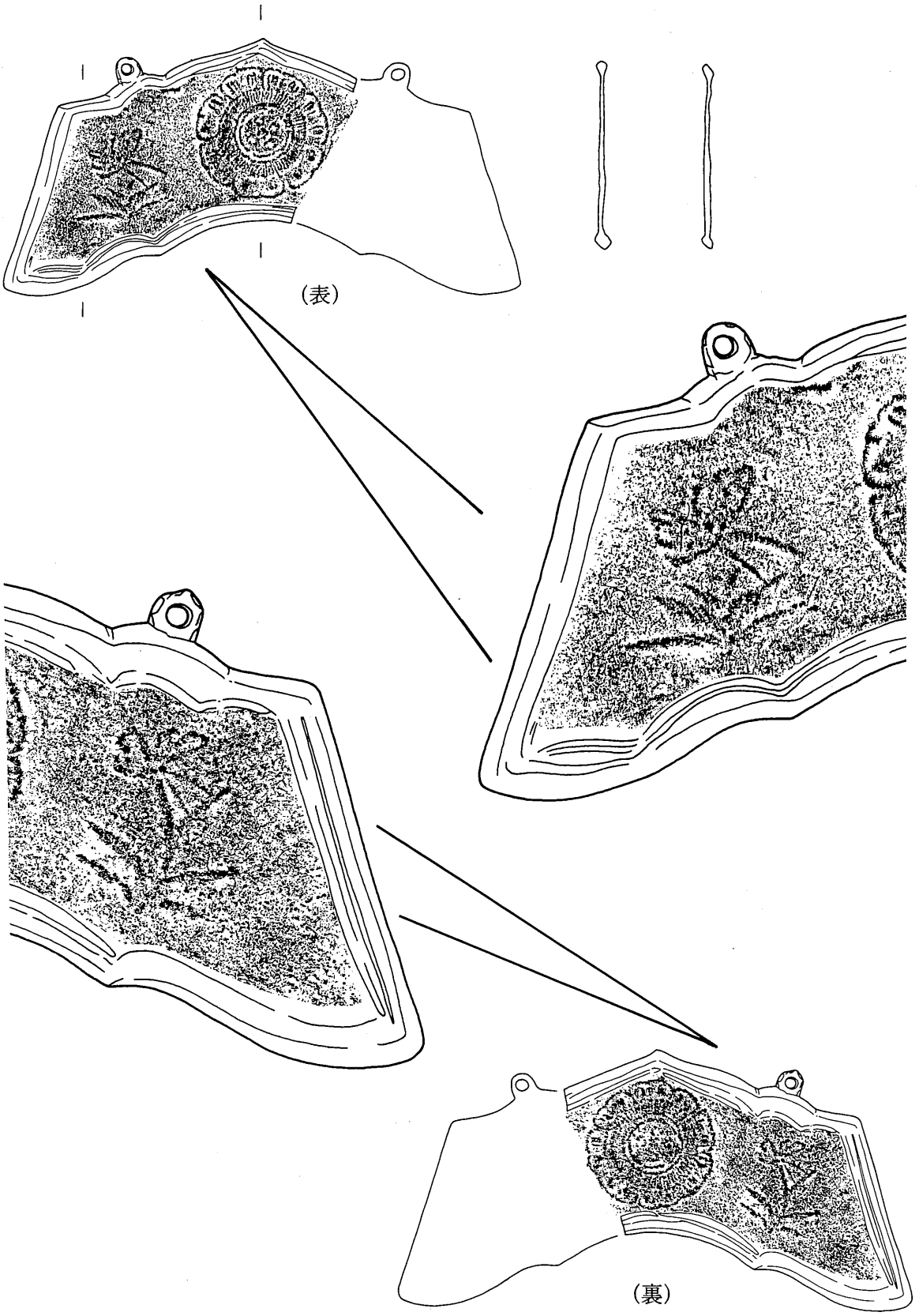
第２図　信濃国分寺跡（明神前遺跡・平成１２年度）出土遺物
（上田市教育委員会『市内遺跡　平成12年度市内遺跡発掘調査報告書』
2001年より引用・一部改変）



第３図　明神前遺跡調査地点



第４図　金銅三尊仏



0　5 cm

第５図　銅製磬

報告書抄録

ふりがな	ほうらくじいせき
書名	法楽寺遺跡
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第９５集
編著者名	尾見智志
編集機関	上田市教育委員会
所在地	〒386-0025　長野県上田市天神二丁目４番７４号　TEL0268(23)5102
発行年月日	２００４年3月２５日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯　東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
法楽寺遺跡	上田市 大字殿城 字法楽寺 大字林之郷 字太田	20203	21	36°24′00″ 138°12′00″	１９９５年 ８月２１日 ～ １９９８年 １２月２４日	47,000 ㎡	上田市川東地区農産物総合出荷施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
法楽寺遺跡	集落・寺院	縄文時代、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代、中世	竪穴住居５１６ 掘立柱建物３２ 溝２７・井戸、墓土坑４２９他	土器・陶磁器・土製品・石器・石製品・金属製品・木製品他	弥生時代後期、古墳時代後期から古代の集落 中世の墓域 銅印・金銅三尊仏・磬・銅碗の出土

おわりに

本報告書が刊行されるまでには、発掘調査と整理作業を合わせて、膨大な時間を費やすこととなりました。調査では数多くの新知見が得られ、期待以上の成果を上げることができました。また、本報告書は地域にとって欠くことのできない歴史資料となったものと自負しています。しかし、調査担当者ごとの経験・専門知識の差が著しい上に、何をどのように記録するかなどの調査方法が決められないまま発掘調査が行われたことから、調査結果に曖昧な部分が生じてしまったことは否めません。そのため、図面と写真が残っているものについては、可能な限りの修正を加えて、本来の遺構・遺物の記録に復元しました。整理作業についても、作業方針の朝令暮改により、遺構・遺物の適正な取捨選択を行うことができたかは疑問ですが、可能な限り修正するなど、最善は尽くしたつもりです。従って、本報告書には、報告内容の大きな矛盾は無いと思われます。しかし、本報告書の詳細な部分については、担当者の経験不足・知識不足から多少の誤りが生じることとなり、様々なご批判もあるかとは思います。それらを謙虚に受け止め、今後の糧にしていきたいと思います。

さて、本報告書が上梓されるまでには多くの方々のご協力・ご理解・ご支援を賜ることができました。とりわけ、暑い夏の日や寒い冬の日でも元気に発掘調査に従事して下さった作業員の皆様にはご苦労をおかけしたことと思います。また、上田市では例をみない長期間にわたる整理作業についても、根気よく作業を続けて下さった皆様には頭の下がる思いです。本報告書が活用され、苦労のし甲斐があった報告書となっていれば幸いです。

上田市文化財報告書　第９５集

法楽寺遺跡

上田市川東地区農産物総合出荷施設建設に伴う
発掘調査報告書
第１分冊（本文編）

発　行　　平成１６年３月２５日
発行者　　上田市土地開発公社
　　上田市教育委員会
印　刷　　田口印刷株式会社